

金光教礼典資料

祭式教本

副読本

(かみゆ版)

白紙

本資料は、私が金光教学院で祭式の講師をしていた際、その経験や研究をもとに編集したものである。

この資料作成には、私が学院生の時のテキスト、職員時代に発行した「礼典」を参考に、一から執筆を進めた。

この資料は、平成十年の金光教教規改正により、祭典、儀式の定義、種類、名称が改訂されたことと、平成五年四月十日以来、会堂での祭典も椅子を用いた作礼となり、それを機に、各地での祭典へも、椅子の作法が普及しはじめたが、このことにより作法の不統一が生じるようになった。よって、改めるべきは改めることとし、全教の教会における実情に鑑みて、取り入れるべきは取り入れることとした。

具体的には、第三部「行事作法」の十二「立礼における作法・椅子を使った作法」を、昭和三十四年現祭場での祭典が執行されるようになって以来、全教の教師に普及されていた立礼（椅子を用いた立礼）を基準に、椅子を用いた作法を新たにまとめた。また第四部の「儀式の種類と祭員の配役」を現行教規に則った。

なお、作成にあたって本部教庁発行の『祭式教本』（昭和五十七年）、『祭式教本 追録（椅子礼）』（平成十四年）、『調饌テキスト』（昭和五十二年）、『今月今日 金光教信奉者必携』（平成十二年）を参考にさせて頂いた。

# 目次

## 第一部 祭典奉仕の心構え

### 一 教会と祭典

### 二 祭りの歴史

### 三 祭典奉仕の心得

### 四 衣紋について

### 五 典楽、吉備舞について

### 六 直会について

## 第二部 基本作法

### 一 座・位（正中／上座・下座／右側・右面／左側・左面）

### 二 姿勢

### 1 正座

### 2 正立

### 3 着椅

### 三 笏・桧扇

### 1 持笏（割笏）・持扇

### 2 正笏・正扇

### 3 置笏・置扇

### 4 懐笏・懐扇

### 5 挿笏

### 6 把笏・把扇

## 四 進退

### 1 跪居

### 2 起座（進む起座／退く起座／回転起座）

### 3 着座（座前着座／座後着座）

### 4 蹲踞

## 五 座起

### 1 行歩（進行／逆行／屈行／止立）

### 2 曲折

### 3 回転

### 4 膝行・膝退

### 5 段の昇降

## 六 敬礼

### 1 揖（座揖・立揖／深揖・小揖）

### 2 拝（座拝／立拝／再拝／兩段再拝）

### 3 敬礼（深い敬礼／浅い敬礼）

### 4 拍手（四拍手／拍交拍手／忍手）

### 5 拝礼

### 6 叉手

## 第三部 行事故法

### 一 祭具の進撤

### 1 三段・三持・三手

2	祭具の持ち方	
3	贊者の作法 (玉串案・膝衝)	
4	後取の作法 (祭詞・玉串)	
二	神前における着座・起座	54
三	祭主の作法	55
四	捲簾・垂簾 (開帳)	58
五	献饌・撤饌	59
1	定位配置	
2	神饌伝供	
六	奉幣行事	62
七	典礼の作法	65
八	先唱役の作法	66
九	参向・退下	67
十	一人で仕える祭典作法	68
十一	信徒の祭典参加	69
1	取次唱詞先唱者	
2	玉串奉奠者	
3	補助贊者	
4	その他の役割 (事前準備も含む)	
十二	立礼における作法・椅子を使った作法	74
1	自席へつく作法	

2	自席を離れる作法	
3	神前着座の作法	
4	神前起座の作法	
5	神前に案 (椅子) を進める時 (贊者)	
6	神前の案 (椅子) を撤する時 (贊者)	
7	祭詞 (玉串) を手次ぐ時 (後取)	
8	祭詞を下げる時	
9	蹲踞	
10	敬礼	
(参考)	その他の作法	78
1	大麻行事	
第四部	儀式の種類と祭員の配役	
一	儀式の種類	81
二	恒例儀式	83
三	諸祭 (臨時儀式 / 申請儀式)	85
四	祭員の配役	87
第五部	祭式の次第	
一	神前における基本の式次第	91
二	本部広前月例祭次第	92
三	天地金乃神大祭 (生神金光大神大祭) 次第	93

四	霊前における基本の式次第	95
五	本部広前霊祭次第	96
六	地鎮祭次第	97
七	結婚式次第	99
八	葬儀式次第	103
1	終祭	
2	告別式	
3	終祭に引き続き告別式を行う場合の次第	
4	火葬の儀（火葬場祭）・埋葬の儀	
5	葬後の儀（葬後霊祭）	
九	新霊神祭	110
1	旬日祭	
2	五十日祭並びに合祀祭	
3	墓前祭	
十	改式祭	114
十一	宣教	115
第六部	調饌	
一	お供えの意義	117
二	調饌の心構え	117
三	調饌所と調饌用具の整備	118
四	神饌の予定と品物の準備	118

五	盛り方について	118
六	品物と順序	119
七	献饌の順序	121
補足	魚のくくり方	122
第七部	裁ち物	
一	覆面	131
二	敷紙	132
三	奉幣	133
四	玉串	137
五	御饌袋	139
六	八垂・二垂	141
七	つのかざり	142
八	三輪かざり	144
九	掛け緒	146
十	御神米	147
十一	ご献備のお包み	150
卷末付録		
	祭服の着付け	153
	唱詞（霊神唱詞・火葬の儀唱詞）	153
	祭詞の浄書	159
	申請儀式調査票	160
	写真（神饌の完成）	166

# 第一部 祭典奉仕の心構え

一 教会と祭典（『今月今日 金光教信奉者必携』より）

## 1 教会とは

教会は、それぞれの地域にあつて、生神金光大神取次の内容である、結界取次と各種活動によって、「神と人とあいよかけよで立ち行くあり方を世界に現す」との天地金乃神様の願いを實現していく拠点である。結界取次によって、参ってくる人々の願いやお礼を神様に取り次ぐとともに、信心による生き方を教え伝えていく拠点であり、さらには金光教を世に伝え、人を助けていく拠点でもある。

教会では、取次をはじめ、日々の勢祈念、月例祭・大祭などの儀式を行い、信奉者の育成や本教を社会に知らせるために、各種活動が行われている。

## 2 祭典とは

祭典は、取次を形に現したものであり、個々人のお礼やお願いを祭主が祭詞をもって神様に取り次ぐことを中心とした儀式をはじめ、儀式のあとに行われる教話などを総称して祭典と言う。

祭典は、神と人との本来のかかわりを、あらためて確かめるものであり、信心を進める私たちにとって欠かすことのできない大切なものである。

祭典では、信心する者同士が一堂に会し、この道にご縁を頂き、ここまでおかげを受けてきていることを喜び合い、ともに神様へお礼の気持ちを現す。さらに、ご神願を担う私たちとして、世界の平和と人々の助かりを願っていく。

## 3 教会活動としての祭典

祭典は、定められた日時に執り行われるので、都合をつけてお参りするとともに、一人でも多くの人がお参りできるように誘い合うことが大切である。

日ごろ、神様に心を向けて生活を進めている私たちであるが、祭典日には、あらためて神様を中心にした生活をめざし、参拝のお繰り合わせを願う。また、祭典の事前の準備も、神様のご用として積極的に参加し、あ

## 二 祭りの歴史

### 1 教祖ご在世中

りがたい気持ちで祭典日を迎えたい。参拝できたときには、そのことをまず喜び、神様にお礼申し上げる。また、儀式のなかでは、祭詞、神様への真心を現すお供え物、神様へわが心を向けての玉串、また、参拝者が一体となつての拝詞の唱和など、それらの一つひとつに実意をつくし、今あるいのちへの喜びと、神様への感謝、そして不行き届きのおわびや祈願をこめ、姿勢を正して仕える。

儀式は、主に教師が祭服を着用して奉仕するが、信奉者もまた、調饌や、典楽、コーラス、そのほか儀式的補助など、神様への真心の奉仕を、ともに仕えることが大切である。

毎年の九日十日（陰暦）は金光大神、二十一日二十二日（陰暦）は天地金乃神の「ご縁日」とされ、とくに九月二十二日（陰暦）は「年に一度の祭り」として大切にされていた。この祭りは元治元年から始まり『金光教典』お知らせ事覚帳八・4）、提灯が下げられたり幟が立てられるなどしだいに賑やかになるが、明治六年以降は政治的圧迫により自重せざるを得なくなる。

この日には遠近から大勢の参拝者があった（「広前歳書帳」・教祖御祈念帳）が、祭りといっても、当時は何ら祭典らしい儀式が行われた様子はない。「ご縁日を忘れさせねばおかげがあるぞ。忘れたらおかげはなし。親の恩を忘れぬための法事のようなものぞ。何事にも恩を忘れてはならぬぞ」（『金光教典』理一市1・35・2）、「今日はお祭り日であるから、しつかり信心せよ」（同 理二伍慶1・1）といったご理解に示されている通り、神の恩に対して、改めて感謝の心を向けるべき日であり、祭典の形式よりも心のありようこそ重きがおかれていた。教祖は心で祭りを仕えられていたと言え、いわば「信心祭り」であったと言えよう。

### 2 教祖ご帰幽（教祖の葬儀）

明治十六年に教祖がご帰幽になり、十三日葬儀が仕えられた。これは「一教の教祖を送るにふさわしい格調をそなえたものではなかった。ただともかくも、金光大神の弟子たちの手によつて葬儀のすべてが営まれることになったのが、せめてものことであつた」（『金光大神』509頁）とあるように、これが本教の祭典の起源と考えられる。



### 3 神道金光教会時代

教団組織化の願いの中、明治十八年から三十三年までは、神道金光教会として布教に当ることになった。したがって、この間、本教は、神道関係の儀式形態に拘束された祭典を行うことになる。

### 4 別派独立以後

明治三十三年に金光教として独立。以来、本教独自のものを生み出したいと願って、神道の儀式を基本に、先輩諸師の工夫と努力が続けられた。

祭典後の教話や共励会は、本教独自の歴史を持つ。また大麻行事も、本教としては、ご無礼不行き届きをお詫びし、改まった心で祭典を奉仕させて頂くための行事ととらえ直して行った。その他、お供えの盛り物も形を整え、装束をはじめ作法や祭具にいたるまで、本教独自のものを生み出すべく努力を続けた。

### 5 「儀式服制等審議会」の設置

教団として昭和二十九年四月に、「儀式服制等審議会」を設置した。長年にわたる審議の中で、教祖の願われる祭典のあり方が真剣に求められて来た。そして、教祖百年の年（昭和五十八年）に、儀式・拝詞・祭服の制定などが行われた。

### 6 平成の祭式・作法の変更

平成五年四月、大祭を会堂でも執行することになり、その関係上、神前霊前の几帳が撤去されると同時に、会堂での祭典も椅子を用いた作礼となった。その流れを受けて、全国各教会でも椅子を用いた祭典が広まった。しかし、それと同時に作法の不統一や乱れが生じることもあった。そのことから平成十四年九月、本部広前月例祭の椅子式作法を「椅子礼」と称し『祭式教本 追録』としてまとめられたが、祭場での祭典で用いられてきた伝統的な「椅子を用いた立礼」との整合性が乏しく、更に混乱を招くに至った。（章を改め、「椅子を用いた立礼」については詳しく解説する）

また、平成十年の金光教教規改正により、祭典、儀式の定義、種類、名称が改訂された。

### 7 平成二十年の『祭式教本』『調饌の手びき』の改訂

平成二十年六月には、従来のと『祭式教本 追録』の合本と作法の統一を目的に、新たに『祭式教本』が改

訂され、十二月には従来の『調饌テキスト』や『調饌の手引き』を基本に、現在、本部広前での調饌手順や裁ち物の方法についてまとめた『調饌の手びき』が発行された。

本教の祭りは、心を込めて奉仕し、それが形にあらわれて来たものである。

今後とも不断の努力が続き、教祖様の祭りのあり方にそった内容が生み出されることを願う。

### 三 祭典奉仕の心得

祭典を奉仕させて頂く上での心得をまとめてみる。

#### ① 信奉者みなでお仕えさせて頂くものである。

つまり、教師も信徒も一体となつて、共に神の氏子として奉仕させて頂くのである。つい、お祭りは先生が仕えられるもので、信徒は、お参りさえすればよいという考えになりがちだが、これは、たいへんな心得違いである。心が一つにそろわないお祭りは、寂しい。

#### ② 祭典は、無言の教導である。

金光教の祭典に触れただけで、なんと金光様はありがたいものであるなあ、と感じさせるほどのものでありたい。このお道の生き方が肌で感じられるような祭典になるためには、心を込めてお仕えするとともに、その心が形にあらわれ、厳肅に奉仕されねばならない。

そこで、「心と形（作法）は、車の両輪のごとし」と言われている。いくら、心を込めているといっても、形が整ってなければ、本当に祭典を奉仕しているとはいえない。無駄のない、理に合った作法を身につけるには、普段の稽古が大切である。

教師だけでなく、祭典に参拝している一人一人の作法も問題になる。取次唱詞の先唱者や、玉串奉奠者の作法、祭典の補助者や楽人の態度、みな課題である。

#### ③ 人間として、最高の真心をあらわすのが祭典である。

自分はどうであろうと、神様には、最高のものをもってお仕えさせて頂きたい、という心で奉仕することで

ある。どんなに手間ひまがかかろうとも、心を込めて奉仕する決意を持ち、ありつたけの真心で奉仕する。

人間にとつて、都合のよい、楽であるというような理由が先に立つようではならない。簡単でよい、安い、人手がかからない、短時間で出来るなどの理由で、願いを曲げやすいところがある。こうせねばならないではなく、こうせざるを得ないというものを積み上げていくのである。

#### ④ 身体を整える。

まず飲食に気を配り、体調を整えておかねばならない。身だしなみを整え、清潔にする。髪を整え、爪を切るなどにも心がける。

#### ⑤ 工夫して取り組む。

以上のことが、徹底し、実際に行動にあらわれるには、工夫と努力がいる。しかし、みんなで話し合い、出来ることから変えていくことが大切である。

例えば、祭典の開始時刻に人がそろわないことを反省し、お互いによびかけあったり、祭典開始前に、一同そろって御祈念をしてから祭典を始める、という工夫もある。また、直会準備のため、祭典に参拝できないという反省から、教話が終了するまでが祭典と確認しあい、その間は炊事御用を中止し、みんな広前に詰めるべく、作業時間と内容を変更する工夫もある。

これらの限らない工夫の心が、すばらしい祭典を生み出す。

## 四 衣紋について

### 1 服制の規定

本教の祭服には、教主祭服（男子服、女子服）と教師祭服（男子服、女子服）があり、祭典の種類と規模により、第一種服、第二種服、第三種服、葬儀服に分けられている。（教令 教規施行細則 第五条）

男子の第二種服は、第一種服の単（ひとえ）をはずした形であり、賛者等が着用しているものを指す。第三種服は、教話などの時、講師や読師が着用している。

なお、葬儀服は第一種服に準ずると定められているが、地方の実情により、第二種服で奉仕している例もある。

2 更衣の心得

る。さらには、白袴を着用している場合もある。

各教師祭服の規定は、次の通りである。

※以前使用されていた祭服は、規定はなくなったが、当分の間は着用してよいとの教監連帳（五七監第六号）が出たことにより、現在も使用されている。

祭服の更衣は、身体を清潔にし、手などを洗って、足袋から始める。

着付けは、一番下の襦袢じゆばん、白衣から、単、袴、上衣と正しく付けていかないと、途中で修正することはできない。全部脱いでやり直すことがないよう、下から順に正しく丁寧に着付ける。

更衣の手伝いの御用に当る更衣係（衣紋方えもんがた）は、まず、準備

品をそろえ、次に脱いだ衣類を片づける。着付けになったら、

色々と手伝いをさせて頂くが、次に何をするか、どのようにす

るかなどについて、習熟しておく必要がある。研修の機会があ

れば参加し、実際の奉仕の中で不明な点はよくたずねて、疑問

を明らかにしておくことが大切である。

仕上がり具合の点検も欠かさないこと。襟元えりもとの様子、布地の

ねじれ、裾回りなどに注意を払う。早めに更衣をすませ、落ち

着いて祭典を待つようにしたい。更衣がすんだ祭員は、原則と

して飲食や喫煙はしない。

男子の場合、祭帽の大きさを調節しておく。また、着座の

時の回転で、裾がめくれやすいので注意する。

祭典終了後、汗などで衣類が濡れている場合は、乾燥させる。

たたむ時には、折り目を増やさないように注意する。（参考とし

て、着付けとたたみ方を、巻末に記す。）

教師祭服							
葬儀服	女子服			男子服			種類
	第二種祭服	第三種祭服	第一種祭服	第三種祭服	第二種祭服	第一種祭服	
構成、様式等は、第一種服に準ずる	扇袴格衣	扇袴上衣	扇袴上衣	笏袴教衣	笏袴上衣祭帽	笏袴単上衣祭帽	構成
	有彩色、紋の有無自由 女性袴紫無紋 桧（無地十二橋）	白又は有彩色、紋の有無自由 女性袴紫無紋 桧（無地十二橋）	白有紋 女性袴紫無紋 桧（無地十二橋）	黒、紋の有無自由 差袴藤色無紋 木笏（櫟の類）	黒有紋 白又は有彩色、紋の有無自由 差袴藤色無紋 木笏（櫟の類）	黒有紋 白有紋 朱菱綾有紋又は朱無紋 差袴藤色無紋 木笏（櫟の類）	様式等

## 五 典樂、吉備舞について

### 1 典樂の歴史

「金光教典樂」は、本教の祭典樂として發達した。祭典時には、「吉備樂」と「中正樂」が使用されているが、総称して典樂と呼んでいる。

吉備樂は、その名の通り吉備の国（岡山）に生まれた。岡山藩は、文化の奨励につとめたので、雅樂が隆盛であったという。その中で傑出した岸本芳秀きしもとよしひでが明治の初めに創始したのが吉備樂で、これは、雅樂をより近代化し、他の要素も取り入れるとともに、より親しみのあるものにと願うたことであつた。

吉備樂は、家庭樂、余興樂、祭典樂に大別される。祭典樂は祭事に合わせて演奏されるもので、祭典に応じた舞も奉納される。

本教の祭典の中で、組織的に吉備樂による奏樂奉仕がなされる兆しを見せるのは、明治二十三年十月の教祖大祭からであつた。この年の四月、本部参拝した小林岩松（豊原教会長）に佐藤範雄（芸備教会長）が、「何と、この道にも樂があればよいがのう。樂は樂でも、吉備樂の樂ぞ」と言われ、小林は「やり手がなければ、私がやらせて頂きます」ということで、樂人（典樂奉仕者）を募り、岸本芳秀門下を頼み、猛練習を続けて、初めての奉仕がなつたのであつた。

本教に本格的に吉備樂が広まつたのは、尾原音人おほらおとんどからである。尾原は吉備樂に心をうたれ、直ちに入門して手ほどきを受け、また、雅樂の勉強も進めた。明治三十四年、尾原は本部に新設された樂部がくぶの樂長がくちやうを拝命し、この年、吉備樂講習会を開いた。これを機会に樂による御用を志す者が一挙に増加した。

尾原は、大正三年に、金光教の祭事用樂譜の創始を發願し、研究を重ねて、本教独自の中正樂を創出した。さらに、二代樂長岡田音吉おとしきちも作曲を続けるなど、道の先輩達の努力により、本教の典樂が形を整えた。現在では「金光教典樂会」が組織されている。

吉備舞には、吉備樂の余興樂の流れをくむ歴史舞と、本教で独自に考案された吉備舞がある。いずれも、本教祭典の中では、舞人まいじん（吉備舞奉仕者）は舞を神様にお供えしている。

楽人、舞人とも、心をこめて奉仕させて頂くため、研修を重ねている。祭員と同じように、真心で祭典を奉仕させて頂きたいとの願いから、祭典の習礼（練習）の段階でも、楽人一同そろって参加し、祭典奉仕にのぞむという伝統が生まれて来た。また、奏樂奉仕を通して、音を神様にお供えさせて頂くのだという意識も生まれている。

典樂と作法は、関連が深い。歩行の呼吸と樂の拍子は同一であるし、奉幣、玉串などは作法に合わせた曲の構成になっている。また、捲簾行事のように、曲の始まりと作法の開始の打ち合わせが必要な場合もある。原則として、附けと呼ばれる所から動作をおこす献饌のような場合が多いが、樂が始まってから一呼吸おいて出る祭主の移動時のようなものもあれば、祭員の動作に合わせて樂を開始するものもある。事前によく打ち合わせをし、祭員と楽人がおたがいに合わせようという気持ちが必要である。

また奉仕者は長期展望を持つての育成が必要となる。技術と共に、奉仕の心が伝承されるべきである。現在では、コーラスや楽器演奏も祭典に取り入れられており、典樂と共に奉仕に当るようになっていく。

## 六 直会について

本教では、祭典終了後、神様のお下がり頂くことを直会という。

直会として頂く神様のお下がりには、神前から下げた神酒、餅、魚貝類、野菜、乾物、果物、菓子、またそれらで作られた料理がある。さらには、冊子類、書籍、記念品などもある。直会を、神様から頂くお下がりとして大切にする、神様はその心をお喜び下さる。

祭典後に、信奉者が相集い、席を設けて料理などを頂きながら行うものを直会宴という。人は神様のお徳をたたえ、神様のお下がり頂きながら、神も人もともによるこび合う集いが、本教の直会宴である。あくまでも宴会ではない。ただの飲み食いの場にならないよう心掛ける。

うちとけた和やかな雰囲気の中で、その日のお祭りを頂き直し、参拝者相互にお話を聞いたり、生かされている喜びとともに語り合うという働き合いが生まれてくるのが大切である。遠隔地からの参拝者、入信間もない方、初めて参拝された方などがおられたら、率先して心配りをし、声をかけ、お話をすることも必要である。ご縁を頂く信奉者が一堂に会するので、信心上の働き合いが生まれる絶好の機会である。

## 第二部 基本作法

祭式の作法には、「座礼」と「立礼」がある。「座礼」は畳などの上で座って行う作法であり、「立礼」は野  
外などで立って行う作法である。これ以外にも、「椅子を用いた立礼」があるが、これは概ね「立礼」に準じ  
るので、「立礼」の項に含めておく。

なお、この第二部では、「座礼」を中心に、作法の基本となる項目に  
ついて述べる。「立礼」および「椅子を用いた立礼」については、第三  
部の行事作法の中にまとめてある。

### 一 座位

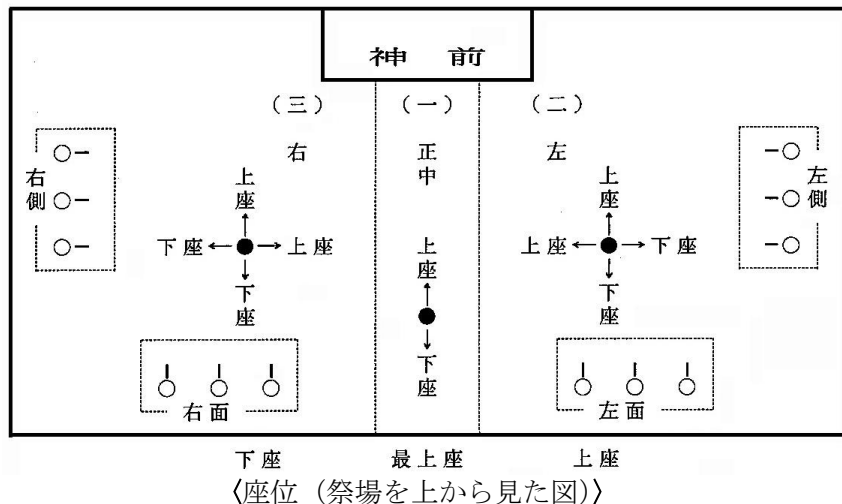
祭場においては、常に上座、下座の別を明らかにし、それにもとづ  
いた作法を行う。

その場合に基準となるのは、神前と正中せいちゆう（神前の中央に縦に引いた  
と想定した線）である。座位判別の原則は次の通りである。

- ① 神前に近い方を上座とし、遠い方を下座とする。
- ② 正中を上座とし、左（向かって右）を次、右（向かって左）  
をさらにその次とする。

祭式作法では、まず神前の位置が基準となる。神前に近い所が上座、  
遠い所が下座となる。これは、祭場を縦方向に見た場合である。(①)

祭場を横方向に見た場合には、左右の区別が問題になる。もちろん、  
横に見ても、神前よりの距離が異なっていれば、近い方が上座で遠い



方が下座であるが、神前から左右それぞれの位置が等しい距離にあるときには、左右に順位をつける必要が生じる。この場合、神前の正面である正中を上座とし、次に左、その次が右の順となる。(2)

座位で場所を示す場合の「左」「右」とは、常に神前から見た「左」、神前か見た「右」のことである。これは、神前に向かっていている者から見ればそれぞれ、右、左と反対になる。ただし、自己の動作を示す場合の左、右は、自分の左足、右足、左手、右手をさす。

正中とは神前の中央正面をいうが、神前の真中の一つの直線を想定する事もあるし、ある程度の幅を考える事もある。後者の場合は、八足の足の幅程度とする。

左面(右面)とは、正中より左(右)にあつて、神前に対面した位置のことである。また、左側(右側)とは、神前の左(右)にあつて神前に側面を向け、正中に対面した位置のことである。つまり、祭場では、正中か左面、右面、左側、右側のいずれかの位置になることになる。

正中にいるときには、神前から遠近による上下の区別はあるが、左右には上下の区別がない。従つて正中では、他の位置の場合と異なる特例の作法が用いられる。

しかし、一步正中を離れた場合には、必ず上下の区別が生じる。この場合、上下の区別は、二つの方面から考えられる。一つは、神前からの距離であり、一つは、正中からの間隔である。従つて、常に「神前か、正中に近い方を上座とする」ということを頭に置いて、それに即応する作法を行わねばならない。以上のことをふまえて作法の原則をまとめて示すと次のようになる。

原則(正中以外)	進下退上起下座上
正中での特例	進左退右起右座左

つまり、正中にあるとき以外は、前に進むときには下座の足から進み、退くときには、上座の足から退き、



## 二 姿勢

立つときときは下座の足から立ち、座るときは上座の足から座るといふことである。正中では特例の場合、左足から進んで、右足から退き、右足から立って左足から座るといふことである。

姿勢を正すことは作法の基本である。無理に作り上げた姿勢のことではなく、自然な姿をいう。

この正しい姿勢は、敬虔の心をあらわすものであり、頭を傾けず、体を真っ直ぐに保ち、丹田たんでんに力を入れる。特に、頭から腰までその中心を一直線に貫く気持ちが大切である。

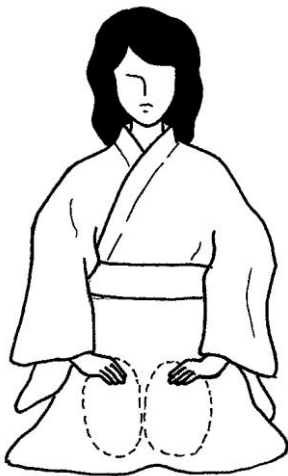
起居進退、敬礼作法はもとより、笏・桧扇の扱いかた、祭具の扱いかたに至るまで、この正しい姿勢（自然の姿）が基礎になる。

### 1 正座（座ったときの姿勢）

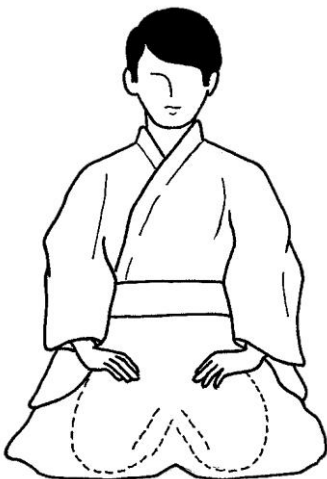
▼女子・両足の親指を、右下左上に重ね、両膝を接し、両手を左右の膝上中程に控え、上体を正しく（首で着物の襟を押すと同時にあごを引くと背筋を正すことができる）して座る。桧扇はその位置で持つ。

▼男子・両足の親指を、右下左上に重ね、両膝を少し開き（握りこぶしが二つ入る程度）、両手を左右の膝上中程に控え、上体を正しく（女子と同様）して座る。笏はその位置で持つ。

▼着眼・二メートル（または一間）前方を半眼はんがんで正視する。



〈正座（女子）〉



〈正座（男子）〉

## 2 正立（立ったときの姿勢）

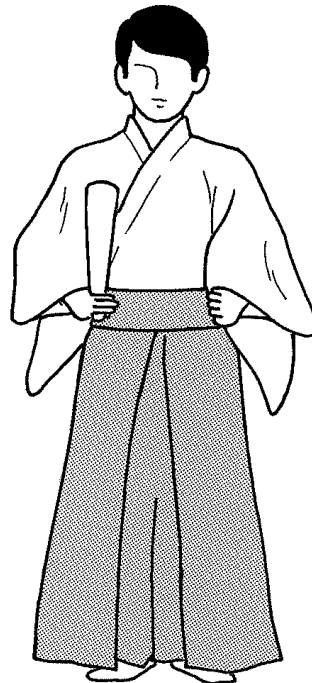
▼女子・両足を接してそろえ、両手を下腹の左右に控え、体を正しくして立つ。扇を持つときは、手を少し上部に移し、左手を腰部に、右手をやや下げて、腹部の正面で持つ。

▼男子・両足のかかとを接し、少し爪先を開き、両手を下腹の左右に控え、体を正しくして立つ。笏を持つときは、手を少し上部に移し、臍の左右の位置で持つ。

▼着眼・四メートル（または二間）前方を半眼で正視する。



〈正立（女子）〉



〈正立（男子）〉

## 3 着 椅（椅子に座ったときの姿勢）

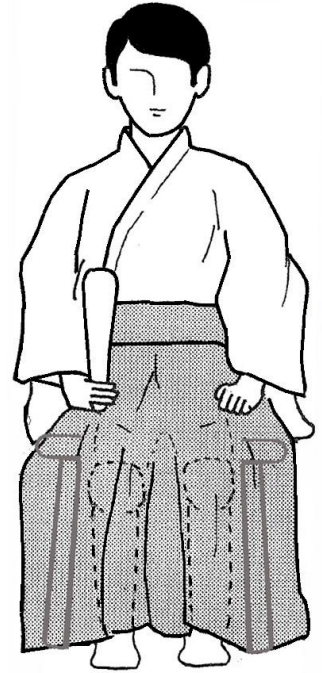
▼女子・上体は正座の場合と同じ。椅子に深く腰掛け、膝より下は垂直にして、両足の裏を地に着ける。椅子が高い場合には浅く掛けて、足裏を地に着ける。爪先と左右の膝頭は開かず、両足の内側を軽く接する。

両手は膝の中間に軽く置く。扇を持つときは、その位置で持つ。

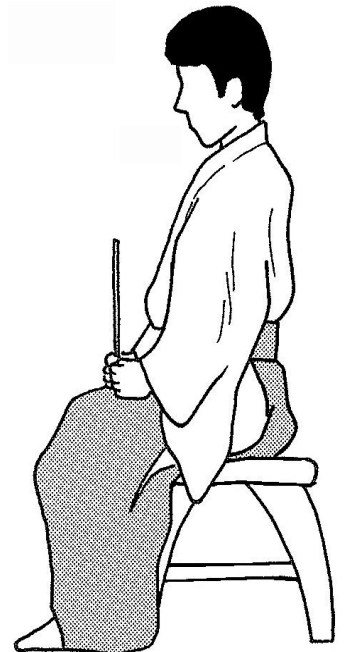
▼男子・上体は正座の場合と同じ。椅子に深く腰掛ける。膝の間を握りこぶしが二つ入る程度開き、膝と足先を左右平行にして両足の裏を地に着ける。膝の間隔が広がらないよう注意する（爪先を閉じる気持ちになる）と膝が広がらない。笏を持つときは、その位置で持つ。

▼着眼・三メートル（または一間半）前方を半眼で正視する。

### 三 笏・桧扇



〈着椅（正面）〉



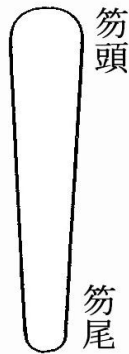
〈着椅（側面）〉

（注）

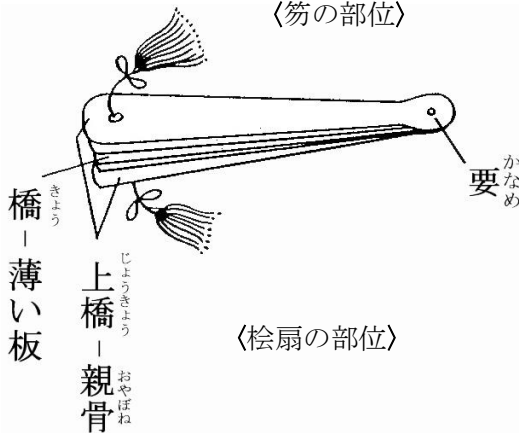
- ・正座、正立、着椅の着眼点は、大体の標準であり、実際は各自の身長に応じて変化する。
- ・笏や桧扇を持たない方の手は、親指で中指の第二関節を軽く押さえ、軽くにぎるようにする。
- ・肘は張りすぎるのも、すぼめすぎるのもよくない。

笏は、材料により表裏がある。（概ね、板目の場合、木の外になる方を表とする。）しかし、実際には区別するのはなかなか困難である。そこで持笏したときに外に向いている方を表とする。ただし、一度持笏したならば、何回置笏、把笏等を繰り返しても、笏の表裏を変えてはならない。

桧扇は、桧の薄い板で作る。手元を要で締め、先の方を糸で編んでいる。扇の上下にある親骨を上橋、中の薄い板を橋という。正扇の場合、扇を五橋ばかり開くというのは、この薄い板五枚分のことである。



〈笏の部位〉



〈桧扇の部位〉

# 1 持笏（割笏）・持扇

## （1）笏の持ち方

親指と小指は内側に、他の三指は外側にかけて、右手に持つ。又、小指の下端は、笏尾しやくびの下端にそろえる。

親指は、爪を上、指腹を下にして、反らしたり曲げたりせずに、親指の横を軽く笏の内側にそえる。小指は、内側からいささか力を加えるようにして持つと、笏が前に倒れない。

外にかける三本の指は、指の間が開かないようにし、軽く水平に持つ。その指が少しでも斜めになると、色々な悪い形が生じる。例えば、揖をするときに手下腹部にきたり、拝をするときに肘が体に寄りすぎたり、笏で顔を逆なですることになり、不自然な姿勢の原因になる。

笏は、左右に傾けたり、前後に倒したりせずに、垂直に持つ。

笏は、「我が身のゆがみを直すための定規なり」といわれている。笏が前に倒れたり、横に傾いたりするのは、心が緩んでいるか、姿勢が崩れているためである。

また親指の先が外から見えるほど深く掛けると、握っているように見えるし、反対に余り浅く掛けると、つまんでいるように見えるから、適当に加減することが大事である。

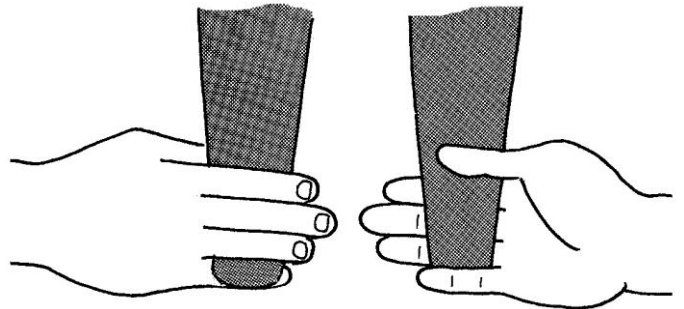
## （2）持笏の位置

笏を持った右手は、正座や着椅のときは膝の中程に、正立のときはわき腹、即ち臍の右方に来る。正座から跪居（後述）になると同時に腿の付け根に、また、椅子から立つと同時にわき腹に移す。

祭服を着用している場合は、祭服に軽く接して持つ。

笏は、常に表を外側にし、裏を内側にして持つ。その表が座、又は肌につくことはない。

左手は、祭服の袖の端を親指と人差指で軽くつまみ、他の三指は人差指にそろえて軽く握り、右手と相対す



〈笏の持ち方〉

2 正笏・正扇

(1) 正笏

持笏の姿勢から、両手を同時に腹部正面に移し、右手の上に左手をそろえて重ねる。両手は体から握りこぶし一つ入れたくらい離して、臍の位置に構える。このとき特に姿勢を整え、笏はまっすぐ立てる。

左手の親指は、笏の内側で右手の親指と小指の間に水平に置く。左手親指の爪を上、指の腹を下にし、指の

る位置に置く。このとき、左手の甲は袖の端に覆われて見えないようにする。又、右手の方もなるべく袖の端に覆われている方がよい。

(注)

・白衣又は着物で稽古する場合は、袖が短いので、やむを得ず左手の親指を中指の第二関節に当て、笏を持つときのように、手のひらを腹部に向けて、右手と相対する位置に置く。

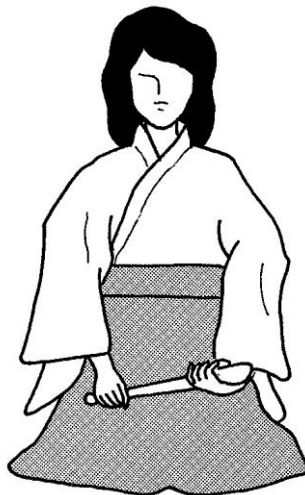
・持笏の形から、割笏と呼ぶこともある。

(3) 桧扇の持ち方

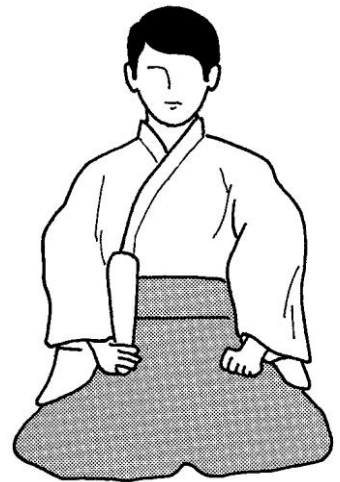
扇の上橋を上下にし、扇の表を外に向ける。要の方を右手で上より軽く握り、左手は扇の上部（上端ではなく、中程より少し上）を四本の指にて下より支え、親指は上から軽くそえる。

(4) 持扇の位置

正座や着椅のときは、正面膝の中程の所に置き、正立のときは、正面腹部、即ち臍より少し下の辺りに、心持ち扇が左高になるようにして持つ。正座から跪居（後述）になると同時に腿の付け根に、また、椅子から立つと同時に腹部に移す。祭服を着用している場合は、祭服に軽く接して持つ。



〈持扇〉



〈持笏〉

3

置笏・置扇

横を笏につける。

(2) 正扇

持扇の姿勢から、扇を五橋程度開きつつ、右手の上に左手を揃えて重ね、腹部正面にまっすぐ立てる。両手は体から握りこぶし一つ入れたくらい離して、臍の位置に構える。扇は体と平行にする。

右手の小指を扇の表側に出すが、正笏との違いであるが、あとは、正笏に準ずる。

(注)

・ 祭典中、取次唱詞奉唱・天地書附奉体の間等は、この形をとる。  
又、神前拝詞等でも、拝詞集を持たないで奉唱する場合があるときは、この形で奉唱する。

・ 正笏、正扇は、揖、拝(後述)の予備動作であると共に、恭敬を表す所作でもある。

・ 両手の下から、笏、扇がのぞかぬよう特に気を付ける。

(1) 置笏

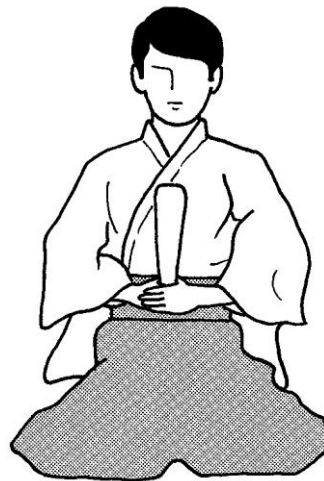
持笏の姿勢から、右手を左膝の中程に笏を直立させたまま移すと共に、笏の中程よりやや下を左手にて支える。このとき、笏を親指とそろえた他の四指の間にきちんとはさむ。

次に、右手首を回し、外側より指先で笏頭を左右からはさみ持つ。

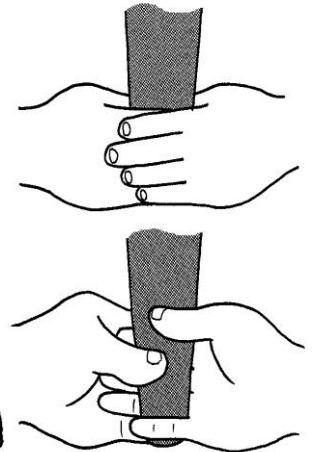
左手を放し、笏を傾けながら笏尾より右の膝先中央におろす。このとき笏は、横向きになり、横向きになり、笏尾は座についている。笏尾で座をすりつつ、右膝の外側にそって、笏を袴の下に真っ直ぐ縦に差し入れる。右手が膝頭の



〈正扇〉



〈正笏〉



線より少し深く入り、指先が座に触れたら静かに笏を放して正座の姿勢になる。

(注)

・置笏は、膝衝に座したときに限り行う。つまり、座礼における、祭主祭詞奏上、祭主玉串奉奠とその拍手の間、奉幣役が作法を行う間に限る。

・笏の裏側（内側）を必ず下にして置笏する。また、笏頭は、膝頭より約三センチ（約一寸）後ろにあること。

・親指以外の四指は、指先を開かないようにし、正しくそろえる。このことは笏の取り扱いだけではなく、すべての作法の基本でもある。

(2) 置扇

持扇の姿勢のまま、右手を要の下まで指を廻すように、少し深く握るように持ち直す。上体を前に傾け、手首を返しながら、扇を膝前の正面に、持扇の際、上になっていた面が膝衝に接するように置く。

ことき、扇を両手で持ったまま膝前に移し、その後左手、右手の順に放す。

手を静かに放して正座の姿勢になる。

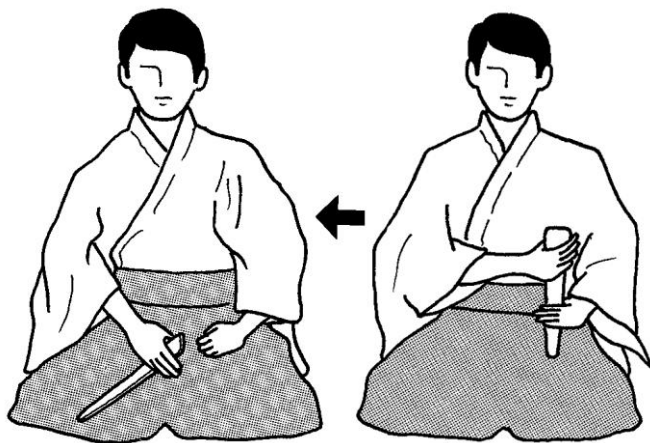
(注)

・祭詞奏上の場合、左手に祭詞を立てて持ち、右手で扇の中程を持って閉じる。さらに、手のひらを下に向け、上体を前に傾けて静かに置く。

・置笏と同様、置扇は膝衝（軾）に座したときに限り行う。



〈置扇〉



〈置笏〉

(1) 懐笏

持笏の形から、置笏と同様に右手を左膝の中程に持ってゆき、左手で笏をはさみ持つ。

右手にて笏頭を右横よりはさみ持つ。つまり、笏の内側に親指が、外側に他の四指がくる。

右手で笏を右膝上方に運ぶと共に、懐にさし込む。このとき、左手は笏を離れた後、襟または懐紙にそえ、笏をさし込みやすいようにする。祭服の場合は、左手を笏袋にそえ、右手で笏を笏袋に入れる。正座の姿勢となる。

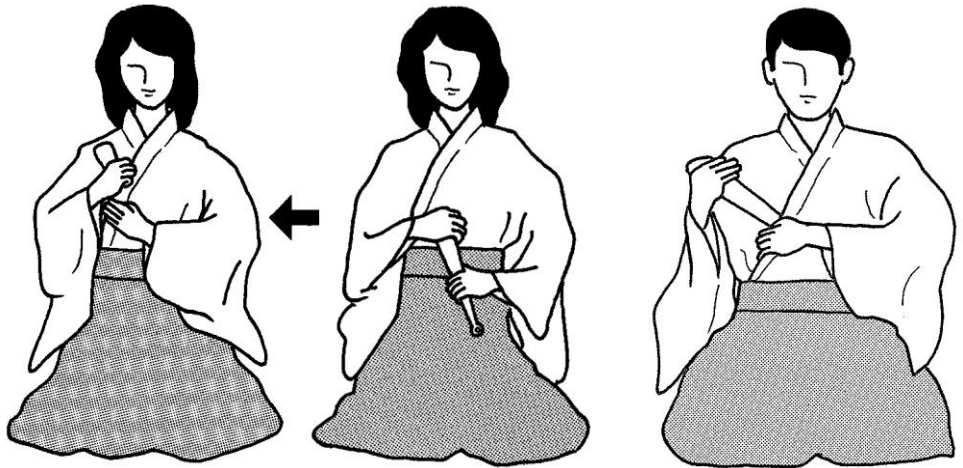
祭服の場合は、笏袋に拝詞集も入れる。拝詞集と交錯しない為には、笏尾で体をこするように懐笏すると、笏は拝詞集よりも体側に自然と入れることが出来る。

(2) 懐扇

持扇の姿勢から、扇を腹部正面（臍の前）の握りこぶし一つ入るくらい離れた位置に持って来ると同時に、左手を扇の中程に下げ、扇を立てながら右手をその上端に移す。

親指を内側に、他の四指を外側にして、右手に扇を持ち、右胸の辺りに移動させ、要の方から懐にさし込む。このとき、左手は扇を放した後、襟を持ち、さし込みやすいようにする。扇は帯の中に要をさし込むようにするとよい。

手を放し、正座の姿勢となる。



〈懐扇〉

〈懐笏〉



5 挿笏

祭服の場合は、祭服の帯にさし込むこともある。これは、懐に拝詞集を入れている為で、扇と拝詞集の交錯を防ぐことが出来る。この場合、本来の懐扇の位置に挿す、あまり右や左に寄らないよう気をつける。

持笏の形から、懐笏と同じ作法で、右手を左膝の中程に移し、左手で笏の中程よりやや下をはさみ持ち、右手で笏頭をはさみ持つ。

右手で笏を膝の右方に運び、右横腹の帯に笏尾よりさし込む。このとき、左手は笏から離し、右横腹の帯にそえる。つまり、左手親指を帯の内側に入れ、他の四指はそろえて外側にそえるようにする。正座の場合は、起居になつてから行う。

(注)

- ・女子の作法及び祭服用時の作法には挿笏はない。
- ・着座している場合には懐笏であるが、歩行する場合には粗忽なきを期する心から、おおむね挿笏を用いる。



〈挿笏(立っている時)〉



〈挿笏(跪居の時)〉

6 把笏・把扇

(1) 置笏を取る場合

手に笏や扇を持っていない状態から、持笏・持扇になることえを、把笏・把扇という。

まず、右手で右膝かたわらの笏頭を取る。親指を内側に、人差指を外側にして両側からはさみ持ち、他の三

指は人差指にそえる。

笏頭より起こし、笏の裏を内側にかわしつつ、左膝中央に笏を立てる。この間、笏尾は右膝の上をすって通り、笏は笏頭を左上にして傾斜する。

左手で笏の中程を外側よりはさみ持つ。

右手を左膝下方に移して笏尾を持つ。

左手を放して持笏の形に戻る。

(2) 懐笏を取る場合

左手で襟を持ち、右手で懐の笏頭をはさみ持つ。

右手で笏を抜きとり、左膝中央に立てる。

以下、置笏を取る場合と同じ。

(3) 挿笏を取る場合

左手で右横腹帯を持ち、右手で腰部の笏頭をはさみ持つ。

以下、懐笏を取る場合と同じ。

(4) 置扇を取る場合

上体を前に傾けて、右手は要の方を軽く握り、左手は扇の上部を四指で下から支え持つ。左手の親指は、扇の上に軽くそえる。

持扇の位置に戻る。

(注)

・祭詞を持った場合、左手で祭詞の中程をはさみ持つて左膝中程に立て、上体を前に傾けて、右手で要の方を持つ。このとき、親指は下にし、他の四指はそろえて上から持つ。

次に、右手で扇を開きつつ左膝の祭詞に重ね、扇と祭詞の下部を共に右手ではさみ持つ。

左手を右手の上に重ね、正扇の形になる。

(5) 懐扇を取る場合

右手で扇の上部よりやや下を、親指を内側に、他の四指を外側にして持ち、左手は襟にそえる。

右手で懐中より扇を取りだし、腹部の正面にて手のひらを下に向けて持つ。

左手を襟から放し、右手のすぐ上の扇の部分を持つ。左手の親指は扇の上から、人差し指は下から支えて持ち、他の三指は軽くそえる。

右手を静かに右方に移動させ、要の方を軽く握って持扇の形になる。

(注)

- ・ 笏、扇の出し入れのときに、首を曲げて襟元を見ない。目は正面を正視し、手の所作には目をつけない。
- ・ 後取、賛者等の所作で、把笏から直ちに揖に移る場合には、持笏の形にならず、左膝の中程にて左手を笏の中程から放した後、直ちに右手の上に重ね、両手をそのまま正面に移して正笏の形になってもよい。

## 四 座 起

### 1 跪居

正座の姿勢のまま腰を軽く上げ、両足を爪先立てる。即ち、両膝を突いたまま爪先立て、爪先を足の甲の方へ折る。このとき、男子は両膝を少し開くが、女子は両膝を軽く接する。

手は腿の付け根のあたりに置く。

(注)

・ 起座、着座のとき、膝行、膝退の動作を行うときなどは、跪居のまま

まで上体がやや前に傾くが、物品の授受のときや跪居のまま揖を行うときには、足の動作をとまなわないので、上体を真っ直ぐに立てる。

・ 跪居になるとき、左右の足を同時に爪先立てたり、両膝を同時に突いたりしないこと。



〈跪居〉

座を立つ作法には、進む起座と、退く起座と、回転起座がある。

(1) 進む起座

正座の姿勢から、まず跪居になる。

つぎに、下座の膝を起こして、その爪先を少し進める。

立ちながら、上座の足を進め、下座の足にそろえる。このとき、下座の足に重心をかけ、上座の足は床をすりつつ自然に前に進め、立ち上がったときには両足がそろっているようにする。座っていたときの膝のあたりに立つことになる。

(注)

・下座の膝を起こすとき、いかなる場合も爪先が膝頭より前に出てはいけない。女子の場合は、進め方が少なめにし、進めた足の爪先が残っている足の腿の中程にあるのが適当である。

(2) 退く起座

正座の姿勢から、まず跪居になる。

つぎに、下座の膝を起こして、その爪先を少し進める。

立ちながら、下座の足を引いて、上座の足にそろえる。このとき、上座の足に重心をかけ、腰を引きながら立つ。下座の足は床をすりつつ自然に引き、立ち上がったときには両足がそろっているようにする。座っていたときの足の甲のあたりに立つことになる。上座の足より後へ踏み出す。

(3) 回転起座

正座の姿勢から、まず跪居になる。

次に、下座の膝を起こして、その爪先を少し進める。

両足にひとしく重心をかけながら腰を浮かせ、進む方向に向くように体を回転させながら立つ。後ろの足を進め、前の足にそろえ、下座の足から前に踏み出す。

### 3 着座

(注)

- ・一連の動きがスムーズになるよう心がける。
- ・動作が連続して行われるときは、後ろの足を直ぐ踏み出してよい。

座に着く作法には、座前着座と、座後着座がある。

#### (1) 座前着座

着座する位置まで進んで止立(後述)し、小揖(後述)する。止立する場所は、座っている祭員の膝頭に爪先をあわせる。

膝を折り、上座、下座の順に膝頭を床につけ、跪居になる。

次に下座の膝を起こし、足先を上座の膝頭のあたりにすり出す。

立てた下座の足の膝をふせながら、床についている上座の膝を起こしつつ、両爪先を軸にして、体が上座のほうを向くように半回転する。

前と反対向きの形になり、上座、下座の順に膝について、膝頭をそろえる。

両足の爪先をのばして正座し、小揖する。

(注)

- ・回転時には、腰を軽く浮かせて回るが、体が上下に動揺しないよう気をつける。
- ・回転と共に、上座の床についている膝が起き上がり、下座の起き上がっている膝が床につく。

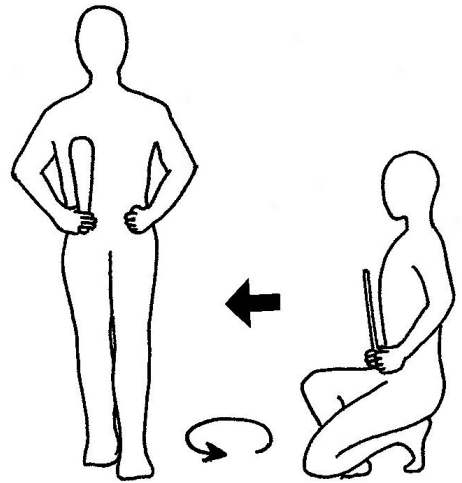
#### (2) 座後着座

着座している祭員の背の線より、約半歩前で止立、小揖する。

次に、膝を折って上座、下座の順に膝頭を床につけ、跪居になる。

下座の膝を立てる。

上座の膝は床をすりつつ前に進み、下座の膝も床につく(一歩膝行する)。このとき、膝頭は着座している



〈回転起座〉

## 五 進 退

### 1 行 歩

#### (1) 進 行

正立の姿勢で腰を据える。背をのばし、腰に力を入れ、目は四メートル（約二間）先の床につける。

行歩は、進退の基本となる大切な動作である。行歩の正しいか否かは作法にも大きな影響をもたらす。その拙さが祭典の荘厳な雰囲気をこわし、「無言の教導」にならないことになる。その要領が会得できるまで、練習を積むことが大切である。

行歩には進行と逆行と屈行のほか、止まるときの作法としての止立がある。

### 4 蹲 踞

#### (注)

祭員の膝頭の線にそろえる。

爪先をのばして正座し、小揖する。

・座前着座は、おおむね側面に着座する場合の作法である。

・神前及び膝衝（薦<sup>こも</sup>）に着座又は起座する場合は、必ず膝行又は膝退（後述）がある。

・止立から膝をつき、起居になるとき、上座の爪先はほんのわずか引く程度にする。大きく引くと着座位置がづれることになる。

献饌、撤饌にあたり作業を待つ間などにとる待機の姿勢のことである

跪居になって、懐笏、懐扇、又は挿笏する。

両手の親指をこぶしに握りこみ、手の甲を外側に向けて、両膝の外側の前に突き、上体をやや前かがみにしてうづくまる。



〈蹲踞〉

下座の足より進む。まず、両足に等しくかかっている重心を、後ろに残す方の足へ静かに移すとともに、軽くなった方の足の爪先を徐々に上げ、足裏は静かに床をすりつつ、歩幅だけ進む。

進めた足を止めるとともに、後ろにある足に残しておいた重心を、進めた方の足へと徐々に移行させる。進めた足の爪先は、自然に床につき、後ろにある足は徐々に前に進み始める。このとき、後ろの足のかかとはあまり上げない方がよいので、後ろの足の膝を曲げないようにする。膝が曲がると、かかとは自然に上がってしまう。

再び歩を進め、所定の所まで進行を続け、両足をそろえて立ち止まる。(進行の止立)

(注)

・行歩の作法とは、重心の滑らかな移動である。そこで、姿勢を正して腰に力を入れ、上体を動揺させないように注意する。歩きたびに上体が前後左右に揺れたり、肩をいからせたり、反り身になっていたり、頭を垂れたり、背が丸かったりすると、見苦しい姿勢になる。

・足のかかとの方に重心をのせ、爪先を軽く踏み出して歩くのであるが、爪先に力を入れて爪先だけで歩くと、ぬき足、しのび足という、品のない歩き方になる。

・左右の足は真っ直ぐ平行に踏み出す。爪先を外に向けた外股や、爪先を内に向けた内股はよくない。

・膝を大きく曲げ、かかとを高く上げて歩いたり、足裏を床から離して歩いたり、歩幅が大きすぎたり、足音を立てたりするのは見苦しい。

・畳の縁や敷居は踏まないように心がける。

### 【歩幅と歩き方の緩急】

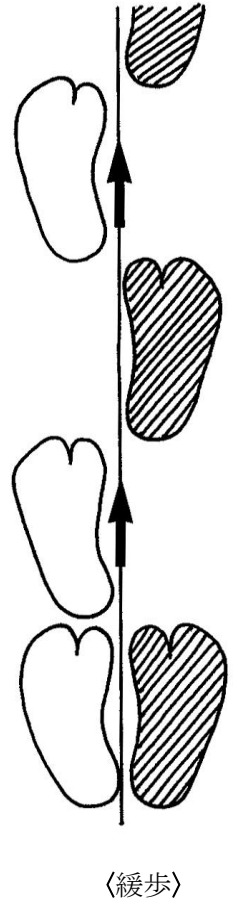
行歩の速度には、緩歩<sup>かんぽ</sup>、平歩<sup>へいぽ</sup>、急歩<sup>きゅうぽ</sup>の三種がある。

#### ① 緩歩

一呼吸に一歩の速さで足を進める。一歩の歩幅は、大体足裏の長さ程度である。

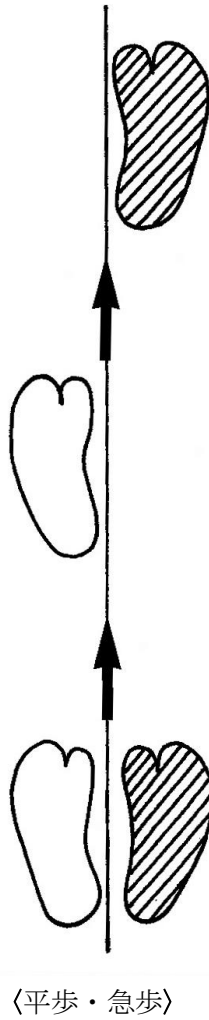
② 平歩

一呼吸に二歩（即ち息を吸うときに一步、吐くときに一步）の速さで足をを進める。一步の歩幅はやや広くなり、進めた足と残った足の間に、足が一つ入る程度である。



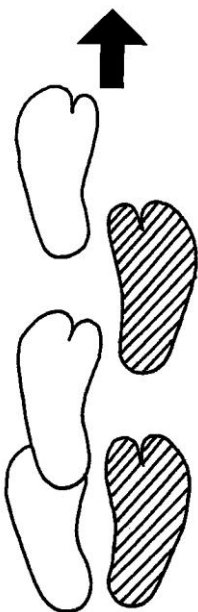
③ 急歩

一呼吸に四歩（即ち息を吸うときに二歩、吐くときに二歩）の速さで足をを進める。一步の歩幅は平歩の場合と同じ程度であるが、祭場の広さや、神前への距離などによって、多少異なる。



(注)

・歩幅には、祭場の広さ、役割による歩き方の緩急、背丈の違いによって、多少の相違がある。神前から遠い所ではすこし速めに歩くが、神前に近づくにつれて歩みは緩やかにし、歩幅は狭くしてゆく。また、大柄の者ほど、歩幅を狭くするようにするとよい。



〈神前に近づいた時の歩幅〉



(2) 逆行

神前や人の前を下がる時、その場で直ちに回転し背を向けて歩き出すと礼を失うので、面を向けて適当な距離を遠ざかるのが逆行である。

正立の姿勢を整え、重心は両足に等しくかける。

重心を残る方の足にかけ、退く方の足を軽くし、上体をやや前方に傾けながらかかとを少し上げ、足裏は床をすりつつ足を後ろへ引く。

重心を退いた足の方へ徐々に移すと共に、反対の足を引き始める。

重心の乗った足のかかとは自然に床につき、引き始めた足はもう片方の足の横を通る頃からかかとを上げる。所定の所まで逆行を続け、両足をそろえて立つ。両足がそろうと同時に、重心は左右の足に等しくかけ、上体を起こし、正立の姿勢に戻る。(逆行の止立)

(注)

・逆行の歩数は、神前を退くときは三步とする(歩幅としての三步ではなく、動作としての三步と考える。三歩目に回転の動作に移ることもある。曲折および回転の項参照)。ただし、祭場が狭いときは歩幅を小さくして逆行することもある。状況に応じた作法をすることも大切である。

【歩行における足の左右】(座位参照)

進行する場合は、原則として下座の方より進み、正中の場合は左足より進む。

逆行する場合は、原則として上座の方よりさがり、正中の場合は右足よりさがる。

原則 (正中以外)	進 <small>しん</small> 下 <small>げ</small> 退 <small>たい</small> 上 <small>じょう</small> 起 <small>き</small> 下座 <small>げざ</small> 上 <small>じょう</small>
正中での特例	進 <small>しん</small> 左 <small>さ</small> 退 <small>たい</small> 右 <small>ゆう</small> 起 <small>き</small> 右座 <small>ゆうざ</small> 左 <small>さ</small>

(3) 屈行

神前や人前を横切るとき、敬意を表す意味で腰を浅く折って行歩することをいう。

近い場合は正笏、正扇し、遠い場合は持笏、持扇して、上体を三十度ほど前に傾け、三歩進行する。

(4) 止立

立ち止まることを止立するという。

進行の場合は、遅れている足(後の足)を進めてそろえる。これを進行の止立という。

逆行の場合は、遅れている足(前の足)を引いてそろえる。これを逆行の止立という。

2 曲折

九十度程曲がることを、曲折という。

曲折には、進行の右折、進行の左折、逆行の右折、逆行の左折がある。

(1) 進行の右折

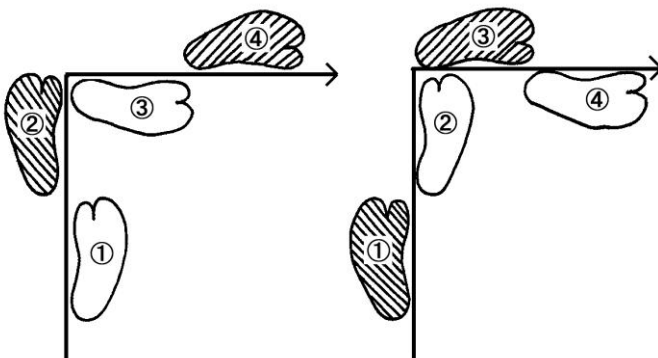
正立の姿勢より重心を右足にかけ、左足は足裏をすりながら進め、右へ九十度まげながら左足のかかとの内側を右足の爪先に接する。このとき、体は自然に右斜めの方に向く。

重心を静かに左足に移しながら、右足を左足の前に踏み出す。

実際の進行の右折では、曲がるときに左足が遅れている場合と、右足が遅れている場合とがある。

(注)

・進行の左折は、進行の左折に準ずる。



〈進行の右折(右足が遅れた場合)〉 〈進行の右折〉

3 回転

(2) 逆行の右折

正中での作法を例に説明する。

まず、右足を下げる。続いて左足を下げ、右足を左足にそろえて止立する。重心を左足に移し、右足を少し引いて、そのかかとの内側を左足のかかとの後ろに付け、右足の爪先を右へ九十度開く。このとき、体は自然に右斜めの方に向く。

重心を静かに右足へ移しながら、左足を右足の前に踏む出す。

(注)

・逆行の後、直ちに曲折する場合は、両足を踏みそろえずそのまま進んで行く。

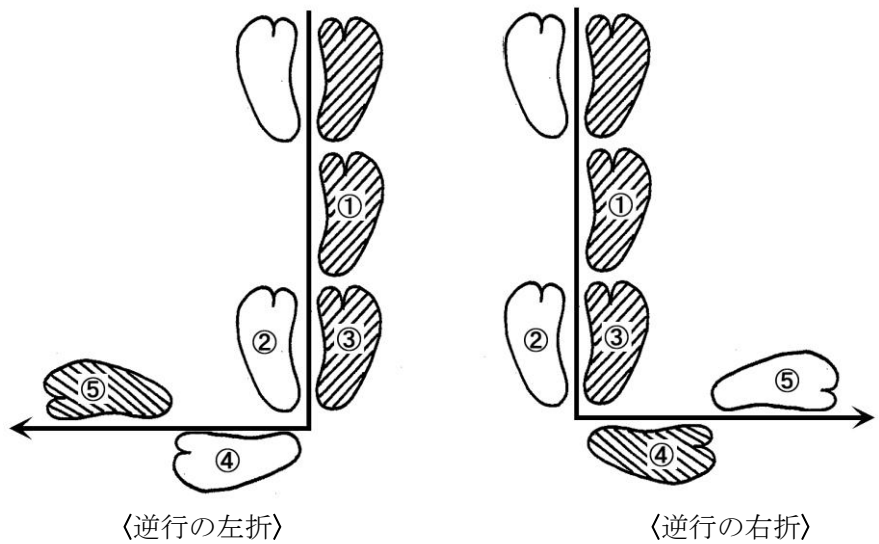
・逆行の左折は、逆行の右折に準ずる。

・正中以外での作法は、まず、上座の足を下げ、続いて下座の足を下げ、上座の足を下座の足にそろえて止立する。そして、曲折する方の足を踏む出す。

百八十度方向を変える回転には、原則としての逆行右回転と、例外的逆行左回転がある。これは、神前から下がるときに用いられる。

(1) 逆行右回転

正立の姿勢より、まず、右足を下げる。続いて、左足を下げる。次に、体の重心を左足に残し、右足を後ろに引き、右足中程の内側（土踏まず）を左足のかかとの付け、両足はIの字の形になる。この動作に伴って体がやや右へ回転する。



次に、体の重心を右足に移しながら、左足の中程内側（土踏まず）を右足の爪先につける。このとき、上体は自然に右斜め後ろを向く。

重心を左足に移すと同時に、右足を回して前方へ踏み出す。上体は百八十度回転することになる。

左図のように逆行しつつ回転する。つまり、三歩目から回転を始め、五歩目には、そのまま前に踏み出す。

(注)

・回転後、止立する場合もある。このとき、右図の5の足（右足）のかがとをを4の足（左足）に接して踏みそえる。

・曲折のときは両足の形はLの字、回転のときの形はTの字になる。

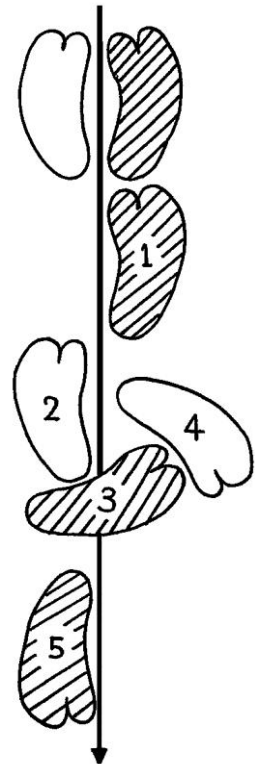
## (2) 逆行左回転

第一歩目は左足から下がり、続いて右足を下げ、以後逆行右回転の要領で左に回転する。

## 4 膝行・膝退

膝行、膝退は、跪居の姿勢で神前を進退する作法である。これは、起居進退の一つであるが、深く敬意を表す作法でもある。

神前や人前に進み出る場合、目標地点まで行歩していきなり座るより、少し手前で跪居になり、上体を低くして少し進んで座る方が、深く敬意を表すことになる。又、神前や人前を退くにあっても、座っている地点で直ちに立ち上がるより、上体を低くして少し退いてから立ち上がる方が、深く敬意を表すことになる。



〈逆行右回転〉

(1) 膝行

跪居の姿勢を整える。即ち、重心を膝のあたりにかけ、上体をやや前に傾け、臀とかかとは軽く接する程度にする。そのとき、膝を接しておく。

次に重心を上座の膝のあたりに移すと共に、下座の膝を起こし、その足の爪先を上座の足の中程まで進める。進める幅には個人差があるが、起こした足の腿が水平になる程度が良く、その爪先は膝頭より前に出てはならない。

進めた足の爪先に力を入れて踏みしめると同時に、腰に力を入れながら上体を前に進める。このとき、残っている上座の足は、跪居のままの姿勢で床をすりながら前に進む。残っている足のかかとの上に乗っていた上体は、膝が進むにつれて次第に下座の足のかかとの上へと移っていく。

上体の移動が終わったときには、立っていた膝は自然に床につき、重心もその膝に移る。以上が、「膝行の第一歩」である。

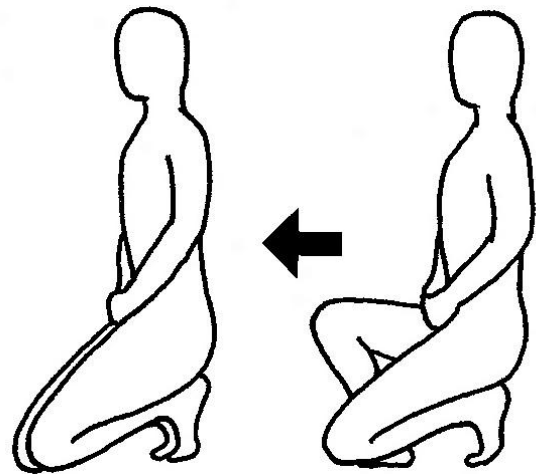
次に、上座の膝を起こして、爪先を前に進める。

膝行の第一歩に準じて、進めた足の爪先を踏みしめ、上体を前に進める。以上が「膝行の第二歩」である。この作法を繰り返していく。

止まるときは、遅れた膝を進め、両膝を揃えて止まる。これが、「膝行の止立」である。

(注)

・神前での膝行は、左膝より三步進む。つまり、一步目は左膝を起こし、右足を進めてそろえる。二歩目は、右膝を起こし、左足を進めてそろえる。三步目は左膝を起こし、右足を進めてそろえる。



〈膝行〉

・膝行には、緩歩、平歩、急歩の別はないが、歩幅は神前に近付くにつれて小さく、遠ざかるにつれて大きくなるのが自然である。ただし、如何に大きくとも、爪先が膝頭より前に出ると、荒々しい作法になる。  
・特に注意すべきことは、上体を上下左右に動揺させないことである。それには、姿勢を正しく整え、重心の移動を滑らかに進むことが大切である。

・膝行するとき、跪居の姿勢を崩し、腰を浮かせて進むと、体が上下に揺れる原因になる。

・膝行を膝で進むものと誤解して、立てた膝を床につけることばかり考え、上体が少しも進まない人がいる。膝行は腰で進むものである。

・跪居している足の爪先をのばして進むのも、良くない作法である。

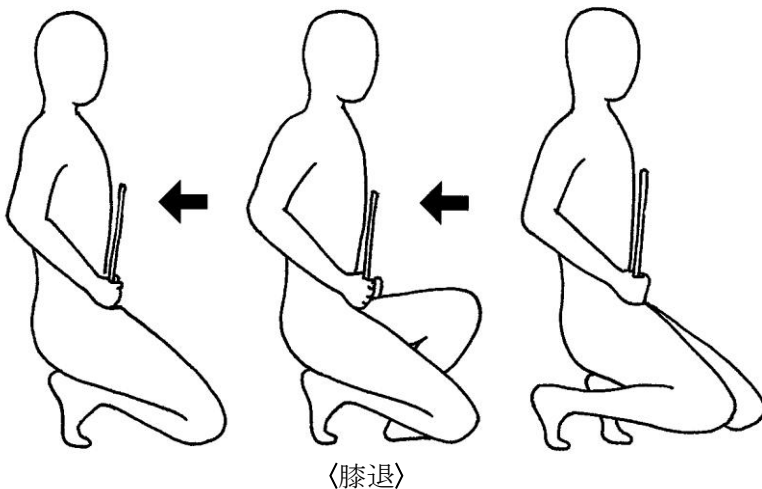
## (2) 膝退

まず、跪居の姿勢を整える。

次に、重心を下座の足に移すと共に、上座の足を真つ直ぐ後ろに引く。このとき、膝と膝の間隔が開かぬように注意する。それには、腿の内側をすりながら、上座の足を外の方へ引く気持ちで行うとよい。上体をやや前に傾けると、足は楽に引け、膝も開かない。

以上が、「膝退の第一歩」(下図右)、いわば予備動作である。

次に、腰を引くと共に、残っている足に乗って上体を、退いた足の上に移す。腰を引くと、引いた足は更に後ろに下がるが、残る足の爪先は元の位置を動かさないで、その足の膝は自然に上がる(下図中)このとき体の重心は、残っている足の膝のあたりから、退いた足の膝のあたりに移る。重心を爪先へ移すと、上体が起き上がってしまう。そこで、上体をやや前に傾けながら、重心を膝から膝へ移行させることが大切である。



自然に上がった足の膝を、引いた足にそろえて跪居の形になる。

以上が、「膝退の第二步」（前頁図左）である。

第三步以降は、「膝退の第一步」「膝退の第二步」を一度に行い、これを一步とする。以後このように、腰を引いてから足を引くことを繰り返すのが膝退である。

止まるところは、まず腰を引いて片膝を立て、その足を引いて両膝をそろえたら、跪居の姿勢になり、重心を両膝のあたりに等しくかける。これが、「膝行の止立」である。

（注）

・神前での膝退は、右膝より三步退く。つまり、一步目は右膝を少し引く。二歩目は、さらに右膝を引き、左膝が起きるにで、これを右膝にそろえる。三步目は一度の左膝を引くと、右膝が起きるので、これを左膝にそろえる。

・片膝を立てたままで止る動作を繰り返す人は、腰を引いて足を引くという順序を誤っているのである。つまり、膝退の第一步は足を引くだけで、第二步から腰を引いて足を引くのである。第一步を、足を引いて腰を引くものと勘違いすると、二歩目からも同じようにしてしまう。これでは神前で膝を上げて止まる形になり、敬意を表すことにならない。

・足を交互に引きずるようにして膝退する人は、重心を両足の間に置いていることに原因がある。これでは、体が思うように動かない。重心は片膝から片膝へと移動させねばならない。

・上体を立てたまま足を引くと、斜め後ろ（内側）に足が引け、膝が大きく開いて見苦しい姿勢になるだけでなく、後ろに引いた足が、次に引く足の邪魔をしてしまう。そこで、上体をやや前に傾け、足を真っ直ぐに引くことが肝要である。

### （3）膝行・膝退の心得

膝行の一步―跪居の姿勢より一方の爪先を進め（一旦膝が上がる）、次に上体を進めると膝が前方につく。ここまでが一步である。両方の膝が床についたときが歩数の切れ目であり、膝を上げて止まることはない。

## 5 段の昇降

膝退の一步―最初の一步は足を引くだけであるが、第二步からは、腰を引いて足を引き、残りの足をそろえるまでが一步である。これも、両膝をついたときが歩数の切れ目であり、膝を上げて止まることはない。

膝行、膝退の歩幅―女子の歩幅は男子に比べて小さい方がよい。膝行の場合は進める足の爪先を、残った足の腿の中程ぐらいまで進め、膝退の場合にも引いた足の膝頭を、残っている足の腿の中程ぐらいまで下げるのが適当である。

膝行、膝退には、曲折、回転等の作法（奉幣行事の幣使）もある。自然な動作で行うとよい。

階段を昇る場合は、中央（正中）を避け、各自の席の側に沿って昇る。

（階下で一揖の後、）正中に向かってやや斜めになり、神前に近い方の足を階段にかけ、一段毎に両足を踏みそろえて昇る。

階段の一番上まで昇ったら、正面に向き直る。（一揖する。）

階段を降りる場合も、これに準ずる。（進行で降りる）

（注）

- ・祭主及び幣帛を捧げ持った者は、正中を昇降しても構わない。
- ・神前に近い場合は、最上段に昇ると共に、直ちに跪居になって一揖することもある。

## 六 敬礼

世界中には色々な敬礼作法があるが、基本的に頭をたれることは共通である。さらには、身を地になげ出したり、回数を多く繰り返し返すことで、より敬意をあらわそうとする傾向がみられる。

敬礼作法は、腰を折り、頭を下げる、揖、拝、敬礼等だけに限られているわけではない。起座、進退等の作法も、敬意を表す作法の一つである。

敬礼作法は、いわば敬意を表現することを専門にしている作法と言える。ここでは、揖、拝、敬礼、拍手、拝礼、叉手についてのべる。



揖は、腰を折って敬意を表す作法の一つであり、拝、敬礼に次ぐ敬礼作法である。これは、普通礼における会釈に相当し、敬礼の中では最も多く使われている。

揖は、座の起着、列の離就、階段の昇降、殿舎の出入り、物品の授受、尊前の進退、行事の前後、杵の着脱等のときに、自己の礼として行う。

揖には深揖と小揖があり、また座揖と立揖の別がある。

(1) 座揖における深揖と小揖

正座して、持笏、持扇から正笏、正扇になり、姿勢を正す。

次に、笏尾、桧扇の要（つまり両手）をと共に、腰を折る。この場合、笏尾、桧扇の要を腹部に引き付けるのと、腰を折るのが同じに行われる。手を引き付けてから腰を折るのでも、腰を折ってから手を引き付けるのでもない。

伏す角度は、深揖は概ね**六十度**、小揖は**三十度**である。

伏している時間は、深揖でおよそ二呼吸程度、小揖で一呼吸程度である。

次に、笏、桧扇を腹部に付けたまま上体を起こし、続いて正笏、

正扇の姿勢になる。

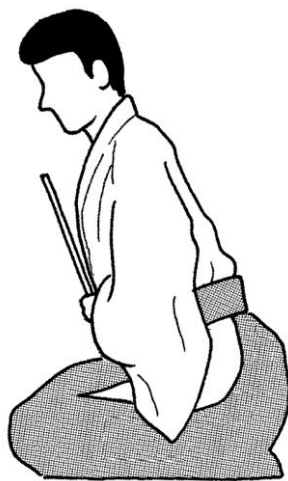
次に、持笏、持扇の姿勢になる。

体を起こしてから、笏、桧扇の始末することを、「揖を解く」と言う。

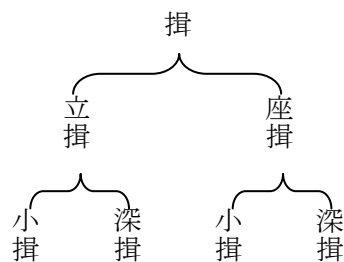
(注)

・笏、桧扇にかける指は、いずれも水平になるよう心掛ける。

・伏した姿勢は、頭を下げるのではなく、腰を折るのである。それには、姿勢を正しくして、袴の後、腰のあ



〈座揖（小揖）〉



たりに力を集中させるとよい。腰に力が入れば、自然に顎が引け、胸が張り、腹が引け、背筋が伸びて上体が正しく整う。その腰の力を抜かずに、腰を折るのである。

・伏す途中で、体が崩れて背が丸くなったり、顎が出て頭が上がったり、頭ばかりを垂らしたりするのは、腰の力が抜けているか、他の部分に力が入っているからである。つまり正座、正立の姿勢を崩さずに、上体を前に傾けることである。

・笏、檢扇の先が体からあまり離れないようにする。

・動作と呼吸とは、深く関係がある。敬礼作法に

あつては、姿勢がくずれないように、息を吸いつつ伏すのが常であるから、深揖は息を吸いつつ伏し次に息を吐き、息を吸い、そして息を吐きながら起きることになる。

・座揖の深揖は、本教祭式において用いられることはあまりない。祭詞奏上の前後に笏、檢扇を持たず行うのみである。

## (2) 立揖における深揖と小揖

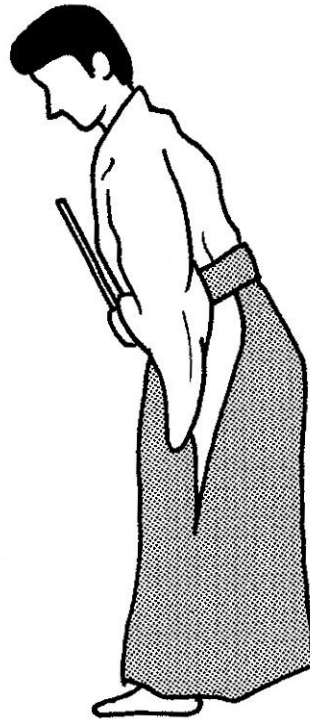
立揖が座揖と異なる点は、笏、檢扇を腹部に引き付けるにあたり、腰をいささか後ろに引いて、体の重心を安定させることである。

正立の場合の重心は、両足の土踏まずの前あたりにかかっているが、上体を傾けるにつれて、次第に土踏まずの後あたりへ重心が移って行く。

上体を起こす場合はこの逆になる。



〈立揖（深揖）〉



〈立揖（小揖）〉

## 2 拝

(注)

- ・立揖は立拝と混同しやすいので、区別を明らかにしておくこと。
- ・立揖及び立拝で腰を折るとき、膝を曲げないようにする。
- ・祭詞奏上、神饌伝供、祭具を持ったとき等の揖は、笏、桧扇を持たないで、祭具、祭詞を持ったまま、あるいは叉手（後述）で行う。

### (3) 揖を解く作法

揖は、祭典中しばしば行われる。そこで、作法が粗略になったり乱雑になりやすいので、これを防ぐため、揖を解く作法が行われるのである。

笏、桧扇は体と平行に保つが、揖の作法で上体を伏したときは、笏尾、桧扇の要は腹部についており、笏頭、桧扇の先端は胸からやや離れているから、そのまま上体を起こすと笏、桧扇はいささか前に傾いている。

そこで、両手は腹部につけたままで、笏頭、桧扇の先端を静かに起こして、笏、桧扇を真っ直ぐに立てる。つまり、正笏、正扇になってから、持笏、持扇の姿勢になる。「起きてから割る」または「起きてから閉じる」と覚える。

### (1) 座拝

上体を伏して敬意を表す敬礼作法の中では最も重いものが、一拝、再拝、両段再拝である。正座し、持笏、持扇の姿勢より、正笏、正扇になって姿勢を正す。

次に、笏頭、桧扇の先端を目通り（目の高さ）まで垂直に上げる。

次に、笏、桧扇を膝前にし、背を平にして伏せる。つまり、上体は真っ直ぐにしたままで、腰に力を入れて上体を前に傾けて行くと、やがて笏、桧扇を持った手は膝前の床につく。そして、笏、桧扇を持った両手を、膝頭に軽く接するように手前に少し引き付けながら、背が平らになるまで上体を伏せる。手の甲は床につける。伏している時間は、二から三呼吸程度である。

伏したとき、笏、桧扇は床と平行になり、鼻は笏、桧扇の中程にある。

次に、上体を起こして、持笏、持扇の姿勢になる。笏の場合は、上体を起こしつつ、両手が膝の辺りに達した頃割りはじめ、更に上体を起こして持笏の姿勢になる。「起きながら割る」と覚える。桧扇の場合は、上体を起こしつつ、両手が膝頭の辺りに達したときに閉じ、左手を扇の上端に移し、更に上体を起こして持扇の姿勢になる。「起きながら閉じる」と覚える。

上体を伏すに従って目を閉じ、起こすに従って目を開く。

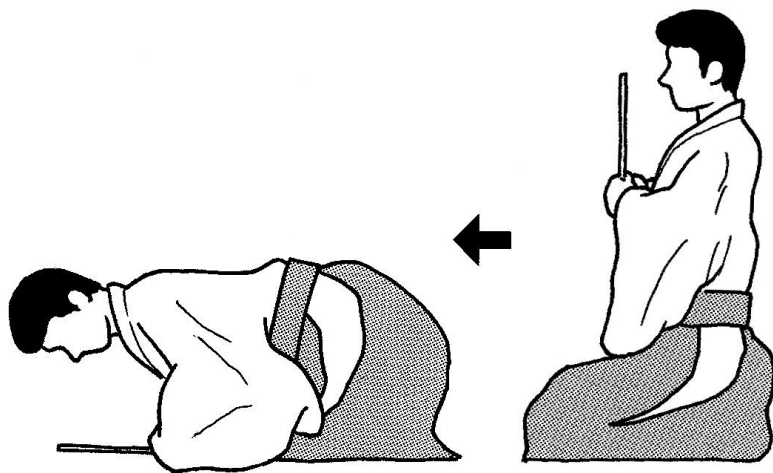
(注)

・上体を前にたおすに従って、自然に少し膝を開き、腹部をその間に入れるようにする。又、起きるときには、上体を起こすに従って膝を閉じ、元の形に戻る。

・伏したとき、肘は膝の上に置かないし、又、床にもつけない。

・正笏、正扇のとき、笏、桧扇と上体との間隔は、握りこぶしを一つ入れたくらい離れている。従って、笏、桧扇を目通りまで上げたときも、笏、桧扇と顔の間隔は同じでなければならない。笏頭、桧扇の先端が前に傾いたり、顔に近寄ったりするのは悪い形である。笏、桧扇を持つ手が斜めになっていることが原因である。

・目通りまで笏頭、桧扇の先端を上げるに当り、手が体から遠のいたり、体に近寄ったりしてはならない。又、笏、桧扇だけを上げようとすると、肘と肘の間隔が狭くなる。また、肩や肘に力が入った形になる。肘もいっしょに上げるような心持ちで目通りまで上げるとよい。



〈座拝〉

・力は腰に集中させ、他の部分には力を入れない。この腰の力でもって次に上体を伏すのである。

・伏したとき、頭も肩も背も腰も臀も、すべて平らになるのが最も良い姿勢である。この場合も、腰の力が上体を支えているのであり、上体を支えるために腕を突っ張るのはよくない。そうなるのは、姿勢が崩れ、腰の力が抜けているからである。背が丸くなったり、臀が上がったり、頭だけ下がったり、顎が出て頭が上がるといった見苦しい形になる原因もすべてここにある。

・体型にあった作法を見いだすことが大切である。要するに背が平らになるまで伏せば良いのである。

### (2) 立拝

正立の持笏、持扇の姿勢より、正笏、正扇になって姿勢を正す。

次に、笏頭、桧扇の先端を目通り（目に高さ）まで垂直に上げ、続いて、上体を倒す。正笏、正扇の手は、腹部の臍よりやや下につけ、笏、桧扇は床と平行にする。倒した上体は床に対して六十度程度で止める

次に、上体を起こして持笏、持扇の姿勢になる。

笏の場合は、上体を起こしつつ割り、起きたとき

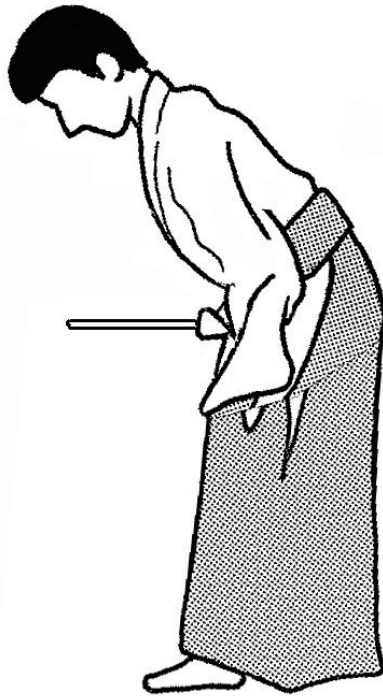
には持笏の姿勢になる。桧扇の場合は、上体を起こしつつ扇を閉じ、起きたときには持扇の姿勢になる。

伏している時間は、座拝と同様二から三呼吸である。

### (3) 再拝

一拝が終わって、もう一度拝をすることをいう。つまり拝を重ねる最敬礼である。

座拝、立拝とも、一拝して上体を起こすとき、途中で笏、桧扇を持笏、持扇に戻さず直ぐに、正笏、正扇の姿勢となつてから、更に一拝を重ねる。



〈立拝〉

### 3 敬礼

#### (4) 両段再拝

この両段再拝は、拝の中で最も重い作法とされている。つまり再拝を、作法の前と後に行うのである。この作法は、祭詞奏上、奉幣行事等のときに行われる。詳しくは、行事作法の各項で述べる。

敬礼には、深い敬礼と浅い敬礼がある。以前には平伏（へいふく）と呼ばれていたものである。深い敬礼は、祭詞奏上の間に他の祭員が行う。捲簾の間、この敬礼を行うこともある。

浅い敬礼は、拝詞を奉唱の前に、これを行う。又、取次唱詞奉唱、天地書附奉体のとき、最初に浅い敬礼となり、先唱者が「生神金光大神」まで先唱したら、正笏、正扇して奉唱する。

(参考) 開扉、閉扉の間に行うのは深い敬礼である。

大麻の祓いを受けるとき、典礼が開扉の警蹕けいひつをかけるときは浅い敬礼の形をとる。

#### (1) 深い敬礼

正座し、正笏、正扇して姿勢を正す。

次に、笏、桧扇を膝前に下ろし、両手が床に着いたらそれを膝頭に軽く接するように手前に引き付けながら、背が平らになるまで上体を伏せる。(座拝の伏した形と同じ)

祭詞奏上等が終わってから(典礼の「直る」という号令がある)、上体を起こしつつ持笏、持扇の姿勢になる。「起きながら割る」「起きながら閉じる」

#### (2) 浅い敬礼

正座し、正笏、正扇して姿勢を正す。

次に、笏、桧扇を膝前に下ろし、両手が床に着いたら、両肘をやや屈して背が床に対して約**六十度**まで伏す。このとき、笏、桧扇は



〈浅い敬礼〉

#### 4 拍手

上体と平行になる。

終わって上体を起こしつつ持笏、持扇の姿勢になる。

(注)

・笏、桧扇は目通りまで上げず、上体を倒す。深い敬礼の最後の形は拝になる。このとき、腰を折っている時間は、その行事が終わるまでである。

・拝詞集を持ったときは、先唱役以外の祭員も浅い敬礼をすることになる。

・立礼や、椅子に座つての作法の場合、浅い敬礼、深い敬礼の区別はなく、敬礼は一種類である。(後述)

拍手には、四拍手、拍交拍手、忍手の三種がある。

##### (1) 四拍手

両手を両膝の中程に置く。

まず、両手の手のひらを膝頭まですり出す心持ちで、おもむろに前方に上げ、指先をそろえ、手のひらを合わす。このとき、指と指の間は開かない。また指先を極端に下げたり、上げたりしない。

正座のときの視線上に、合わせて手の中指の先がくる。おおむね、肩と同じの高さになる。

次に、右手を少し手前に引く。関節一つ分くらい。

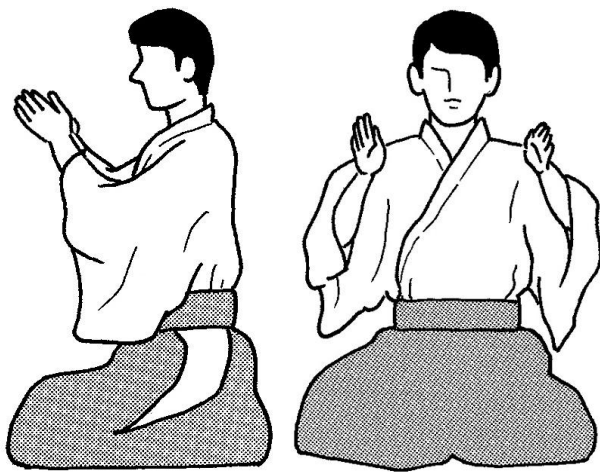
左右の手を肩幅くらいに開き、おもむろに打ち合わせる。

打ち終わったら、少し引いた右手をもどし、両手の指を合わせる。

両手を下ろし、手のひらで両膝を擦る心持ちで、膝の中程に戻す。

拍手の後で拝を行う場合は、両手を下ろしながら把笏、把扇し、正

笏、正扇になって拝を行う。



〈拍手〉

(注)

・指は全て離さないようにすると共に、拍手の前後には必ず両手指先を揃える。  
・手の開き方を、広くしすぎたり狭くしすぎたりしないこと。また、合わせた両手の先が上がりすぎたり、顔に近寄ったりしないこと。

・拍手のとき、視線と姿勢を正しく保ち、頭を振ったり、上体を揺り動かさない。

・昭和五十八年、拍手は四拍手と定められた。それ以前は、拍手は二拍手を原則とし、四拍手は特に重い拍手であった。

## (2) 拍交拍手

奉幣行事の最後に、奉幣役と幣使が交互に二拍手づつするのをいう。

奉幣役が先に打つ。

一人が四拍手しているように聞こえるよう、二人で合わせることを心がける。

作法は四拍手と同じ。

## (3) 忍手

葬儀のときに用いる作法で、音を立てずに軽く打つ作法をいう。(四拍手)

原則として、遺骸の前でのみ使用する。

作法は四拍手と同じ。

## 5 拝礼

祭典の着座後、退下の前、玉串奉奠時等に行う一拝四拍手一拝を、拝礼という。

先ず、一拝をする。引続き拍手なので、拝から起きると同時に懐笏、懐扇の作法に移る。

拍手をした後、把笏し、一拝をする。



6 又手

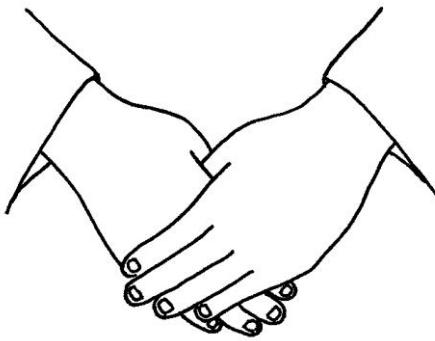
(参考) 以前は、着座後、修祓の行事が終わったとき、退下の前などに、対揖(又は一揖)と共に退手(さがりて)として一拝二拍手一拝が行われていた。

また、玉串奉奠時の拝礼では、「祭員雁列がんれつ」という号令と共に、祭員は神前の方に斜め向きになり、祭主に合わせて一拝二拍手一拝を行っていた。今でも、時と場合によっては、対揖、雁列が行われている。

この作法は、献饌、撤饌の間、祭具進撤の前後等、手に物を持たないときに行う作法である。

四指と親指を、左を上、右を下に正しく交叉して下腹部正面に軽く置く。上体は自然にやや前に傾く。手を交叉するとき、指の間を開いたり、手を固く握り合わせないこと。

又手のまま揖を行うときには、やや前に傾いている上体を一度真っ直ぐに立て、敬意を表す対象に着目した後に行く。



〈又手〉

-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----

M E M O

# 第三部 行事作法

## 一 祭具の進撤

### 1 三段・三持・三手

祭具の進撤には、三段、三持、三手という基本の手の扱い方がある。

#### (1) 三段

物を持つときの、標準となる高さのことで、三通りある。

①目の高さに持つもの

神饌、三方、御献備を入れた箱など。

②胸の高さに持つもの

祭詞、玉串、案、奉幣、大麻など。

③腰（腹又は帯）の高さに持つもの

膝衝、薦こしら、椅子など。

#### (2) 三持

物を持つときの手の様子のこと、三通りある。

①捧げ持ち

上位の人に物を手渡すとき、手のひらを上に向け、捧げるように渡す。（後取が祭主に祭詞を渡すとき等）

②進め持ち

同じ所役同士ときは、手のひらを向かい合わせて渡す。（替者が玉串案を手次ぐとき等）

③授け持ち

下位の人に物を手渡すとき、手のひらを下に向け、授けるように渡す。（祭主が後取に祭詞を渡すとき等）

(3) 三手

物を持つときの持つ位置のことで、三通りある。

① 上手かみて

上位の者は物の上部を取る。(祭主、奉幣役が、物を受け取るとき等)

② 中手なかて

同じ所役同士の者は物の同じ部位を持つ。(手長が三方を授受するとき等)

③ 下手しもて

下位の物は物の下部を取る。(後取、幣使が、物を受け取るとき等)

2 祭具の持ち方

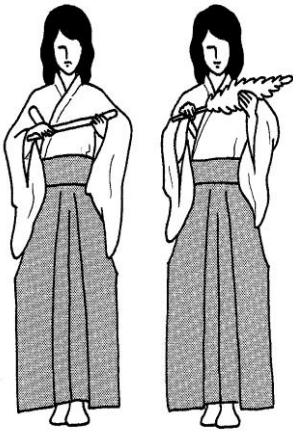
(1) 祭詞・玉串・奉幣・大麻など

祭具を扱う場合、指の間が開かないよう、常に正しくそろえる。物によっては親指だけ離して持つこともあ  
るが、他の四指は必ずそろえる。又、親指を祭具の上部にかけたり、目立つように突き出してはいけない。

右手は手のひらを下に向け、左手は手のひらを上に向けて、胸の辺りに、左高に斜めに持つ。

両手の間隔は、物の大小によって適当に変えるが、大体において間隔を余り広くしない方がよい。

奉幣、大麻等は、跪居又は着座するとき、紙垂(しで)の下端が床に触れないように心がける。また、木串  
の下はにぎりこぶし一つ分あけて持つようにし、両手の間隔は肩幅程度にする。



〈祭詞・玉串の持ち方〉



〈奉幣の持ち方〉

(2) 膝衝

膝衝は折りたたんだ後、開く方(合わせ目)を上にして自分の方に向け、左手の手のひらの上のにのせる。

右手は、親指を上側に、四指を下側にして、右横より挟み持つ。

腰の辺りに、左高に斜めに持つ。

(3) 三方・小案など

両手を同じ高さにして持つ。

三方は、人差し指と中指を折敷(鏡板)の裏に、薬指と小指を折櫃(胴台)に当て、親指は折敷の下の縁に沿ってかける。中指を奥の角にそわせるつもりで持つとよい。

左右より中に押し付けるようにして、目の高さを持つ。

薬指、小指を三方の眼象(穴)にかけたり、親指を折敷の上にかけてたりしない。

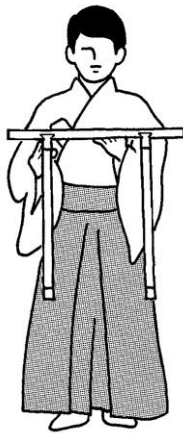
小案は、両手のそれぞれ親指を内側に、四指を外側にして、両脚の部分を挟み持ち、胸の高さに持つ。

親指を上にかけてたり、脚の間に四指を入れて握るようなことはしない。

(4) 大案

右手は、小案と同じようにして一方の脚を持ち、左手は、案の中程を下裏から支えて持つ。

二人で持つ場合は、それぞれ外側の手で脚を、内側の手で下裏を支えて持つ。



〈大案の持ち方〉



〈三方の持ち方〉



〈小案の持ち方〉



〈膝衝の持ち方〉

(5) 奉幣台等

左手の手のひらを上に向けて物の下から重さを支えるように持ち、右手を上(横)にして適当な所を持ちバランスをとるように持つ。

その他、台のある物(大麻等)や、横にして持てない物等も、これに準ずる。

(注)

・祭具を神前に進めるとき、三方類は折敷に縫目の無い方を、案は脚のあり木口(差し込み口)の見える方を神前に向ける。

・神饌、奉幣等を捧げ持つて神前に向かうときは、正中を進んでもよいが、空手のときはやや正中を避ける。

3

替者の作法(案・膝衝)

(1) 玉串案を設けるとき

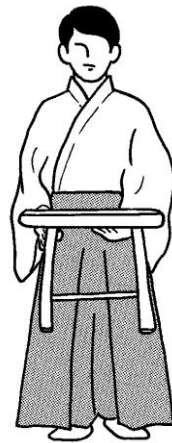
先ず、自席にて小揖、起座の後、祭具置場に進んで行く。(祭具置場が前方または下座の方にあるときは進む起座にて進み、後方にあるときは回転起座して進む)

次に、案の置いてある前で止立し、小揖、跪居の後、すぐ懐笏・懐扇(挿笏)して、案を胸高に持ち、回転起座にて立つ。

次に、神前の案を設けるべき位置の数歩手前で止立し、跪居、膝行(三步)の後、静かに案を置き、脚の下部を持つて少し前に進める。

次に、又手、膝退(三步)して、跪居のまま把笏・把扇し、小揖の後、退く起座で座を立ち、更に、小揖、逆行右回転(祭場の大きさによっては、逆行右折、または、逆行左折)して自席に戻る。(引き続き膝衝を設けるときは、逆行右回転の後、祭具置場に向かう。)

次に、自席に向かって小揖、着座の後、小揖して作法を終わる。(座前着座)



〈椅子の持ち方〉



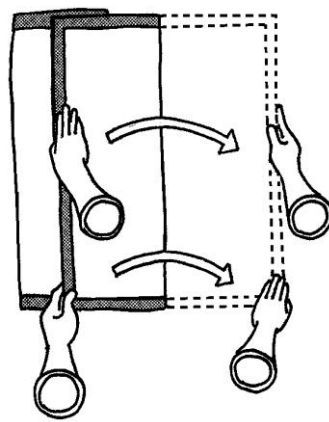
〈奉幣台の持ち方〉

(2) 膝衝を設けるとき

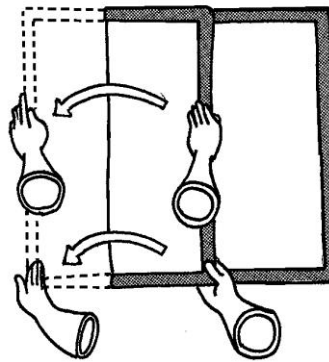
全体の作法（自席、祭具置場、神前での作法）は、案の設け方に準ずるので、展<sup>の</sup>べ方のみを記す。  
まず、膝衝を持った左手をそのまま前に出し、右手を引いて膝衝を縦に置く。

次に、三つ折りにされた膝衝の一番上の縁を、右手を上、左手を下にして持ち、右方に開く。続いて、内に折り込まれていた縁を、左手を上、右手を下にして持ち、左方に開く。

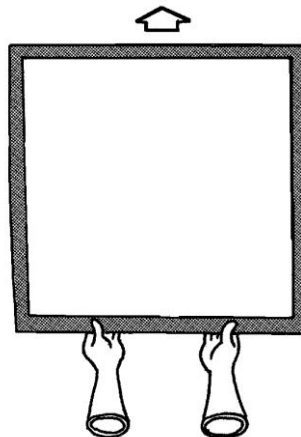
膝衝の手前の端を両手で持ち、少し前方に進めつつ位置を正す。このときの手は肩幅で、手のひらを上にして持つ。



①



②



③

〈膝衝の展べ方〉

(3) 膝衝を撤するとき

まず、自席にて小揖、起座の後、そのまま神前に進み、膝衝の数歩手前で止立、小揖して跪居になる。

次に、小揖、懐笏・懐扇（挿笏）の後、又手、膝行し、膝衝の手前の端を両手で持ち、少し手前に引き寄せ<sup>る</sup>。

次に、左側の縁を、左手を上、右手を下にして持ち、右方にたたむ。続いて、右側の縁を、右手を上、左手を下にして持ち、左方にたたむ。三つ折りすることになる。

次に、左手で膝衝の中程を下から持つと共に、右手で手前の端を挟み持ち、横に向け直し、腰の高さに左高

に持つ。

次に、膝退し、退く起座にて座を立ち、逆行右回転（祭場の大きさによつては、逆行右折、または、逆行左折）で神前を下がる。

次に、祭具置場にてすぐ跪居になり、膝衝を納めた後、把笏・把扇、小揖し、回転起座にて自席に戻る。

次に、自席に向かつて小揖、着座の後、小揖して作法を終わる。（座前着座。祭具置場が自席の後方にあるときは、座後着座する。）

（4）玉串案を撤するとき

先ず、進む起座にて自席を立ち、神前に進み、案の数歩手前で止立、小揖して跪居になる。

次に、小揖、懷笏・懷扇（挿笏）の後、又手、膝行し、案の脚の下部を持って少し手前に引き寄せ、胸高に持ち、膝退する。

次に、退く起座にて座を立ち、逆行右回転（祭場の大きさによつては、逆行右折、または、逆行左折）で神前を下がる。

次に、祭具置場にてすぐ跪居になり、案を納めた後、把笏・把扇、小揖し、回転起座にて自席に戻る。

次に、自席に座前着座または座後着座する。

案を撤する事は実際には稀にしかない。

（注）

・大麻を撤する場合も玉串案を撤するとき準ずる。

・祭具を設けるときには、他の祭具との配置に注意する。

・祭具を置くときには、所定の場所に直ちに置かずに、少し手前に置いてから、奥に押し進め、まず右、次に左とやや前後して手を離す。

・祭具を取るときには、まず左、次に右とやや前後して手をかけ、少し手前に引いてから取る。

・如何なるときも、両手で同時に持ったり、同時に離したりはしない。



・ 祭詞座を設ける場合には、祭主が拝をしたとき、その頭部と前方に設けた祭具との間に余裕（概ね笏の長さ）があるように心がける。

・ 奉幣座は、奉幣役と幣使の間で拍交拍手があるので、余裕を取って設ける。

・ 神前近くでの祭具進撤の作法をまとめると、次のようになる。

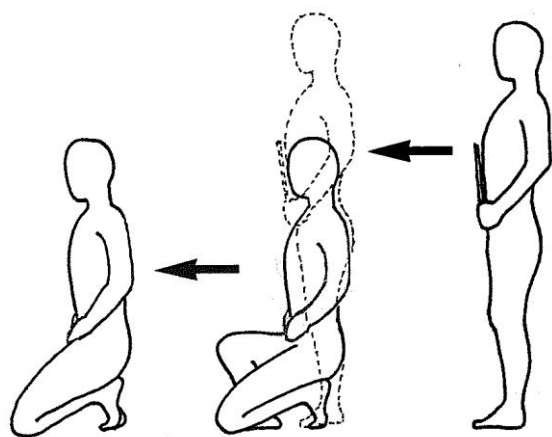
祭具を設けるときは、

【止立、跪居、膝行、祭具を置いた後、又手、膝退、把笏（把扇）、小揖、起座、小揖、逆行右回転】となり、

祭具を撤するときは、

【止立、小揖、跪居、小揖、懷笏（懷扇・挿笏）、又手、膝行、祭具を持った後、膝退、起座、逆行右回転】となる。

なお、正中での足のはこびは、祭具を設けるまでは、左から膝をついて、左から膝行するなど、左、左と進んで行き、神前を下がる時は、右足から膝退し、右足から立つなど、右、右となると覚えておくとうい。



〈神前への進み方〉

#### 4 後取の作法（祭詞・玉串）

後取は、祭詞、玉串を手次ぐにあたり、上体を低くして恭敬の態度を失わないよう心かける。

##### （1）祭詞を進めるとき

まず、自席にて、小揖、起座の後、祭具置場に進んで行く。

次に、祭詞の置いてある所の前で止立し、小揖、跪居の後、懐笏・懐扇（挿笏）して、祭詞を胸高に持ち、回転起座にて立つ。

次に、正中を避け、祭主の左後ろから神前に向かい、祭主の後方約六十センチ（約二尺）の所で止立する。次に、跪居になり、小揖、膝行し、左手を祭詞の下部にすりさげ、右手を離して膝上に置く。

次に、上体を屈め、左手をのばし、祭詞の上部の方を祭主の左の手に受けやすいように差し出す。つまり祭主の体と笏・桧扇の間に差し出すことになる。（祭主の作法の項参照）

次に、手次ぎ終わったら、又手、膝退して跪居のまま把笏・把扇し、小揖の後、右回転しながら立ち（回転起座）、自席に戻る。

次に、自席に向かって小揖、着座の後、小揖して作法を終わる。（座前着座）

##### （2）祭詞を撤するとき

まず、自席にて、小揖、起座の後、神前に進んで行く。（進む起座）

次に、祭主の後方約六十センチ（約二尺）の所で止立、小揖する。

次に、跪居になり、小揖、懐笏・懐扇（挿笏）の後、又手、膝行し、左手で祭詞を受け取り、右手を添えて、自然と左高になるように持つ。

次に、膝退、小揖の後、右回転しながら立ち（回転起座）、神前を下がる。

次に、祭具置場にてすぐ跪居になり、祭詞を納めた後、把笏・把扇、小揖し、回転起座にて自席に戻る。

次に、自席に向かって小揖、着座の後、小揖して作法を終わる。（座前着座。祭具置場が自席の後方にあるときは、座後着座する。）

(注)

・そこで、動作を起こす頃合としては、祭主が自席を立つ頃祭詞を取りに立ち、また、祭詞を巻き終わった頃祭詞を撤するため立つ。

・祭詞に続いて、玉串を進める場合は、祭具置場で祭詞と玉串を持ちかえ、再び神前に進んで行く。

・祭詞、玉串を持ったまま着座しているときは、自席より神前に向かう。そのとき、席の離就にともなう小揖は行う。

・祭詞袋を使用するときは、祭主が自席を立つまでに、祭詞を出して袋の上に乗せておく。笏・桧扇の出し入れは一切なく、祭詞袋を捧げたまま前述の作法を行う。ただし、手次ぐときには、一旦膝の上に祭詞袋を下ろしてから、左手を祭詞の下部にすりさげるようにして渡す。受け取る時も、一旦膝の上に祭詞袋を下ろしてから左手で祭詞を受け取るようにする。祭詞は自席に戻ってから祭詞袋に入れる。祭詞袋を持っても、原則通り必要な揖は行う。

(3) 玉串を進めるとき

全体の作法は、祭詞の進め方に準ずる。

(4) 手次ぐとき、右手を離し、左手で玉串を持ち、元の方から祭主の左の手元に、受けやすいように差し出す。列座の席（副祭主、講師、参拝者等）に玉串を進めるとき

前述の作法に準じて玉串を捧げ持ち、奉奠者の座席の少し下座で止立し、斜め向きになって、跪居になる。次に、小揖して、左右の手を持ち替え（右高）、僅かに膝行して恭しく奉奠者に手次ぐ。

次に、又手、膝退、把笏・把扇、小揖し、回転起座で自席に戻る。

(注)

・後取は、祭主を待たせないことを、第一に心掛けねばならない。

・物を手次ぐときは、常に相手が受け取りやすいように渡す。又、上位の人に物を手次ぐときは、自分の持っている所より上部を取らせるようにし、上位の人より物を受け取るときは、相手の持っている所より下部を取

## 二 神前における着座・起座

るようにする。

・ 自席がすぐ左にある場合は、右回転の起座は使用できないので、退く起座、逆行の左折という応用動作になることもある。

・ 副祭主、講師等に玉串を手次ぐ場合、(3)(4)どちらで行うのか予め打ち合わせが必要である。

・ 賛者の作法との大きな違いは、正中でないので、上座、下座で足をはこぶこと、回転起座で立つことである。また、祭主の後方で跪居になったときは必ず小揖するのも後取だけの作法の特徴である。

祭主を始め、神饌長、奉幣役、捲簾役等が、神前にて行う着座、起座の作法を記す。

以後は、これを神前着座の作法、神前起座の作法と呼ぶ。

### 【神前着座の作法】(傍線部)

先ず、神前の所定の場所まで進み出る。

次に、止立、深揖、跪居、膝行、着座、一拝を行う。

次に、更に神前に進む諸役は、跪居、懐笏・懐扇(挿笏)、又手、膝行して所作に移る。

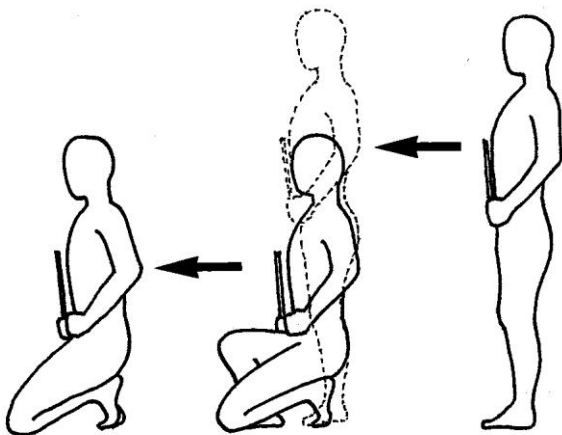
### 【神前起座の作法】(傍線部)

先ず、神前近くでの所作を終えたら、又手、膝退、

把笏・把扇して、着座する。

次に、一拝、跪居、膝退、起座、深揖を行う。

次に、逆行の右(左)折、又は右(左)回転を行い、自席に戻る。



〈神前への進み方〉

### 三 祭主の作法

#### 1 祭詞奏上

この中に示されている一拝は、その前後の作法の関係で省略されることがある。たとえば天地書附奉体の後の敬礼につづいて神前を下がる場合である。

(注)

・膝衝のあるときは、爪先を膝衝の手前の縁にそろえて止立する。膝行したとき、膝衝を押さないためにも、やや縁を踏むようにしてもよい。又、膝衝の中央に着座するよう心がける。

・神饌長や二人で行う捲簾のように、正中を外して着座するときは、上座、下座に気を付けて動作を行う。

祭詞奏上、玉串奉奠の作法を記す。

先ず、小揖し、少し下座に向かって膝行しながら三步目に立ち、神前にて神前着座の作法で膝衝に座る。

(止立、深揖、跪居、膝行、着座、一拝)

次に、後取が進んできた頃、笏・桎扇を左膝の中程に移して(桎扇の場合は、五橋開いたまま)立て、左手で笏・桎扇の中程を持ち、右手を放して、笏・桎扇の内側(体側)より後取の差し出す祭詞の上部を取り、笏・桎扇の内側に添え、正笏・正扇になる。

次に、座ったままで前段の再拝を行う。(再拝参照)

次に、笏・桎扇に祭詞を添えたまま、左膝の中程に立てて左手を放し、祭詞の上端から祭詞の一枚目の下に左手の親指を入れ、人差し指は笏・桎扇と祭詞の間に入れ、他の三指は笏・桎扇の外側(向う側)に添えて、左手を下まですり下げる。

次に、右手で置笏・置扇し、右手の親指を祭詞の開き目の中程に入れて持ち、左手を中程まですり上げ、左傍らでおもむろに開く。

次に、右手を上、左手を下にして祭詞を押し合わせ(読み始めを上にして閉じ)、前方に差し出しつつ深

揖する。このとき、典礼は「一同敬礼」の号令をかける。

次に、深揖を解くと共に、祭詞を正面で開いて奏上する。

#### 祭詞の巻き取り方

奏上しつつ、右手を祭詞の下部に移し、親指を祭詞の表に、他の四指を裏にして、下から祭詞を挟む。祭詞の一折を一辺にして三角を作るようにして、奏上し終わった分を巻き取って行く。

このとき、右手親指は三角の中にさし込まれている。

次に、奏上し終わると、左手を上、右手を下にして祭詞を押し合わせ（読み終わりを上にして閉じ）、前方に差し出しつつ深揖する。このとき、典礼は、「直る」の号令をかける。深揖を解く。

#### 祭詞の巻き戻し方

巻き取った祭詞を持った右手のひらを伏せるように翻し、祭詞の本体を左の二の腕に乗せる。右手を放して、両手で祭詞の端を持ち、静かに祭詞を巻き戻す。

次に、左膝の中段に祭詞を立て、左手で持つ。さらに、右手で把笏・把扇して祭詞に添え（桧扇は五橋開く）、正笏・正扇になった後、後段の再拝を行う。

次に、祭詞を笏・桧扇と共に左膝の中段に移して立て、右手で祭詞の上部を持って、笏・桧扇の外側（向う側）より後取に授け、直ちに置笏・置扇する。

次に、四拍手の後、把笏・把扇して、一拝する。（四拍手の前の一拝はない）

## 2 玉串奉奠

まず、置笏・置扇して、後取より玉串を受け取る。このとき、右手で玉串の元を手のひらを下にして、次に左手で中段を手のひらを上にして受け取る。

次に、玉串を左高に持ったまま前方に差し出しつつ心中祈念する。

3 天地書附奉体

次に、左手を前方に回し、右手を手元に引いて、玉串を縦にし、左手をすり下げて右手を放す。  
次に、右手で玉串の中程を裏より（手のひらを上に向けて）軽く持ち、更に玉串を右に回しつつ、元の方を神前に向ける。

次に、右手で玉串を前方に差し出し、左手を玉串の先のあたりの裏側に添え、案の上に奉奠する。案が遠いときは、少し膝行して奉奠し、終わったら元の位置まで膝退する。

次に、把笏・把扇し、拝礼（一拝四拍手一拝）する。

天地書附奉体が無い場合、直ぐ跪居になり、神前起座の作法の後、逆行の右折をして、自席にもどる。（玉串奉奠の後、一拝四拍手一拝があるので、神前起座の作法の最初の一拝は省略される）

典礼の「天地書附奉体」の号令と同時に浅い敬礼になる。

次に、「生神金光大神」まで先唱すると、上体を起こし、正笏・正扇で引き続き「天地金乃神 一心に願え」と先唱する。

次に、他の祭員、参拝者が「生神金光大神 天地金乃神 一心に願え」と唱えるが、この間、祭主も唱える。

次に、「おかげは和賀心にあり」と先唱。他の祭員、参拝者と共に「おかげは和賀心にあり」と唱える。

次に、「今月今日でたのめい」と先唱。他の祭員、参拝者と共に「今月今日でたのめい」と唱えながら、浅い敬礼になる。一呼吸の後、持笏・持扇になる。

次に、直ぐ跪居になり、神前起座の作法の後、逆行の右折をして、自席にもどる。（天地書附奉体後の敬礼があるので、神前起座の作法の最初の一拝は省略される）

（注）

・正式には、祭詞を奏上し終わると、一旦自席に戻り、祭詞座（膝衝）撤去の後、自席で後取の手次ぐ玉串を受け、改めて自席を立てて神前に進み、玉串奉奠するのであるが、実際には、引き続き行われる。

・右の場合の作法は、副祭主玉串、講師玉串など有的时候に使用されている。

#### 四 捲簾・垂簾（開帳）

先ず、祭詞を後取に授けた後、置笏・置扇、四拍手、把笏・把扇、一拝の後、神前起座（但し最初の一拝は省略）の作法にて、自席に戻る。

次に、祭詞座撤去の後、自席で跪居になり、懐笏・懐扇（挿笏）して後取の手次ぐ玉串を受け、おもむろに神前に進んで着座する。このとき、玉串を持ったまま、諸動作を行う。

- ・置笏・置扇は、膝衝のある場合に限り行う。
- ・立礼のときは、懐笏・懐扇するか、あるいは右手に笏・檢扇を持ったまま祭詞を開く。
- ・祭詞を開くとき、又巻くときには、目を正面に向け、手元を見ないように心がける。

捲簾、垂簾は、御簾の幅によって、一人又は二人で奉仕するが、一人で奉仕する捲簾の作法を示すと、次のようになる。

先ず、自席を立ち、神前着座の作法で着座する。

次に、跪居になり、懐笏・懐扇（挿笏）し、又手、膝行して御簾の所まで進み出る。

次に、御簾を両手で向う側に巻き込み、巻き上げるに従っておもむろに立ち、巻き終わったら巻いた所を左手で握り、右手で右（上座）の釣金具をかけ、手を持ちかえて、左手で左（下座）の釣金具をかける。

次に、終わって又手、跪居になり、膝退して一拝した位置まで戻り、把笏・把扇して、着座する。

次に、神前起座の作法にて立ち、逆行右回転、又は、逆行の右左折で自席に戻る。

（注）

・垂簾の作法は、捲簾に準ずる。ただし、釣金具は左（下座）から外し、巻き下ろすに従って体を低くし、膝を折って跪居になり、垂れ終わるまで跪居のまま作法を行う。

・二人で奉仕するときは、互いに遅速のないよう、動作を合わせる。この場合、釣金具は、二人とも内側（上座）を先にかけ、手を持ちかえてから、外側（下座）をかける。又、神前を退くときには、それぞれ内側、即



## 五 献饌・撤饌

### 1 定位配置

ち正中に向き合うように回転する。

・開帳の場合は、引き紐の所まで斜めに膝行する。開き終わったら又手になり、斜めに膝退して一拝した位置まで戻る。

・開帳に関しては、構造の違いにより、作法の応用が必要になる。一人で、左右両方の御帳を開く場合は、祭主側、副祭主側の順に開く。

#### (1) 神饌長の作法

まず、自席を立ち、正中をやや右側（副祭主側。神饌案の脚の正面のあたり）に避けて神前まで進み、神前着座の作法で着座する。

次に、跪居、膝行して神饌案の脚の手前に進み出、右回転して手長の方に向き直る。

次に、跪居のまま手長に目配せして、一斉に小揖の後、懐笏・懐扇（挿笏）して覆面をかける。

次に、蹲踞して、神饌の進められて来るのを待つ。

#### (2) 手長の作法

まず、神饌長が神前にて深揖するのに合わせて、自席において小揖し、起座の後、各々の定位に至る。

次に、各手長は定位に向かって小揖した後、跪居になり、原則として神饌長へ向くように回転（直接神饌長が見えない場合は、上位の手長の方を向くように回転）し、跪居のまま待つ。

次に、神饌長の目配せに従って一斉に小揖し、懐笏・懐扇（挿笏）して覆面をかけ、下位の手長の方に向き直るよう回転し、蹲踞の姿勢で待つ。

次に、調饌司（神饌所の元であり、手長の最下位の者や、信徒の神饌係が当る場合もある）は、各手長が覆面をかけ終わると、直ちに立って神饌伝供に移る。

## 2 神饌伝供

(注)

・覆面をかけるときは、上体を屈め、右手で覆面の中程を支え、左手で左耳にかけ、次に手を持ちかえて、右手で右耳にかける。外すときはこの逆に行う。

・覆面をかけるときに顔を左右に振ったり、上下、表裏を間違えないようにする。(合わせ目が上に、また、紙縫りが縦に見える方を表にかける。)

先ず、手長(元)は、又手のまま神饌に向かって小揖し、神饌を捧げ持ち、上位の手長の所まで進み、約一歩手前で止立する。

次に、上位の手長は、又手のまま小揖し、一歩進み出て左、右の順に手を出して神饌を受け取る。下位の手長は、三方に相手の左手がかかると、右手を少し引き、折敷裏の端を支え、相手の右手がかかると、左手を少し引き、折敷裏の端を同じように支え、相手が確かに受け取ったのを見定めて、右、左と手を放して又手になり、一歩退いて小揖し、回転して自分の定位にもどる。

次に、このようにして、手長は順次神饌を伝供して、神饌長に達する。

次に、神饌長は、跪居のまま又手、小揖して一歩膝行し、神饌を受け、定まった順序で神饌案の上に供え、その場で又手のまま一拝して定位に戻る。

(注)

・撤饌は、献饌の作法に準ずる。神饌長(又は手長)は、定位より進み出て、少し手前で一拝(又は小揖)し、神饌を撤し(又は受け取って)、一歩退きながら回転して定位に戻り、その位置で下位の手長の方を向き、下位の手長が進んで来るのを待つ。

・撤饌の場合は、覆面を用いない。

・神前に近い位置や、正中における神饌の授受は、なるべく跪居で行う。

そこで、神饌を待つ間の姿勢は、正中以外では立ったまま、上体をやや前に屈めて又手で待つが、正中では、

跪居で又手をして待つ。

・神饌長は、神饌の献饌にあたり、高い案の場合は立って供えてそのまま一拝し、低い案の場合は跪居で供えてそのまま一拝する。

・調饌司は、前もって神饌奉奠の順序を確認し、又、手長の人数に応じて三方の表裏を整えておく。神饌長を入れて人数が奇数のときは三方を正面から取るように、偶数のときは三方を裏から取るように向けておく。

・神饌伝供では、自分の定位より上手に向かつてのみ動き、下手に向かつては動かない。基準である自分の定位を厳重に守ること。

・神饌伝供では、常に内側、即ち正中の方を向いて回転すること。

・神饌長は、瓶子、水玉をお供えしたら、それぞれ下座の手で口を切り、三方の上の手前に置く。

・神饌案の数は多く、全ての案が最初から設置されていると、最上段の神饌を供えることが難しい。

このような場合、案も手長によって手次がれることもある。

・伝供のタイミングを合わせ、手空きの手長がないようにする。

・伝供の途中、神饌がくずれるなど、トラブルが発生した場合、神饌長は臨機応変に対応し、三方をならびかえるなどして、神前を整えなおすこともある。

・献饌のとき、正中では神前に近い祭員に神饌を手ついだあと、又手、逆行して元の位置（定位）まで退くようにする。

### 3 復座

各手長は、神饌を伝供し終わったら、定位に戻って元の向き（神饌長の方を向く）にもどり、蹲踞で待つ。

神饌長は、最後の神饌を供え終わったら定位に戻り、手長を方に向けて跪居になる。

手長は、これに応じて蹲踞の姿勢から跪居で又手の姿勢になる。

次に、神饌長は又手のまま、手長に向かって目配せをし、小揖する。

手長は、その小揖に合わせて、又手のまま小揖する。

## 六 奉幣行事

次に、手長は覆面を外したら、直ちに把笏・把扇し、各自で小揖、起座して、順次自席に戻る。

神饌長は覆面を外したら、把笏・把扇し、左回転して正面に向き直り、伝供前の位置まで膝退して着座し、神前起座の作法で自席に戻る。(自席の位置によって逆行の左折、又は逆行の右折でもどる。)

・伝供のタイミングを合わせ、手空きの手長がないようにする。

・伝供の途中、神饌がくずれるなど、トラブルが発生した場合、神饌長は臨機応変に対応し、三方をならびかえるなどして、神前を整えなおすこともある。

・献饌のとき、正中では神前に近い祭員に神饌を手ついだあと、又手、逆行して元の位置(定位)まで退くようにする。

食物の代表としての神饌をお供えするのが献饌行事であるのに対して、奉幣行事は、衣類の代表としての紅白の絹など(幣帛)をお供えする行事である。

まず、奉幣役は、自席を立って進み出て、神前着座の作法で膝衝(奉幣座)に着座する。

次に、幣使は、やや遅れて立ち、幣を左高に捧げ持つて奉幣役の左傍の線を進み、奉幣座の後方の程よい所に至って止立し、跪居になる。

次に、奉幣役は、頃合を見計らって置笏・置扇し、体を少し左方に向ける。

幣使は、膝行して奉幣役の左横やや前方まで進み、幣串の元を深く奉幣役の前に差し出す。

次に、奉幣役は、右手で下(幣使の右手より上)、続いて左手で上(幣使の左手より上)の順に受け取る。

幣使は、相手が受け取ると共に、右、左の順に手を放す。

次に、奉幣役は、おもむろに正面に向く。

幣使は、直ちに又手、膝退し、把笏・把扇の後、小揖して左膝を立て、回転起座で自席に戻る。自席の位置によっては退く起座、逆行の左折で戻ることもある。

次に、奉幣役は、兩段再拝の前段を行う。

まず跪居になり、左足を進めておもむろに立ち、右足を左足に踏みそろえる。次に、左足、右足、左足と引き、その最後の左足より着座すると共に、拝伏する。このとき、着座したら、幣の表を神前に向け直し、串の下端を左膝の前に置くと共に、串を軽く左肩に当てて、幣を真つ直ぐに立てる。そして、拝伏するに従って左手をすり下げて、両手を接する。終わったら、体を起こすに従って幣を元の左高の位置に戻す。

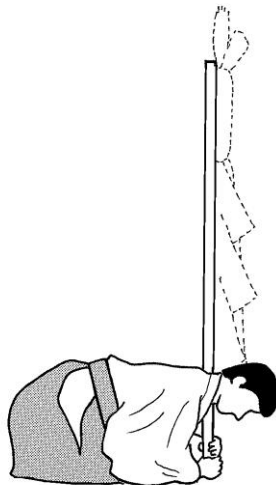
更に跪居になって、同様の作法を繰り返すが、今度は、右足を進めて立ち、右足、左足、右足と引いて、着座、拝伏することになる。以上が前段の再拝である。

次に前段の再拝がすみしだい、右手を腹部（にぎりこぶし一つあける）に、左手を前方にして幣を（表を上にして）差し出し、少し上体を前にかがめて心中祈念をする。このとき、麻や絹が床に付かないようにする。一から二呼吸の後、元の姿勢に戻る。

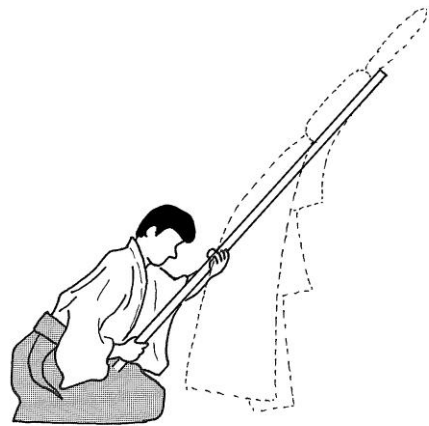
次に、前段の再拝と同じ作法で、後段の再拝を行う。

次に、兩段再拝がすべて終わろうとする頃合を見計らって、幣使は座を立ち、奉幣役の左傍の後方に至り、小揖、跪居、小揖の後、懐笏・懐扇（挿笏）する。

次に、奉幣役は、左右の手を持ちかえて（幣を体の正面にて表を上に向け、右手を左手の位置まですり上げる。次に左手を放し、元の右手の位置に持ち替える）、やや左に体を向け、幣を幣使に授ける。幣使は、膝行し、少し奉幣役の方へ体を向けてこれを受け取る。



〈奉幣行事の拝〉



〈奉幣行事の心中祈念〉

次に、奉幣役は、正面に向いて直ちに正笏・正扇になり、幣使が幣を立て終わるまで、上体をやや前にかがめ、恭敬の意を表す。

次に、幣使は、幣を左高に捧げ持ち、膝行して奉幣役の正面（正中）に回り込み、そのまま正中を膝行して神前に進む。そして跪居のまま左右の手を持ちかえつつ、奉幣台に挿し立てる。

続いて幣使は、奉幣台に両手を添え神前奥に進め、又手して正中を避け、右側（自分の左方）に斜めに膝退し、把笏・把扇の後、着座して一拝する。

次に、幣使は、跪居になって更に斜めに膝退したら、奉幣役の方に回転して向き直り、跪居のまま奉幣役と斜めに相對する。奉幣役も、幣使の方に少し向き直る。このとき、両者は適当な間を置いて相對する。

次に、両者同時に小揖し、奉幣役は置笏・置扇、幣使は懷笏・懷扇（挿笏）して、拍交拍手を行う。このときの拍交拍手は、奉幣役から打つ。また、幣使は跪居のまま打つ。

次に、幣使は、跪居のまま把笏・把扇し、左腿を右腿に付け、更に右腿を右に開いて下座の方に向き直り（参拝者席に正対し）、小揖の後、奉幣役の座の少し後方まで膝行し、右膝を立てて神前に向き直るように回転起座を行い、小揖して逆行右折（場合によっては左折）にて自席にもどる。奉幣役は、正面に向き直って待ち、幣使が自席に近付いた頃、神前起座の作法で自席に戻る。

（注）

- ・奉幣役は、両段再拝にあたり、体を出来るだけ動揺させないこと。
- ・拝伏のとき、幣が傾いたり、揺れないように心がける。
- ・拍交拍手は、一人で拍手しているときの間合いで行うよう、お互いに注意する。
- ・両段再拝の中で座るときは、膝衝の中央に着座すること。
- ・奉幣行事に先立ち、贊者が、奉幣台を神前に、膝衝を祭場（外殿）の下座の正中に設ける（正中が原則であるが、祭場が狭いときには、幣使が通れるよう、座を左側（祭主側）へ寄せることもある）。奉幣役が自席に復座後、膝衝を撤する。

## 七 典礼の作法

### 1 参向

楽が合奏に入ると、祭主に向かって挨拶（小揖）する。

祭員（祭主）を先導して参向（祭場に向うこと）する。そのとき、祭主の下座側を先導する。歩く速度は楽に合わせた緩歩。

神前に近付くと、いずれかの祭員席下（概ね自席側）に、神前へ斜めに向いて止立。祭員の動向を把握する。（正中を横切る場合は屈行する）

最後の祭員が自席に着座、小揖するのを確認したら、正中まで赴き、深揖の後、自席に向かい着座。

本部広前会堂や祭場のように、外殿が広い場合は、最後の祭員が着座を確認したら、正中まで進み出ず、自席側で神前に向かい深揖し、自席に着座することもある。

### 2 号令

祭員、参拝者の両方によく聞こえるように、はっきりと声を発する。

祭場（会堂）の大きさ、参拝者の数によっては、ゆつくりと発声する。

声にアクセントを付けたり、むやみに気張ったりしない。

祭詞奏上の際の「一同敬礼」は、祭主が祭詞を広げ、深揖するのに合わせて発声する。また、「直る」は、祭詞奏上が終わった後の深揖に合わせる。

捲簾の際、号令をかける場合は、捲簾役が御簾に手をかけたら「一同敬礼」、捲簾が終わり、捲簾役が跪居になったら「直る」と発声する。

祭詞のときや捲簾のときの「直る」の発声は深い敬礼のままでは声を通らないので、浅い敬礼で行ってもよい。また、捲簾役等の祭員の動静を把握するため、浅い敬礼の姿勢をとることもある。

玉串奉奠の際の「一同共に拝礼」または、「祭員共に拝礼」は、玉串奉奠者が、玉串を案に置いた頃を見計らって発声する。

3 退下

祭主の、退下前の小揖を見届けたら、小揖して自席を立ち、退下する側の祭員席の下の位置で、神前に斜めに向き止立する。(正中を横切る場合は屈行する)

祭主が正中で深揖するのに合わせて、深揖し、祭主を待つ。

祭主が自分も手前約一メートルの所へ来たら、祭主に向かって挨拶(小揖)する。

直ぐ向き直り、祭主以下祭員を先導して退下する。歩く速度は楽に合わせるが、参向より速い。

4 転座

参向、退下に準ずる。

## 八 先唱役の作法

典礼の「○○奉唱」の号令がかかると、直ぐ懐笏・懐扇して拝詞集を出し、浅い敬礼(拝詞集を閉じたまま)をする。

敬礼すると間があかないよう直ぐ発声する。拝詞集の該当ページは奉唱しながら探すようにする。(敬礼の姿勢で該当ページを探すと、姿勢が乱れる。)

発声については、一音一音切って、大きな声で、参拝者、祭員を引っ張るような気持ちでする。

先唱と唱和との間は、息継ぎをしないで、先唱の最後の音を少し延ばすようにするとよい。唱和の部分に入って、自分の息の切れる所で始めて息継ぎをする。

奉唱が終わり、最後の音で敬礼(拝詞集を閉じながら)になる。先唱者は最後の音を延ばす。

(注)

・「天地書附奉体」「取次唱詞奉唱」の場合は拝詞集を出さず、正笏・正扇で奉唱する。また、頭をおこして正笏・正扇の姿勢になるタイミングは、どちらも「生神金光大神」と先唱した直後である。



## 九 参向・退下

### 1 参向

楽がある場合は楽に合わせて歩く。おおむね緩歩。

二列で参向する場合は、角を曲がるときに気を付ける。内側の人はその場で向きを変えて待ち、外側の人が横にそろうのを確認してから歩を進める。

原則として自席のやや下手、正中に止立し、深揖する。

自席に向かい、座前着座。

霊前側から参向する場合は、霊前の正中を横切るとき、屈行する。

### 2 退下

自分より上位の祭員が小揖したら、少し遅れて小揖し、起座の後、参向のとき深揖した位置へ向かう。

上位の祭員が正中で深揖し退いたら、正中進み、止立し、深揖。

逆行右回転して、前の祭員に続いて退下する。

歩く速さは楽に合わせるが、参向のときより速い。

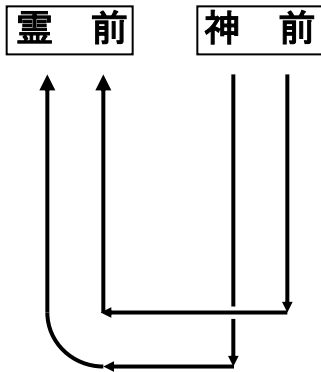
二列で退下する場合は、相手と動作を合わせることが肝要である。正中で深揖したら、お互い顔を見合わせながら内回りで回転して退下する。つまり、左側（祭主側）の祭員は逆行左回転になる。

霊前から神前の方へ退下する場合は、神前の正中を横切るとき、屈行する。

### 3 転座

参向、退下に準ずる。

二列で転座する場合、神前正中から霊前に向かって曲がる時、そのまま曲がると祭員の左右が入れ替わる。そのときは下図のように、二人は交差するとよい。



〈二列で転座するとき〉

## 十一 一人で仕える祭典作法

祭主、先唱役、後取、替者、典礼を一人で奉仕するためには、事前のしつらえ等に工夫が必要である。それは、祭主と後取など、一人では同時に行えないことが多いからである。

### 1 しつらえ

月例祭の場合、玉串案、膝衝を祭典前に所定の位置に設置する。また、祭主の左手元に三方等を用意し、その上に祭詞と玉串を置いておく。他の祭具も必要に応じて祭具置場に用意しておく。（参拝者用の玉串と案など）

宅祭等の場合は月例祭の応用として、膝衝を省略したり、参拝者用の玉串案を省略し、祭主の玉串案と同案にしたり、祭詞を懐中したりする。祭典の性格に合わせて、工夫が必要である。（天地書附、お供え物、拝詞集等の準備確認も含む）

### 2 作法（月例祭の式次第に従って説明する）

参向、着席—— 神前左側に着座する場合と、神前正中に着座する場合がある。左側に着座する場合は基本に同じ。神前正中に着座する場合は、参向するとすぐ神前着座の作法で着座する。

拝礼—— 「一同拝礼」の号令をみずからかけ、拝礼する。

神前拝詞奉唱—— 号令をかけた後、すぐ先唱をする。

取次唱詞奉唱—— 神前に着座している場合は、号令をかけた後、みずから先唱することが多い。先唱しない場合は、いったん左側に移り、号令をかける。左側に着座している場合は、基本と同じ。

祭詞奏上—— 左側に着座している場合は神前に向かい着座したのち、祭詞を手元の三方から右手でとる（懐中の場合は出す）。奏上の作法は基本に同じだが「一同敬礼」「直る」の号令もみずからかけることになる。後段の再拝の後、右手で祭詞を持ち三方に戻

す（または懐中する）。以後、基本と同じ。

玉串奉奠——三方から右手で玉串をとる。三方に玉串を用意していない場合は祭具置場へ向か

い、玉串を持ち、あらためて神前着座の作法で着座し、玉串を奉奠する。

参拝者玉串がない場合は、このとき、「一同共に拝礼」と号令をかける。

天地書附奉体——号令をかける。先唱をする。

参拝者玉串奉奠の準備——神前起座の作法で神前を立つ。三步逆行し、そこから賛者の祭具を撤する作法で

膝衝を撤し、参拝者用の玉串案を設置したのち、左側の祭主席へ着座する（参拝者に玉串を手次ぐこともある）。

参拝者総代玉串奉奠——号令をかける。

神徳賛詞奉唱——神前拝詞奉唱と同じ

拝礼——最初に同じ

転座以後、神前と同じ

（注）

・諸役それぞれの基本を習熟しておくことが大切である。諸役作法が交代するところの作法がおろそかにならないように気を付ける。

・二人で祭典を仕える場合、原則として、一人は祭主のみを奉仕し、他の祭員は、祭主以外の諸役をすべて分担する。ただし、参向、退下は、先導しない。（祭主、祭員の順に参向）

## 十一 信徒の祭典参加

みんなで奉仕する祭典であることから、積極的に参加、奉仕することが大切なことである。同時に、その作法も正しくし、真心を尽すということも大事なことである。

次に示すものは、特に信徒として祭典に奉仕する上で、作法を重んじられるものである。

## 1 取次唱詞先唱者（取次唱詞役）

### （1）心得

取次唱詞奉唱は、本教の根源である「お取次を頂く」ことを儀式化したものである。先唱者は参拝者を代表して取次を頂くのである。

先唱者は祭員と同様、身を清潔にし、服装を整え、祭典に臨む。

### （2）作法

まず、自席において、拝詞集の取次唱詞のページを開き、指を挟んでおく。

次に、「一同取次唱詞奉唱」の号令がかかると浅く一礼（揖）して自席を立ち、神前に向かう。

次に、予め打ち合せておいた位置で止立し、浅く一礼（揖）した後、着座する。

次に、拝詞集を開きながら上体を伏す（浅い敬礼）。この動作に祭員、参拝者は合せるので、そのことに心を配る。

次に、先唱を始める。「生神金光大神」で上体を起こし「御取次」と奉唱する。声を大きく、はっきり、一音一音切るように発生する。最後の「とりつぎ」の「ぎ」はやや延ばすように心掛ける。短く切ると語気が強くなり、命令調子になり、相応しくない。

先唱を続け、最後の「いきがみこんこうだいじんさまー」で上体を伏す（浅い敬礼）。

次に、その場を立ち、浅く一礼（揖）をし、数歩さがり自席に戻る。

## 2 玉串奉奠者

### （1）心得

玉串は信奉者の真心を紙垂に込めてお供えするものである。また奉奠者は参拝者の代表である。そのことを心得えて粗末の無いように正しい作法で奉奠することが肝要である。

代表は祭員と同様、身を清潔にし、服装を整え、祭典に臨む。教会長（または信徒総代）から依頼があれば、喜びの気持ちで御用させて頂く。その心が神様に受け取って頂けるのである。

(2) 作法

まず、賛者または信徒総代から一札をしながら玉串を受け取り、玉串の中程を左手で下から、元の部分を右手で上からつまみ持ち、胸の高さにやや左高に持つ。

次に、浅く一札(揖)をしてその場を立ち、神前(玉串案の前)に向かう。

次に、神前の前で止立し、浅く一札(揖)をした後、着座する。

次に、玉串を持ったまま前方に差し出しつつ、願いを込めて深く一札(一拝・心中祈念)をする。

次に、左手を前方に回し、右手を手元に引いて、玉串を縦にし、左手をすり下げて右手を放す。

次に、右手を玉串の中程を裏より(手のひらを上に向けて)軽く持ち、更に玉串を右に回しつつ、元の方を神前に向ける。

次に、右手で玉串を前方に差し出し、左手を玉串の先のあたりの裏側に添え、案の上に奉奠する(案の遠くに着座していた場合は少し前に出て奉奠し、終わったら元に戻る)。このとき、紙垂が正しく櫛に乗っているよう気を付ける。(紙垂の方が重要である)

次に、一札(拝)、四拍手(基本作法参照)、一札(拝)する。このとき、「参拝者一同共に拝礼」の号令があることがある。(玉串総代が一組の場合、または、最後の組の場合)他の参拝者が動作を合せやすいように心を配る。

次に、その場を立ち、浅く一札(揖)をし、数歩さがり自席に戻る。

3 補助賛者

(1) 心得

祭典が荘厳に、また円滑に執行される為には、いずれも大切な御用と心得て奉仕する。

それぞれの御用にふさわしい服装(儀式服に準ずる服装で奉仕する。たとえば、白衣に紫袴とかそれに近い和服。なお、洋服で奉仕する場合でも上着を着用するようにする)で奉仕する。身体に気を付け、当日の御用に欠けることがないようにする。分担が決まれば、責任を持って御用させて頂く。受けたおかげのお礼をさせ

て頂くのが御用である。神様は真心からの御用をお喜びくださる。

いずれの御用にしても、相手がある。相手が次の御用をしやすいように心配りすることが肝要である。

## (2) 御用内容

### ・祭具を手次ぐ

常日頃から教師と共に替者の作法について学習しておく。御用にあたっては、替者が次の御用がしやすいように、祭具を手次ぐことが重要である（玉串案、膝衝等は、自分は反対を持つようにすると、替者は正しく受け取ることができる）。また、式次第を充分に把握し、替者や後取を待たせることがないよう心掛ける。

### ・宣教の補助

宣教の補助とは、神伝を講台から下げる等の御用である。講師（読師）が神伝を捧読し終わり、三方の上に神伝を納めた後、一拝四拍手一拝をする。その頃合を見計らって座を立ち、講台の前で一礼（揖）し、三方を捧げ持ち、数歩さがりながら、所定の位置に納める。

### ・献饌の御用（手長）

献饌行事の前には所定の場所に配置し、覆面も着用する。

常日頃から教師と共に献饌の作法について学習しておく（献饌、撤献作法参照）。

### ・玉串を手次ぐ

参拝者総代玉串奉奠者に玉串を手次ぐ御用がある。替者が玉串案を設置する頃、玉串を順次代表に手渡す。そのとき、総代が左高に持てるよう、自分は玉串の中程を右手で上から、元を左手で下から（手のひらを上に向けて）、やや右高にもつ。紙垂が重要であるから、榊の上に正しく載っているように渡す。

## 4 その他の役割（事前準備も含む）

### (1) 教会の洒掃さいそう

祭典を迎えるにあたり、神前、広前、境内を掃除させて頂く御用である。信心修行と心得て掃除するところに、洒掃という意味がある。「先生の教会」と思っって奉仕するのではなく、「神様の教会」「私の教会」と思い、

心を尽くす。

相談の上、計画を立て、分担に責任をもって洒掃する。洒掃には「これで済みました」ということはない。

(2) 直会の準備

神様のお下がりをご参拝者が頂くための準備に当る御用である。御用だからといって、祭典中に準備しているのでは、工夫をする必要がある。教話を拝聴した後、すばやく配膳が出来るように、予め計画を立て、準備をしておく等の工夫もできる。

調理の最中、極力私語を慎み、天地のお恵みが粗末にならないよう心を込めて奉仕することが大切である。調饌の心構えと同じと心得る。

(3) 受付け

たとえば、次に示す御用がある。

- ・ お供えを受け取る。
- ・ 奉献者名簿（お届帳）の記帳する。
- ・ 御神米を渡す。
- ・ 配付物を渡す。
- ・ 必要に応じて、施設の案内、祭典の説明等をする。

(4) 調饌（調饌員）

教師の指導のもと、調饌の御用に当る。調饌については、予め学習しておく。

手を洗い、服装を調べ、覆面をする。御用にあたっては身体を整え、不用な言動を慎む。喫煙などしない。

(5) 更衣係

祭員の更衣を手伝う。

手を洗い、御用に相応しい服装で奉仕する。

祭員から、白衣、じゅばん、足袋、祭服一式を預り、身につける順に着やすいよう整えておく。

祭服の着かたや、たたみ方を予め学習しておくことが大切である。祭員にその度に聞いていたのでは御用にならない。

(6) 典樂、オルガン伴奏

祭典中の奏樂、本教の歌斉唱の伴奏の御用に当る。習礼しゅうらい(予行演習)を充分積み、最高のものをお供えするつもりで奉仕する。祭典中の待機の時間も大切な御用と心得て参拝する。

(注) 御用させて頂くにも、何をすればよいのか知っていることが大切なのである。祭典のまでに、企画会議、研修会等を自己の研鑽に努める。

## 十二 立礼における作法・椅子を使った作法

1 自席へつく作法  
立礼の作法と、立礼に準じた椅子の作法(へ)内が立礼に加わる)を記す。

座前着座は、自席に向かって止立、小揖、向き直って小揖。(椅子に座る。)

向き直るときには、下座の足を上座の爪先の前にほぼ直角に踏み入れ、その爪先を軸にして体を回転させつつもう一方の足を列の線に合わせて立ち、最後に両方の足をそろえる。

座後着座は、列後から列の一步手前で止立、小揖、下座の足、上座の足と進めて、爪先を列の線に踏みそろえて小揖する。(椅子に座る。)(傍線部は列をそろえる祭員がいる場合)

2 自席を離れる作法

(椅子から立つ)小揖、下座の足から進む。

3 神前着座の作法

**祭主の場合** Ⅱ 所定の位置の三步手前で(椅子の後ろで)止立、深揖、三步進行、止立、(椅子に座る)一拝  
祭主以外の場合 Ⅱ 所定の位置で止立、一拝



4 神前起座の作法

**祭主の場合** Ⅱ 一拝、へ椅子から立ち、椅子を避けて、逆行し、深揖、自席の方へ向きをかえて進む。

祭主以外の場合 Ⅱ 一拝、逆行

5 神前に案（椅子）を進めるとき（贅者）

神前の案（椅子）を設ける位置で止立、案（椅子）を置いたら、又手、逆行三步（右足を下げる、左足を下げる、左足に右足をそろえる）、把笏・把扇、小揖、逆行右回転で下がる。

6 神前の椅子（案）を撤するとき（贅者）

神前にある椅子（案）の三步前で止立し、小揖、懐笏・懐扇（挿笏）、又手、進行三步（左足を進める、右足を進める、右足に左足をそろえる）の後、椅子（案）を持ったら、逆行右回転する。

7 祭詞（玉串）を手次ぐとき（後取）

先ず、祭主の左後方三步前で止立、小揖し、三步進行（下の足を進める、上の足を進める、上の足に下の足をそろえる）して、祭詞（玉串）を手次ぐ。

次に、三步逆行（上の足を下げる、下の足を下げる、下の足に上の足をそろえる）して、把笏・把扇し、小揖、逆行右回転で自席に戻る。

8 祭詞を下げるとき（後取）

先ず、祭主の左後方三步前で止立、小揖し、懐笏・懐扇（挿笏）、又手、三步進行して、祭詞を受け取る。  
次に、三步逆行して、小揖、逆行右回転で自席に戻る。

9 敬礼

**立礼や、椅子に座っての敬礼は、平成二十年六月に、浅い敬礼、深い敬礼は一つの敬礼に統一された。**

敬礼は、正笏・正扇から、笏尾、要を下腹に引き付けながら、上体を倒す。このとき、左図のように、上体は六十度、笏・扇、扇は床と平行にする。

## 献饌行事

## (1) 神饌長の作法

座礼との相違点は、神前着席、離席の作法と、蹲踞の姿勢である。神前着席の作法は「止立、一拝」である。蹲踞の姿勢については、後に述べる。

跪居での神饌の伝供はなくなるので、立ったままの伝供になる。

## (2) 手長の作法

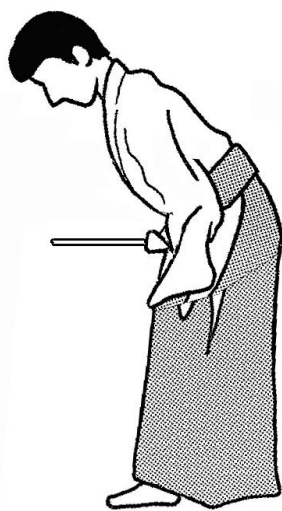
座礼との相違点は、神饌長の作法に従い、自席を立つタイミングと、蹲踞の姿勢である。蹲踞の姿勢については、後に述べる。

座礼においては、神饌長の神前着座の作法「止立、深揖、跪居、膝行、着座、一拝」の「深揖」に合わせて、手長が小揖して立つ。しかし、椅子での作法においては、神饌長が自席を起立し、小揖したら、手長は少し遅

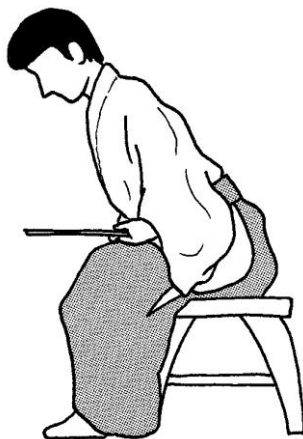
拝詞奉唱の前後の敬礼は、笏・桧扇を持たない代わりに、拝詞集を、笏・桧扇に見たてて敬礼をすると美しく作法ができる。そのとき、拝詞集は閉じる。(該当のページは、唱和するようになって開く。)

敬礼作法中、笏尾、要は下腹に引き付けたまま。また、両手も笏・桧扇の正しい位置を持ったままにしておくこと。姿勢を維持することに辛くなり、両膝や腿に肘をついたりしては見苦しい。

なお、拝は、正笏・正扇に構え、笏頭、扇の上端を目通りまで垂直に上げ、次に、敬礼の姿勢になる。



〈立礼の敬礼〉



〈椅子に座っての敬礼〉

11 蹲踞

れて起立して待つ。神饌長の神前着席の作法「止立、一拝」の「一拝」に合わせて、手長は小揖をし、定位配置するとよい。

懐笏・懐扇（挿笏）して、又手で正立の姿勢を整える。

男子は、足の爪先は動かさずにかかとを少し開き、そのまま膝を折り、腰を下ろしてうづくまる。このとき、かかととは地に平につけると共に、膝が開いたり閉じたりしないよう気をつける。

女子は、そのまま膝を折って腰を下ろし、うづくまる。ただし体格によっては男子の作法で蹲踞してもよい。両手は、両膝を抱え込むようにし、背をやや曲げる。

実際この姿勢をとることは難しく、また、座礼に慣れていない者にとつて、違和感を持つ姿勢である。応用として、定位配置後の蹲踞に代わり、又手し、上体を深く倒す姿勢がよい。



〈立礼の蹲踞〉



〈立礼における蹲踞の代替〉

12 奉幣行事

奉幣行事における、両段再拝は、本教における最高の敬礼作法である。椅子に着席したままで作法を行うと、敬礼を中断することになり、本来の敬礼の意味を損なう。したがって、奉幣行事に関しては、祭場が立礼のしつらえであろうと座礼で行うとよい。

または「幣帛」を三方の上に載せ、奉獻する形にしてもよい。

(注)

正式の立礼では、椅子に座っていても、拝礼、奉唱、祭詞、玉串の度に、祭員起立、所作、祭員着席となるのであるが、だんだんと椅子に座ったまま、座礼に準じた形で行われるようになって来ている。

- ・椅子を使った作法は、立礼に作法の前後に、座ったり、立ったりするのであると理解するとよい。
- ・立礼の特長としては、膝行、膝退のかわりに、三歩づつ進行、逆行する。

## (参考) その他の行事作法

### 1 大麻行事

昭和五十八年の祭式制定にあたり、修祓行事は廃止されたが、大麻行事まで廃止されるまでにいたらず、『式教本』の基本次第の中には掲載しない。」というものであった。また、地鎮祭における「四方払い」に代わるものとして「治めの行事」が採用されたが、具体的な作法については「大麻行事に準じる」とされた。

大麻行事は、ご無礼、不行届きをお詫びし、改まって祭典を奉仕させて頂くものとして仕える。

神道の、しんどう 榊に紙垂を付けたものと異なり、本教では四角い木の串に紙垂を付け、形を整えた独自のものを大麻という。

その作法を以下に示す。

まず、自席を立てて大麻の前に進みて、約一、五メートル手前で止立し、神前着座の作法で着座する。

次に、跪居になって、懐笏・懐扇(挿笏)の後、又手、膝行して大麻の直前まで進む。

次に、左手を下(台)に、右手を上(串)にして、大麻を台より抜き取ると同時に、左手を右手の上に持ちかえ、右手をすり下げて、胸の高さに左高に持ち、膝退して小揖する。

次に、座を立ち、逆行右回転、または、膝退して目的の場所に向かう。

次に、大麻を持ったまま小揖し、右手を腹部に、左手を前方にして大麻を正面に構え、右手を左手の下まで

すり上げ、左手を下に持ちかえる。このとき、大麻の正面は上を向き、左手は臍の辺りに、右手は前方に差し出した形になる。

次に、大麻を滞らないように、おもむろに左、右、左と振り、左方で振り止めたら、左手を右手の上に持ちかえ、右手をすり下げて、元の姿勢に戻って小揖する。(以後くりかえす)

払い終わったら、大麻台の前(最初の一拝した位置)に行き、止立、跪居、小揖、膝行して台の直前まで進み、大麻を正面に立てつつ、右手をすり上げ、左手は串を離し台をささえ、串を台にさし立てる。

次に、又手、膝退した後、把笏・把扇し、着座する。

次に、神前起座の作法で自席に戻る。

(注)

・地鎮祭の「四方払い」は、祭壇に向かって右前方、右後方、左後方、左前方、祭主、参拝者の順に払う。また、「治めの行事」も、おおむねこれに準じる。(人に向かっては行わない)

・大麻の串を持つとき、下方にある手は、常に串の下端を約三センチ程余して持つ。

・大麻を持つとき、麻や紙垂を祭服の袖に抱え込んだり、床に付けたりしないよう注意する。

・大麻を振るとき、麻は上を向いたまま振るようにし、前方に振り向けないようにする。又、大麻の頭は水平に振り、上下にしゃくらないようにする。

・行事を行うにあたり、対象に触れるほど接近しない。

・大麻を台に立てた後は、麻や紙垂を手や笏・桎扇で触れないこと。

・大麻行事が終り、大麻役が自席に複座したのち、替者は大麻を撤する。

参向着席後、全祭員の気持ちを一つにするため、祭員そろって小揖をすること。

祭主が玉串を奉奠するとき、両側の祭員は、少し神前へ向き直ること。

左側（祭主側）の男性祭員は、左膝を一度閉じて、右膝に接し、続いて右膝を開いて正座の姿勢になる。女性祭員は、右膝を少し開き、その膝に、左膝を接するように閉じ、正座の姿勢になる。

右側（副祭主側）の祭員は、左右を替え、右の作法に準じる。  
角度に応じて以上を繰り返す。

終祭において、霊璽奉遷の際、「オー」と発声すること。

その作法は、正笏・正扇し、浅い敬礼になる。

最初は小さい声から始め、徐々に声量を上げ、声量を安定させしばらくした後、速やかに声量を下げる。

霊璽奉遷については原則一声とする。

以前には、開扉閉扉、降神昇神行事において用いていた。

## 第四部 儀式の種類と祭員の配役

### 一 儀式の種類

本教の儀式については、「金光教教規」第二章生神金光大神取次、第七条第3項に、「各種の活動は、祈念、儀式、教話、集会、講演、文書、放送、社会奉仕その他をもつて行う。」と規定してある。

また、本教の儀式としては、以下のように記してある。

(本部広前の儀式)

金光教教規 第二十二条 本部広前においては、次に掲げる儀式を行う。

(執行日については「教規施行細則」第六条)

- 一、元日祭 (一月一日)
  - 二、春季霊祭 (春分の日)
  - 三、天地金乃神大祭 (四月十日)
  - 四、教団独立記念祭 (六月の第二日曜日)
  - 五、秋季霊祭 (秋分の日)
  - 六、生神金光大神大祭 (十月十日)
  - 七、立教記念祭 (十一月十五日)
  - 八、布教功労者報徳祭 (十二月の第二日曜日)
  - 九、越年祭 (十二月三十一日)
  - 十、月例祭 (毎月十日及び二十二日)
- 2、前項各号に掲げるもののほか、奉告祭、祈願祭、感謝祭及び慶弔等の儀式その他申請による儀式を行う。

(儀式の執行)

教規施行細則 第四条 儀式は、教主、教会長その他の教師が執行する。ただし、必要により、教師の指揮の

下に、輔教又は信徒にその補助をさせることができる。

2、儀式は、祭式教本に準拠して執行する。

(教会の儀式)

金光教教規 第二百二十八条 教会においては、第二十二条の規定に準じ、当該教会で定めるところにより、儀

式を行う。

教会規則準則 第六条 この教会においては、次に掲げる儀式を行う。

一、元日祭

二、春季霊祭

三、天地金乃神大祭

四、秋季霊祭

五、生神金光大神大祭

六、立教記念祭

七、越年祭

八、月例祭

(九、開教記念祭)

(十、何々)

2 前項に掲げるもののほか、奉告祭、祈願祭、感謝祭及び慶弔等の儀式その他申請による儀式を行う。

これらの儀式を、恒例儀式と諸祭(臨時儀式、申請儀式)に分け、その意味合いを理解しておくことが大切である。



## 二 恒例儀式

恒例儀式とは、日時がほぼ定まっております、定例として執行される儀式のことである。『祭式教本』に恒例儀式について、次のように記してある。

本教の祭典は、生神金光大神取次の一形態であり、同信の者が集まり、心をそろえて神（霊）に向かい、真心を込めて奉仕し、神聖な時を過ごす儀式である。

祭典を奉仕することによって、信奉者は、自分の信心を確かめ、信奉者としての自覚を深め、連帯を生み出し、社会に向かっては、この道の信心を表明するものである。

主な恒例儀式の意味について記す。

### 1 元日祭

元日は、一年の生活が始まる日であり、元日祭は一年のことを祈願する祭典である。

「元旦祭」「新年祭（式）」「年頭祈願祭」という名称で執行することもある。

### 2 春季霊祭

本部広前及び教会には、教団、教会を支え、発展させてきた信奉者の霊れいをはじめ、それぞれに縁の深い霊が奉斎され、日々礼拝している。

春（秋）季霊祭は、季節の折り目に当たる春（秋）分の日、改めて霊神達にお礼を申し、さらにその立ち行きを願い、信心の授受継承の祈りを込めて奉仕する祭典である。

### 3 天地金乃神大祭

天地金乃神大祭は、教祖金光大神によって開現された、天地金乃神の広大なみ恵みと、深遠な思召しに対し、感謝の真をささげ、神への思いを深め、神願成就を祈願する祭典である。

#### 4 教団独立記念祭

教団独立記念祭は、教団の独立に思いをいたし、金光大神の信心を世に現し伝えるために、生命をかけた先人の志を受け継ぎ、教団活動の展開を神に祈願する祭典である。

#### 5 秋季霊祭

春季霊祭に同じ

#### 6 生神金光大神大祭

教祖金光大神は、神と氏子との恩人とたたえられ、神命により旧暦九月十に「金光大神祭」を仕えられていた。そして、明治十六年十月十日（旧暦九月十日）、「金光大神祭」の当日神上がりされた。

生神金光大神大祭は、「金光大神祭」の内容を頂くと共に、教祖の年祭の意味をも込めて奉仕する祭典である。

また、教祖様のお徳を称え、教祖様が現してくださった永世生きどおしの生神金光大神取次をあらためて頂き、私たちもそのはたらきを現していくことを祈願する祭典である。

#### 7 立教記念祭

立教記念祭は、立教神伝の下がった日に、立教の真義を自覚的に頂き直し、天地金乃神の願いを世に現し、人を救い助けられた、教祖金光大神の信心を、身に受けていくことを祈願する祭典である。

#### 8 布教功労者報徳祭

布教功労者報徳祭は、教統保持者をはじめ、教会長その他布教功労者とたたえる霊神に対する祭典である。これら諸霊神は、生神金光大神取次の道を顕現されたのであり、祭事は、諸霊神を取次の神と仰ぎまつり、その精神を受け継ぎ、布教への願いを新たにしていくなのである。

#### 9 越年祭

越年祭は、元日祭に対応し、一年の生活の終わりの日に当たり、一年のことを感謝する祭典である。「年末感謝祭」という名称で執行することもある。

(注)

月例祭は、教祖金光大神は、神命によつて、十日を金光大神、二十二日を金乃神、二十三日を月天四、二十四日を日天四のご縁日と定められたことに由来し、十日に金光大神、二十二日に天地金乃神の祭典を行う。

・その他、各教会ではそれぞれに教会規則で定めた祭事を行っている。例えば、「月例霊祭」「夏越感謝祭」「開教記念祭」「〇〇祈願祭」が挙げられる。

### 三 諸祭（臨時儀式）

恒例の儀式以外の儀式を、諸祭（臨時儀式）という。また、申請に基づいて行われるので、「申請儀式」ともいう。

『祭式教本』に諸祭について、次のように記してある。

諸祭は、主として申請に基づくので、申請者の願いに応えることがある。又、祭典の性格から、未信奉者も集まる。従つて、社会に対して本教の信仰を表明すると共に、未信奉者になじむ儀式表現が必要である。

なお、諸祭は、地方の慣習と微妙にかかわっているから、本教の儀式としては、一律に定めることがむつかしい。そこで、儀式構成は、基本の式次第を応用し、本教の信仰を、儀式の上にも表現するとともに、対象となる事柄や、目的に合わせて行える行事を加えて構成する。

主な諸祭の意味について記す。

## 1 帰教式

信徒が、死生の安心を得、冠婚葬祭を本教に託することを願ひ出た者が、教徒となる時行う。このことを、神様に奏上し、又、その教徒が願ひ出た霊を教会又は本部広前に祀る儀式である。

## 2 結婚式

個人だけの帰教、家族そろつての帰教、先祖まで含めての帰教などがある。また改式（祭）ともいう。

信奉者が、結婚という新しい人生の出発を神に報告する儀式をいう。

先祖の霊神達にその旨、報告する儀式を加えてもよい。

## 3 葬儀式

教徒の帰幽の後に仕える、終祭、告別式、火葬（埋葬）の儀、葬後の儀を総称して葬儀式という。

終祭は、人生最後の儀式であり、祭主が死者に代わつて、神に死者の生涯のお礼を申し上げ、以後の立ち行きを願うもので、いわば、死者を神に取次ぐ儀式である。（この時、故人におくり名を送る）

告別式は、故人に対し、会葬者（縁故、知人）が告別をする儀式である。

火葬（埋葬）の儀は、近親知己の者が遺骸と最後の別れをする儀式で、火葬場（墓地）で行う。

葬後の儀は、霊に対し、葬儀終了の報告と、新霊神としてお祀りする旨を奏上する儀式である。

以前は、遷霊祭（帰幽奏上祭―遷霊―霊鎮祭）、告別式、火葬場祭、葬後霊祭をもって葬儀式としていた。

## 4 霊祭（新霊神祭、式年祭）

旬日祭、合祀祭のことを、新霊神祭という。

原則として帰幽の日を含めて十日毎に行う霊祭を旬日祭（十日祭、二十日祭、三十日祭、四十日祭、五十日祭）といい、これは、新霊神への追悼と、霊の道立てを中心とする祭である。ただし『祭式教本』では二十日祭、四十日祭は省略されている。（日数は、帰幽当日を起算日とするのが原則であるが、それぞれ教会の慣習で、翌日を起算日とする場合もある）

合祀祭は、五十日間祀った新霊神を、先祖の霊神に合わせ祀る儀式である。（この時、霊神簿に霊神名を記

入する)

式年祭は、故人の一年祭、三年祭、五年祭、以後五年毎、五十年祭以後は十年毎に、百年以後は五十年毎に行う霊祭をいう。式年でない年に行う霊祭は、例年祭という。(この時の年は、満年齢で数える)

#### 5 地鎮祭

建築、工事に際し、現地において行う。神である土地にお礼申し上げ、工事中の安全を祈願し、その家の発展を願う儀式である。

建築に関する代表的な儀式であるが、他にも、起工式、棟上祭(上棟式)、竣工式、落成報告祭などの儀式がある。

#### 6 その他

成人を祝う成年祭、学問を勧める勸学祭、その他、人生の諸事に関わって感謝祭、奉告祭、祈願祭などがある。これら地方の風俗や、個人の信仰と深く関わるものであろう。

### 四 祭員の配役

儀式の祭員には、次の種類がある。

- ・祭主—— 祭典において、参拝者の願いを神に取次ぎ、神の思召しを参拝者に伝える取次者であり、祭典執行の主宰者である。
- ・副祭主—— 祭主をたすけ、祭主に事故ある時は、祭主に代わって祭典を進行する。
- ・先唱役—— 神前拝詞、神徳賛詞等の先唱をする役である。
- ・神饌長—— 神饌献撤行事の長で、神饌一切のことを司る。
- ・奉幣役—— 奉幣行事を司る。
- ・弊使—— 奉幣役に幣を渡したり、奉幣役に代わって幣を神前に進める役である。
- ・手長—— 神饌長に従って、献饌、撤饌を奉仕する役である。

・捲簾役・開帳役——神前の内殿と、外殿の境の御簾（几帳）を巻く（開く）役である。

・後取——祭主に祭詞、玉串を手次ぐ役である。祭主の身のまわりの世話役でもある。

・典礼——祭主の命を受けて、祭典の一切の進行に責任を持つ。

従って、号令を下し、祭典を指揮する。事故などはすみやかに処理するよう応用工夫の心を養っておく。

・典礼補（替儀）——典礼をたすけ、指導に当たる。

・替者・補助替者——玉串案、膝衝などの設置や撤去を行い、又、典礼の指示に従い事に当たる。

・調饌司・調饌員——神饌の調饌に当たる。調饌司は調饌員を指揮監督する。

〈参考〉

その他に、祓主、おおぬさ大麻役、奏上詞役、御祈念役等もある。

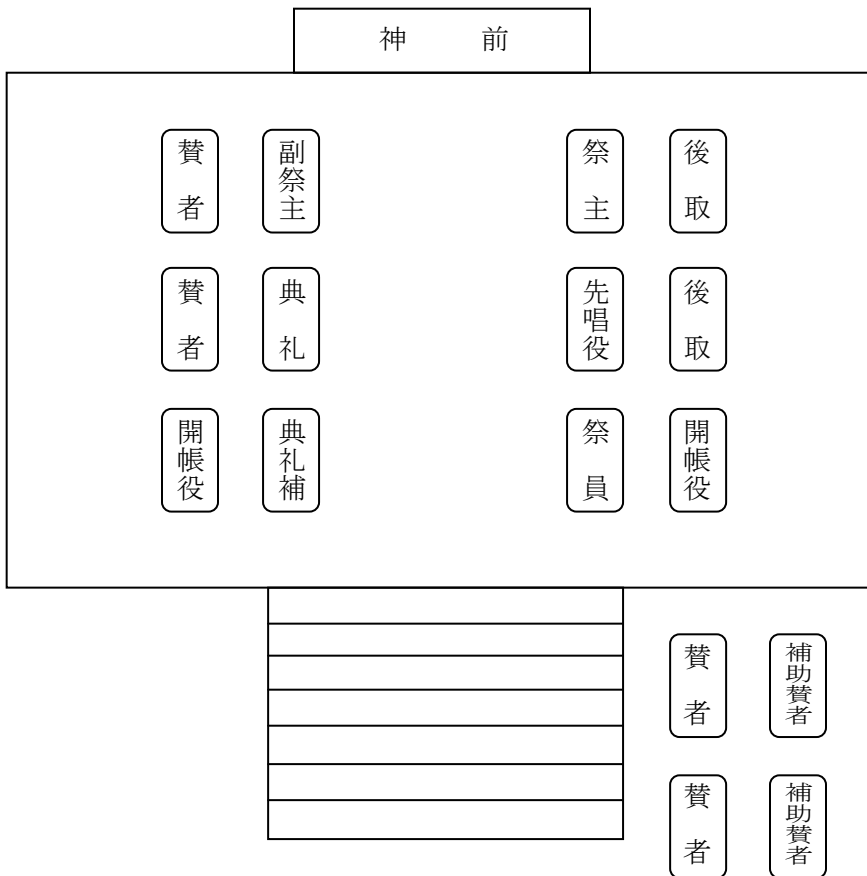
（注）

・捲簾役の説明の中に「内殿」「外殿」という表現があるが、昭和四十七年十二月十日の儀式服制審議会の上申により、それぞれ「神をまつところ」「取次を行うところ」という表現に変わっているが、慣用的に用いられている。

・祭員の配役の決定は、基本的には補命番号順を参考にして行っている。（小さい番号の人は、先唱役、神饌長、奉幣役など。中ほどの番号の人は、捲簾役、幣使、典礼など。大きい番号の人は、手長、替者などである。）しかし、「お役に上下のへだてなし」の言葉どおり、本来祭主が奉仕するべきところを、全員で分担奉仕させて頂いているという自覚が必要である。また、身長、体力などを考慮して諸役を決定することもある。

・典礼が配役を定め、諸役、着座位置、参向順を発表する。また、式次第の確認、細かい作法の打ち合せを述べる。

・本部大祭の職員座席の見取図は次の通りである。  
 作法上のことから、開帳役が左右対称の位置におかれ、賛者が上座になっている。また、後取は祭主の周辺に、典礼は全体を見渡せる位置に配するなどの工夫がある。



M E M O



# 第五部 祭式の次第

## 一 神前における基本の式次第

先着	座	奏楽
次 拝	礼	○一同拝礼
次 神前拝詞奉唱		○一同神前拝詞奉唱
次 取次唱詞奉唱		●玉串案、膝衝を設ける ○(参拝者代表先唱) 一同取次唱詞奉唱
次 祭主祭詞奏上		○一同敬礼
次 祭主玉串奉奠		○直る
次 天地書附奉体		○一同共に拝礼
		○天地書附奉体
		●膝衝を撤する
次 神徳賛詞奉唱		○一同神徳賛詞奉唱
次 拝	礼	○一同拝礼
次 退	下	奏楽

(注)

○印は号令

●印は賛者の動作

・祭典の基本次第は、信奉者が教会に参拝し、お取次を頂く姿を儀式化したものである。順をおって説明する。

・教会に参拝すると先ず、広前に座り、参拝した挨拶の御祈念をする。それが「神前拝詞奉唱」となる。

・次に、信奉者はお結界に進み、取次を頂く。それが「取次唱詞奉唱」である。したがって、参拝者の代表が先唱する。

・次に、取次者は神に向かい、参拝者のお礼やお願いを取り次ぐ。それが「祭主祭詞奏上」と「玉串奉奠」である。

・次に、取次者は信奉者に対し、神の願いを取り次ぐ。つまりご理解をする。それが「天地書附奉体」である。「天地書附」は、神様の人間に対する願いと、人間の生き方を教えたものであり、信奉者は、ご理解の内容を復唱し、確認するのである。

・最後に、信奉者は、お結界を下がり、挨拶のご祈念をする。それが「神徳賛詞奉唱」である。

二 本部広前月例祭次第

(神前)

先着 席

奏楽

次 拝 礼

○一同拝礼

次 神前拝詞奉唱

○一同神前拝詞奉唱

●玉串案、椅子を設ける

次 取次唱詞奉唱

○一同取次唱詞奉唱

次 祭主祭詞奏上

○一同敬礼

奏楽

次 祭主玉串奉奠

○一同共に拝礼

奏楽

○直る

次 天地書附奉体

○天地書附奉体

奏楽

●椅子を撤する

次 神徳賛詞奉唱

○一同神徳賛詞奉唱

奏楽

○一同拝礼

次 転 座

○一同拝礼

奏楽

(霊前)

先着 席

奏楽

次 拝 礼

○一同拝礼

次 祖先賛詞奉唱

○一同祖先賛詞奉唱

次 拝 礼

○一同拝礼

次 退 下

○一同拝礼

奏楽

(備考)

・各教会では、これを基本にして祭典を仕えている。

・月例祭の神饌は備付にしてよい。

・取次唱詞の先唱を、先唱役が行う場合もなる。

・「神前における基本の式次第」中「神徳賛詞」の奉唱は「金光大神賛仰詞」に代えてよい。(五八達示第八号)

・本部広前の毎月十日の月例祭においては、次第中「神徳賛詞」を「金光大神賛仰詞」に代えている。(四教一第三二三号)

・祭主玉串とは別に、参拝者代表の玉串奉奠を加えてもよい。

この場合、祭主玉串の時の典礼の号令は「祭員共に拝礼」で

代表の玉串の時「一同共に拝礼」となる。

・本部広前では、月例祭前夜に宣教が行われる。また、祭典

の後、教話が奉仕される。(宣教については後述)

・教話の前の神伝の奉読については、概ね次のとおりである。

生神金光大神の祭典

「立教神伝(安政六年十月二十一日)」

天地金光乃神の祭典

「御神伝(明治六年十月十日)」

### 三 天地金乃神大祭（生神金光大神大祭）次第

（本部広前の一例）

先着 席 中正楽奏楽

次 開 帳 合唱

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 神前拝詞奉唱 ○一同神前拝詞奉唱

次 取次唱詞奉唱 ○一同取次唱詞奉唱 中正楽奏楽

次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 祭主玉串奉奠 ○祭員共に拝礼 中正楽奏楽

次 天地書附奉体 ○天地書附奉体 中正楽奏楽

次 参拝者総代玉串奉奠 ○参拝者総代玉串を奉る オルガン演奏

次 教務総長挨拶 ○教務総長挨拶

次 神徳賛詞奉唱 ○一同神徳賛詞奉唱

（金光大神賛仰詞奉唱）

次 「神人の栄光」斉唱 ○神人の栄光斉唱一同起立

（「親神のよごしのままに」斉唱） オルガン伴奏

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 退 下 中正楽奏楽

（備考）

・本部広前の次第は、『祭式教本』から変更している。

・生神金光大神大祭では、神徳賛詞奉唱に代えて、金光大神賛仰詞奉唱を行ってもよい。

・教会における大祭には、「一、神前における基本の式次第」に、捲簾（開帳）、献饌、奉幣行事、参拝者代表玉串奉奠等その他諸行事を取り入れてよい。以下、二、三例を示す。

（例1）

先着 座

次 捲 簾

次 献 饌

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 神前拝詞奉唱 ○一同神前拝詞奉唱

次 取次唱詞奉唱 ○一同取次唱詞奉唱

次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 祭主玉串奉奠 ○祭員共に拝礼

次 天地書附奉体 ○天地書附奉体

次 参拝者代表玉串奉奠 ○参拝者代表玉串を奉る

次 「神人の栄光」斉唱 ○神人の栄光斉唱一同起立

次 神徳賛詞奉唱 ○一同神徳賛詞奉唱

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 退 下

(例2)

先 着 座

次 拝 礼

次 神前拝詞奉唱

次 捲簾（開帳）

次 献 饌

次 奉幣 行事

次 取次唱詞奉唱

次 祭主祭詞奏上

次 祭主玉串奉奠

次 天地書附奉体

次 参拝者代表玉串奉奠

次 神徳賛詞奉唱

次 拝 礼

次 退 下

○一同拝礼

○一同神前拝詞奉唱

●奉幣台、奉幣座を設ける

●奉幣座を撤し、

玉串案、祭詞座を設ける

○一同取次唱詞奉唱

○一同敬礼

○直る

○祭員共に拝礼

○天地書附奉体

●祭詞座を撤し、  
参拝者用玉串案を設ける

○参拝者代表玉串を奉る

○一同共に拝礼

●玉串案を神前に進める

○一同神徳賛詞奉唱

○一同拝礼

(説明)

・例1は、言わば神前を整えてから祭典という考えに基づいた次第である。この場合、祭員の呼吸を揃える為、着座後直ぐ、一揖することもある。（以前は対揖たいゆうといっていた）

・例2は、言わば捲簾、献饌等も祭典の中身であるという考えに基づいた次第である。

・捲簾（開帳）の時、一同敬礼することもある。

・神饌が備付の場合もある。この場合でも御献備の箱のみ手次ぐこともある。

・天地書附奉体の後、副祭主玉串奉奠、講師玉串奉奠を入れてもよい。（膝衝は撤する。）この時、祭員は列拝することもある。

・拝礼、退下の前に教話を奉仕することもある。

・本部広前では、祭典の前に教話がある。

・献饌が行われる次第では、捲簾（開帳）を拝礼の前に行うと、神前に何もないうまままで拝詞を奉唱する事になるので、献饌の前に捲簾（開帳）を行う方がよい。

・神饌案は、備付の場合や、賛者、手長て手次ぐ場合もある。

・来賓等の玉串は、参拝者代表玉串奉奠の前にとよい。

・退下の前か退下の後に、吉備舞を奉納してもよい。

#### 四 霊前における基本の式次第

##### 奏上祭（神前）

先着 座

奏楽

次 拝 礼

○一同拝礼

次 祖先賛詞奉唱

○一同祖先賛詞奉唱

次 神徳賛詞奉唱

○一同神徳賛詞奉唱

次 拝 礼

○一同拝礼

●玉串案、膝衝を設ける

奏楽

次 退 下

奏楽

次 祭主祭詞奏上

○一同敬礼

奏楽

（備考）

次 祭主祭詞奏上

○一同敬礼

・霊祭では、神前にて奏上祭を仕えてから霊前に向かう。

○直る

・霊前における献饌を加えることもある。

次 祭主玉串奉奠

○一同共に拝礼

奏楽

・月例祭、大祭と異なり、霊祭、諸祭には取次唱詞、天地書

●膝衝を撤する

附奉体はない。

次 拝 礼

○一同拝礼

奏楽

・祖先賛詞は、参拝者玉串奉奠時より奉唱してもよい。

次 転 座

○一同拝礼

奏楽

・式年祭（例年祭）は、春（秋）季霊祭に準ずる。

##### 霊 祭（霊前）

先着 座

奏楽

次 拝 礼

○一同拝礼

・宅祭の場合は、転座できないこともある。この場合、転座

次 霊前拝詞奉唱

○一同霊前拝詞奉唱

の代えて奏上祭、霊祭の意味の説明を加えるとよい。

●玉串案、膝衝を設ける

奏楽

次 祭主祭詞奏上

○一同敬礼

の代えて奏上祭、霊祭の意味の説明を加えるとよい。

次 祭主祭詞奏上

○一同敬礼

の代えて奏上祭、霊祭の意味の説明を加えるとよい。

次 祭主玉串奉奠

○祭員共に拝礼

奏楽

（下段に続く）

## 五 本部広前靈祭次第

(春季靈祭及び秋季靈祭) (会堂において)

奏上祭 (神前)

先 着 席

次 拝 礼

次 神徳賛詞奉唱

次 祭主祭詞奏上

次 祭主玉串奉奠

次 拝 礼

次 転 座

靈 祭 (靈前)

先 着 席

次 拝 礼

次 靈前拝詞奉唱

次 祭主祭詞奏上

次 祭主玉串奉奠

次 参拝者玉串奉奠

次 祖先賛詞奉唱

次 拝 礼

次 退 下

(備考)

・ 参拝者玉串奉奠は、金光家総代、新靈神遺族総代、参拝者

総代の順で行われる

・ 祭典後、教務総長挨拶が行われる。

(布教功勞者報徳祭) (祭場において)

先 着 席

次 開 帳

次 拝 礼

次 神前拝詞奉唱

次 祭主祭詞奏上

次 祭主玉串奉奠

次 遺族総代玉串奉奠

次 参拝者総代玉串奉奠

次 輔 教 任 命

次 教務総長挨拶

次 「真心の道を迷わず失わず」 斉唱

次 拝 礼

次 退 下

(備考)

・ 布教功勞者報徳祭は祭場で行われる。

・ 布教功勞者報徳祭の次第の内、神前拝詞奉唱までを奏上祭とし、以後靈祭と考える。

・ 祭場の天地書附の手前に靈神簿を奉安し、几帳を白無地に替え、神前、靈前を整える。

・ 遺族総代玉串奉奠は、金光家総代、布教功勞者遺族総代の順で行われる。

## 六 地鎮祭次第

先着 席

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 神徳賛詞奉唱 ○一同神徳賛詞奉唱

次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 祭主玉串奉奠 (祭員は共に拝礼)

次 願い主等関係者代表玉串奉奠

○施主玉串を奉る

(家族は共に拝礼)

○施工者玉串を奉る

(施工関係者は共に拝礼)

次 治めの行事 ○治めの行事を行います

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 退 下

(備考)

・ 建築関係等の諸祭(例えば起工式、上棟式、落成式、渡橋式、進水式)は、天地書附を奉掲して神前とし、儀式の執行は、地鎮祭次第に準じて行う。

・ 神饌は備付の場合が多い。

・ 規模にもよるが、祭員は一名ないし二名で御用に当ることが多い。その場合、祭主以外の役は他の一人で奉仕することになる。つまり、典礼、先唱役、賛者、後取等を一人で奉仕

することになる。また、この場合、祭主玉串奉奠の時は、号令をかけず、共に拝礼する。

・ 祭詞は祭主が懐中することもある。

・ 参拝者には始めての人も多い。よって、儀式の意味や、参拝者への指示を適当に入れるとよい。

・ 願い主(施主、施工者)と、式次第、しつらえ、玉串奉奠の代表、順序等、予め打ち合せをしておく必要がある。

・ 本教の祭典は、儀式のみにとどまらない。祭主の教話を是非入りたい。この場合、祭員退下後よりは、前の方がよい。

・ 諸祭中、「治めの行事」は、祭詞の外に、事の成就の祈願を、行事で表現するものである。祭事の目的により、神前に供えた神酒、塩、土、砂等をまく。その作法は、後述する大麻行事に準ずる。

・ 「治めの行事」の前後に「鍬入れ式」を入れてよい。その他、特別の儀式や行事がある場合は、関係者玉串奉奠の次に行う。

(または、祭典後か、祝賀式のある場合はその中で)

・ 諸祭は、第四部三章の「諸祭」で述べたように、地方の慣習と微妙にかかわり、また、建築関係の諸祭では特に施工者等の関係もある。そこで、「大麻行事おおぬき」によるいわゆる「四方祓い」も必要になると思われる。次にその式次第の一例を示す。

なお、大麻の作り方については、金光教教報第一七四四号(昭和五十三年一月号)付録『調饌の手びき』参照のこと

(例)

先着席

次 拝礼

次 神徳賛詞奉唱

次 大麻行事 (いわゆる四方祓い)

次 祭主祭詞奏上

次 祭主玉串奉奠

次 関係者代表玉串奉奠

● 施主

(家族は共に拝礼)

● 施工者

(施工関係者は共に拝礼)

次 鋤入れ式

● 施主

● 施工者

次 拝礼

次 祭主教話

次 退下

(備考)

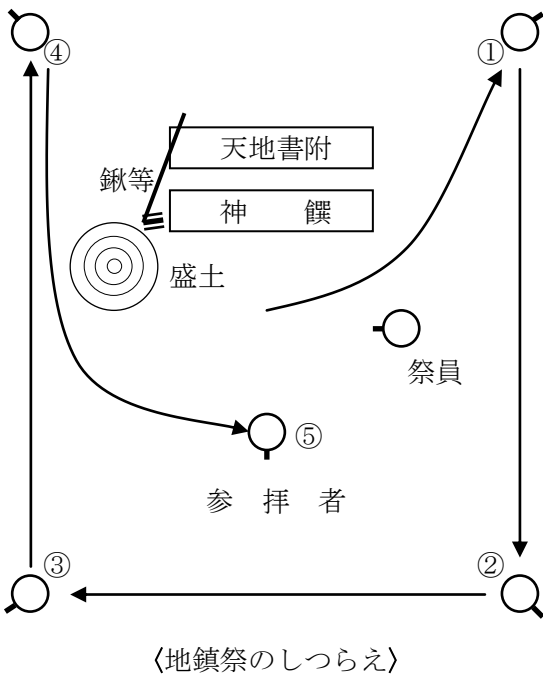
・ 地鎮祭の大麻行事は、下図の順序で振る。その後、祭員、参拝者の順に振る。

・ 右の式次第では、前半に「大麻行事」を行う例を示している。それは、改まりの心を形に表す行事と考えるとところからである。基本式次第の「治めの行事」として大麻行事を行うことも考えられる。

・ 「鋤入れ式」には、儀式に相応しい鋤、鋤(スコップ)を用意し、柄の中程を白紙で巻き、麻か水引で縛っておく。  
作法は、砂盛の下部を鋤等ですくい、上部にかける。これを掛け声を発し三度程行う。

(参考)

・ 神道では「鋤入れ式」のことを「穿初」という。砂盛にカヤを立て鋤で切る行事の「苜初」等がある。作法は多少が異なる。地方の慣習や、施工者の希望を考慮する必要がある。  
・ 降神行事、昇神行事は本教では行わない。従ってしつらえに神籬は必要ない。大麻行事も修祓として行うものではない。また、施工者が四方の笹や、注連縄を用意している場合は、無理に取り外さず、装飾と理解して祭典を奉仕すれなよい。





## 七 結婚式次第

(例1)

- 先親族着座
- 次新夫婦着座
- 次祭員着座
- 次拝礼
- 次神徳賛詞奉唱
- 次祭主祭詞奏上
- 次祭主玉串奉奠(祭員列拝)
- 次誓盃(三三九度の盃)
- 次教書授与
- 次誓ねがいのことば詞
- 次新夫婦玉串奉奠
- 次媒酌人玉串奉奠(一同共に拝礼)
- 次拝礼
- 次退下

奏樂

(備考)

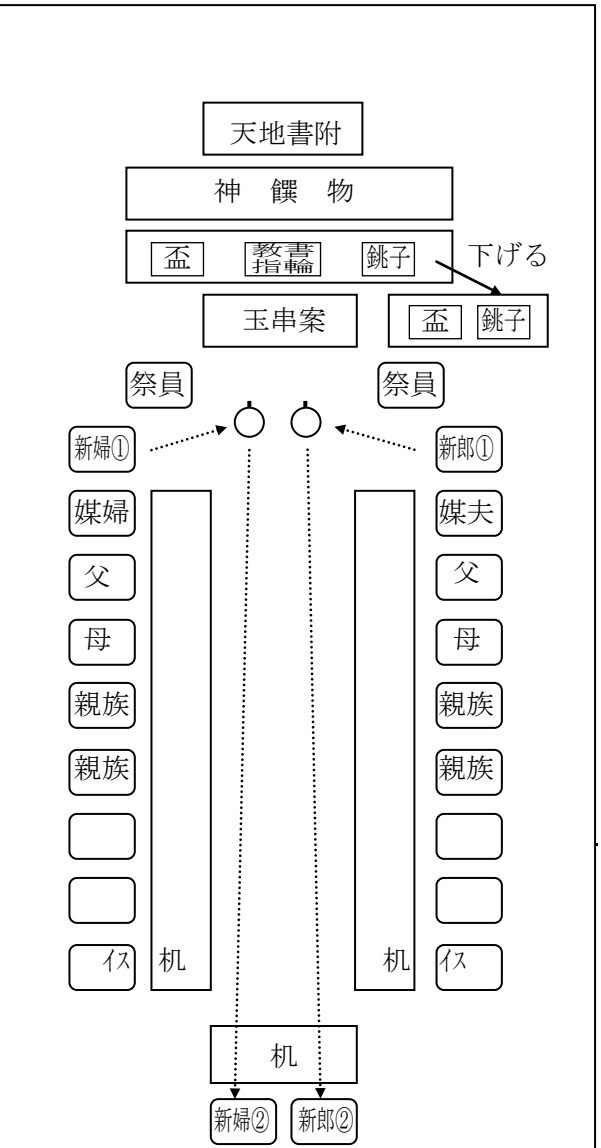
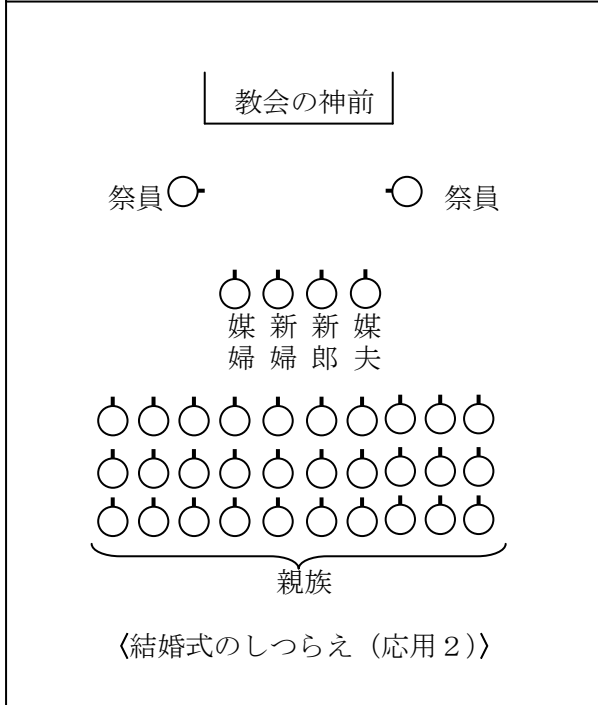
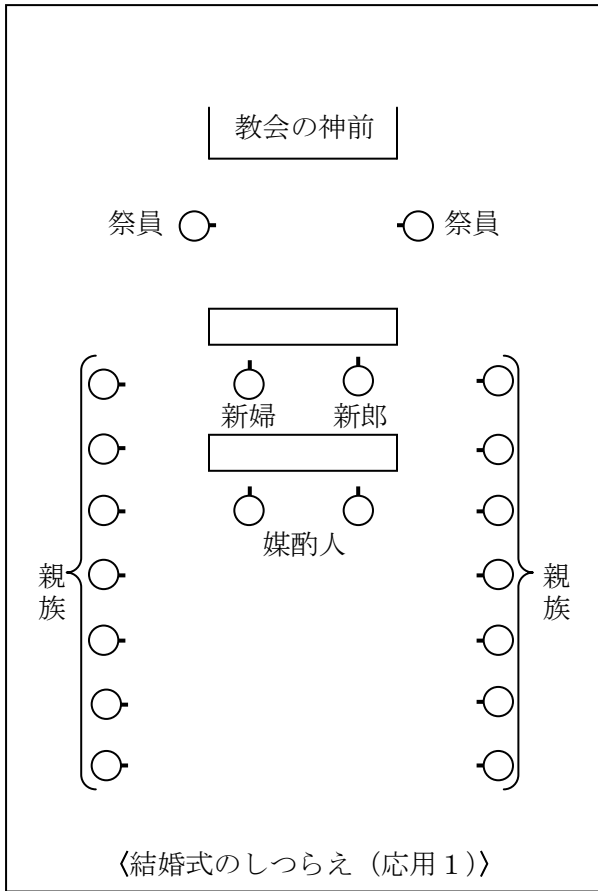
- ・式後、「親子親族固めの盃」を行ってもよい。
- ・教書は、三方にのせ、神前の案に置いておく。
- ・新郎の受けた教書は、仮に媒夫があずかっておくともよい。
- ・式場のしつらえの図を次頁に示す。

(例2)

- 先親族着席(新郎家は左側、新婦家は右側)
- 次新夫婦着席(媒酌人介添)
- 次祭員着席
- 次拝礼
- 次神徳賛詞奉唱
- 次祭主祭詞奏上
- 次祭主玉串奉奠(祭員列拝)
- 次誓盃(三三九度の盃)
- 次誓詞(または祈願詞)
- 次新夫婦玉串奉奠
- 次媒酌人玉串奉奠(一同共に拝礼)
- 次指輪交換(または指輪贈呈)
- 次教書授与
- 次祭主教話
- 次親族固めの盃
- 次拝礼
- 次退下

(備考)

- ・時間を考慮して、式次第を工夫する。たとえば、媒酌人玉串奉奠を省略し、新夫婦玉串奉奠で一同共に拝礼とすることもある。また、三三九度の盃を、各盃で新郎新婦が一度づつ盃を空け、合計六度にすることも考えられる。



新郎①  
新婦①は最初の着席位置。

新郎②  
新婦②は「親族固めの盃」の時の着席位置。

〈結婚式のしつらえ (基本)〉

・誓盃の作法

先 銚子、盃を神前より下げ所定の位置に移し、本酌は雄ほんじやく

銚子じやくを、次酌は盃を持つ。

次 次酌、盃を新郎の前に差し出す。

本酌、雄銚子で酌をし、新郎はこれを受ける。

次酌、その盃を新婦にすすめる。

本酌、酌をし、新婦これを受ける。

次酌、その盃を新郎に返す。

本酌、酌をし、新郎これを受ける。

次酌、所定の位置にて第一の盃を納める。

本酌、所定の位置にて銚子を雌銚子に持ち替える。

次 次酌、第二の盃を新婦の前に差し出す。

本酌、酌をし、新婦これを受ける。

次酌、その盃を新郎にすすめる。

本酌、酌をし、新郎これを受ける。

次酌、その盃を新婦に返す。

本酌、酌をし、新婦これを受ける。

次酌、所定の位置にて第二の盃を納める。

本酌、所定の位置にて銚子を雄銚子に持ち替える。

次 次酌、第三の盃を新郎の前に差し出す。

以下、第一の盃と同じ作法。

次酌、本酌、第三の盃および雄銚子を所定の位置に戻す。

・右の括弧内の動作を省略することもある。

・本酌（銚子）、次酌（盃）は、祭主、祭員で行うが、稚児や少女がつとめることもある。

・誓詞、又は祈願詞は、神様に申し上げるもので、祭主が代わって読むこともあるし、新郎が読み、新婦が名前だけ読むこともある。

・誓詞、新夫婦玉串奉奠の作法

先 新夫婦、神前に進み一拝

次 誓詞奏上（誓詞は懷中より出し、奏上後また懷中する）

次 替者より玉串を受け、二人揃って神前に玉串を奉る。

・媒酌人の玉串奉奠は省略することが多い。

・新郎より新婦へ指輪をおくる場合は、新郎新婦玉串奉奠に引き続き、祭員が神前より指輪を下げて新郎に渡し、その場で新郎が新婦に指輪をはめた後、揃って神前に一拝する。

・教書は、結婚生活の第一歩を踏み出すに当り、新夫婦のこれからの生き方を示すものとして、本教の信心をもとにして作文し、奉書に浄書して神前に供えおき、教書授与の時に、これを祭主が読んで新夫婦に授けるもので、基本次第では誓盃の次に教書授与となっている。しかし、最近では、『金光教教典』『夫婦道』（高橋正雄）など、本教の書籍を授け、新夫婦がこれから将来に向かっておかげを受けるよう、その生き方について教話するようになっているので、新夫婦玉串奉奠の後に教書授与をした方がよい。

・教書授与の作法（座礼の場合）

先 祭主、神前より教書を三方のまま取り、下座に向かつて着座。

次 新夫婦、その前に着座（媒酌人介添）。

次 祭主、小揖し、教書を取り朗読、三方に教書を置き小揖（その間、新夫婦敬礼）。

次 新郎、少し進み、一礼して教書を受け、新婦と共に一礼して本座にかえる。

次 祭主、復座

・既刊の書籍を授与する時は、右の括弧内が新夫婦に対する教話となる。

・拝礼、退下の前に、親族固めの盃（親子親族の誓盃）をすることもできる。

・親族固めの盃は、地方によっては、紹介をかねて一人ずつ行われる事もあるが、今では、全員に注ぎ終わってから、本酌の合図で、乾杯の形式をとることが多い。この場合、親族紹介は式後、別の場を設ける。

・式は、教会で行われる場合と、後の披露宴の関係等で、結婚式場の神前を利用することもある。式場の神前を利用する場合は、御神鏡ごしんきょうの前に天地書附を奉掲して、結婚式を奉仕することになる。

・式次第は、いろいろと応用することができるとは、この場合、親族の人数、新郎新婦の衣装、式場の時間制限まで考慮する。

《参考》

・雄銚子、雌銚子について

雄銚子は提子ひさげ、雌銚子は長柄ながえを用いる場合と、雄銚子、雌銚子とも提子を用いる場合がある。

ともに提子を用いる場合は、注ぎ口の尖っている方を雄銚子とし、雄蝶飾りをつけ、注ぎ口の比較的丸い方を雌銚子として、雌蝶飾りをつけて区別する。

提子とは、錫で出来た土瓶のような形のもの。

長柄とは、柄杓ひしゃくに注ぎ口のついたもの。

雄蝶飾り、雌蝶飾りとは、色紙と水引きでできた銚子の飾り。

・盃について

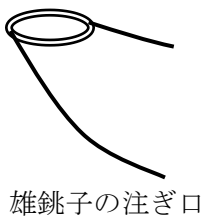
教紋の入った、三段重ねの塗りの木盃を用いることが多い。

土器の三段重ねを用いてもよい。

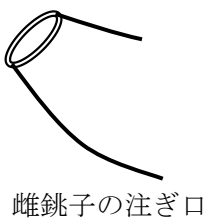
この時、教紋が新郎新婦の方に向くよう用意しておく。

・島台しまだい、長熨斗ながのしは、一般の婚礼に用いられるものである。これは縁起を祝うもので、儀礼的な飾りである。本教の儀式

にとっては意味がないものである。



雄銚子の注ぎ口



雌銚子の注ぎ口

# 八 葬儀式

## 1 終祭

終祭は、人生最後の儀式であり、祭主が死者に代わって、神に死者の生涯のお礼を申し上げ、以後の立ち行きを願うもので、いわば、死者を神に取次ぐ儀式である。

本教では「生きても死にて天と地とは我が住みか」であり、霊となっても、神のおかげを受けなければならない。生も死も、すべて神のお働きの中でのことであり、霊は神の許へ帰一するのであるから、神前に柩を安置し、終祭を執行する。

先着 座

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 天地賛仰詞奉唱 ○一同天地賛仰詞奉唱

●膝衝を設ける(①の位置)

次 祭主告詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 霊 璽 奉 遷 ○一同敬礼

●消灯

●祭主、柩前のローソク一対に

点火

●祭主、霊神唱詞奉唱(二回)

●祭主、柩前の霊璽れいじを神前に進め、神

前のローソク一対に点火、この間先唱役は警蹕けいひつをかける

●祭主、柩前に着座一拝

(①へ戻り、柩前のローソク消火)

○直る

●点灯

●祭主、復座

●膝衝を撤し(①の位置)、玉串

案、膝衝を新たに設ける(②の位置)

次 祭主終祭詞奏上

○一同敬礼

次 祭主玉串奉奠

○祭員共に拝礼

●膝衝を撤し(②の位置)、玉串案を設ける

次 喪主喪婦玉串奉奠

○喪主喪婦、玉串を奉る

次 遺族親族玉串奉奠

○遺族親族、玉串を奉る

次 新霊神拝詞奉唱

○一同新霊神拝詞奉唱

次 会葬者玉串奉奠

○会葬者、順次玉串を奉る

次 退 下

○一同拝礼

(備考)

・拍手は、火葬の儀まで忍手とする。

・拝礼の時、典礼は、「二拝忍手一拝」と号令をかけてもよい。または事前に、拍手は忍手である旨を説明しておくもよい。

・告詞は、柩（死者）に向かい、奏上するものである。

・新霊神拝詞は、遺族親族玉串奉奠時より奉唱してもよい。

・柩前に熟饌（調理した物）を供えてもよい。

・式後に教話を行うとよい。

・終祭のしつらえは、下図のとおりである。

（都合によっては、告別式のしつらえと同じでもよい。その時は、霊璽は最初、柩付近に置き、天地書附前まで奉遷する）

・凶の霊璽①は、奉遷前の位置である。

・凶の霊璽②は、奉遷後の位置で、天地書附の前に置くことを原則とする。しかし、都合上、神饌物の手前や、神饌物を供えた八足の中央に置いてもよい。

・霊璽奉遷

祭主は、霊璽を左の手のひらにのせ、右手の祭服の袖で霊璽を覆うようにして捧持し、祈念を込めながら神前に向かう。

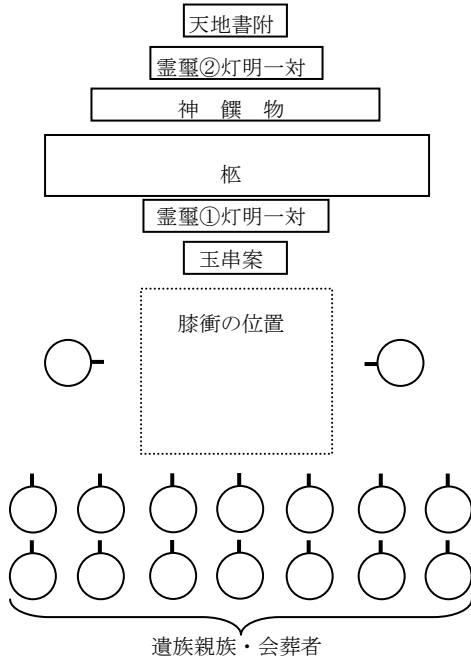
・霊神唱詞を次に示す。

あはれ〇〇〇〇の霊神（たち）。

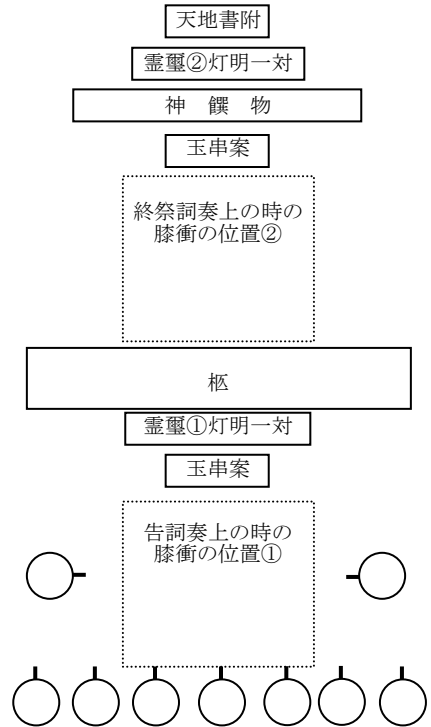
今よりは生神金光大神御取次のまにまに。

天地金乃神のみ徳こうむり。

いよよ霊の道立てみ受けたまえ。



〈終祭のしつらえ（応用）〉

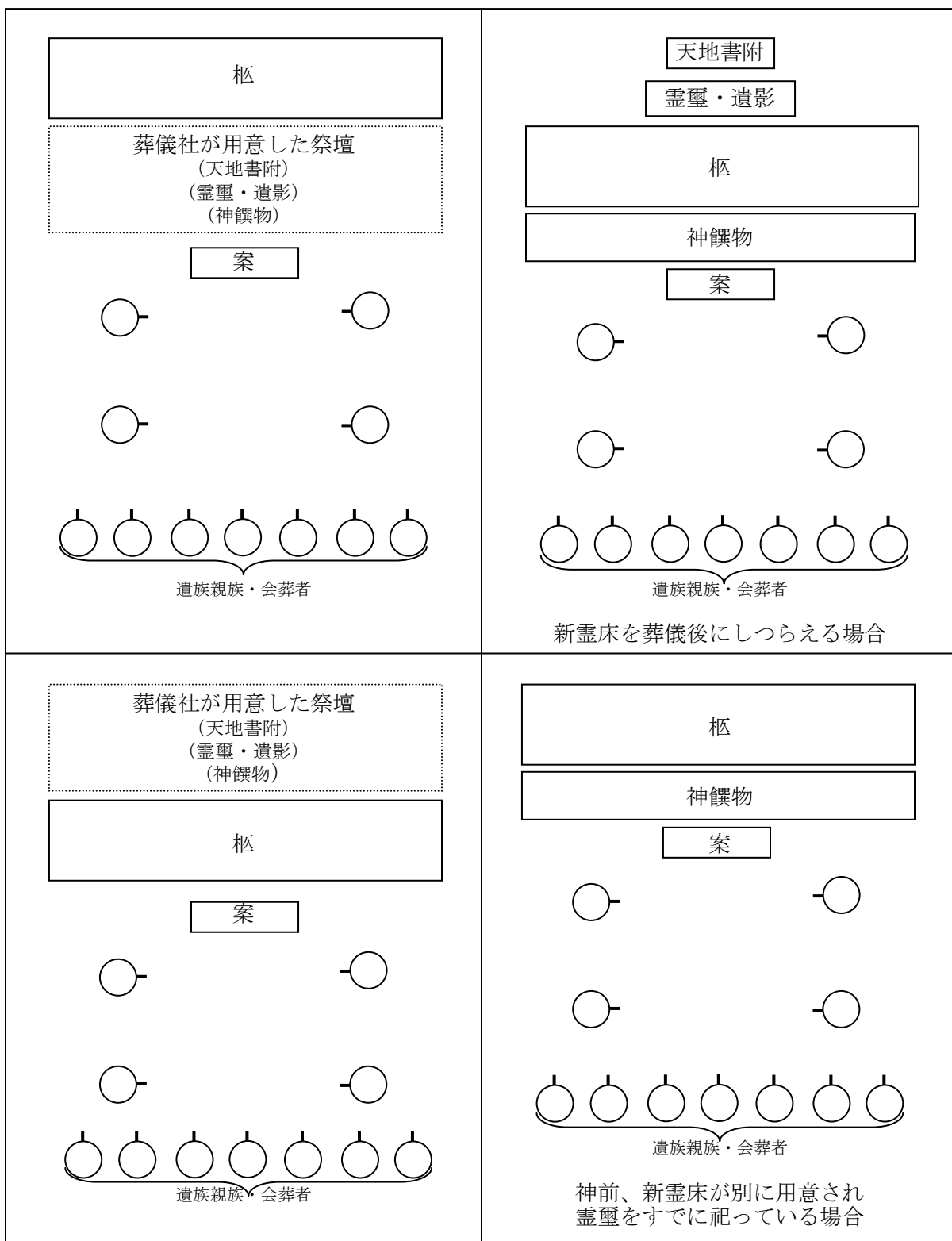


〈終祭のしつらえ（基本）〉

- 先 着 座
- 次 拝 礼 ○一同拝礼
- 次 天地賛仰詞奉唱 ○一同天地賛仰詞奉唱
- 玉串案、膝衝を設ける
- 次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼
- 直る
- 次 祭主玉串奉奠 ○祭員共に拝礼
- 膝衝を撤し、玉串案を設ける
- 次 喪主喪婦玉串奉奠 ○喪主喪婦、玉串を奉る
- 次 弔 弔 辞 ○弔辞
- 次 遺族親族玉串奉奠 ○遺族親族、玉串を奉る
- 次 会葬者玉串奉奠 ○会葬者、順次玉串を奉る
- (この間に弔電の紹介)
- (次 葬儀委員長玉串奉奠 ○葬儀委員長、玉串を奉る)
- 玉串案を進める
- 次 新霊神拝詞奉唱 ○一同新霊神拝詞奉唱
- 次 拝 礼 ○一同拝礼
- 次 退 下
- 次 遺族代表(葬儀委員長) 挨拶

(備考)

- ・拍手は、火葬の儀まで忍手とする。
- ・新霊神拝詞は、遺族親族の玉串奉奠時より唱えてもよい。
- ・玉串案は、全部同じ案でもよい。
- ・告別式のしつらは次のとおりである。
- 出棺の関係上、一番手前に柩を置くこともある。
- ・弔辞の際に、玉串奉奠をするときは、玉串を先に供える。
- 弔辞は玉串案の上に供える。
- ・弔電の披露は、遺族親族玉串奉奠の間か、会葬者玉串奉奠の間に行うとよい。
- ・会葬者が多い場合は、かけ玉串と言い、大きな柩を用意し紙垂をかけてもらうようにする。
- ・引き続き、遺族親族代表挨拶、最後のおわかれ、出棺等がある。
- ・出棺の時間を考慮して、告別式をすすめること。出棺の二十分前頃には終わるようにし、車に乗る時間等に、余裕を持たせておく。



〈告別式のしつらえ（各種）〉



3 終祭に引続き告別式を行う場合の次第(例)

(終祭)

先着 座

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 天地賛仰詞奉唱 ○一同天地賛仰詞奉唱

次 祭主告詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 霊 璽 奉 遷 ○一同敬礼

●消灯(屏風を設ける)

●祭主、柩前のローソク一対に

点火

●祭主、霊神唱詞奉唱(二回)

●祭主、柩前の霊璽を神前に進

め、神前のローソクに点火

この間先唱役は警蹕をかける

この間賛者は柩前のローソク

を消火し、案を撤する

○直る

●点灯

次 祭主終祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 拝 礼 ○一同拝礼

(下段に続く)

(告別式)(ここより告別式になる旨説明を加える)

次 新霊神拝詞奉唱 ○一同新霊神拝詞奉唱

●玉串案を設ける

次 祭主告別式祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 祭主玉串奉奠 ○祭員共に拝礼

●玉串案を設ける

次 喪主喪婦玉串奉奠 ○喪主喪婦玉串を奉る

次 弔 辞 ○弔辞

次 遺族親族玉串奉奠 ○遺族親族以下順次玉串を奉る

(次 葬儀委員長玉串奉奠 ○葬儀委員長玉串を奉る)

次 弔 電 ○弔電

●玉串案を進める

次 遺族代表挨拶 ○遺族代表挨拶

次 拝 礼 ○拝礼

次 退 下

(備考)

・弔電は遺族親族玉串奉奠中に披露してもよい

・しつらえは告別式に準じる

・終祭と告別式の区切りをつける工夫が必要である。典礼が

終祭と告別式の説明を途中で入れるなどするとよい。

4 火葬の儀（火葬場祭）

先着 席（座）

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 祭主火葬の儀唱詞奉唱 ○一同敬礼

（又は祭主祭詞奏上）

○直る

次 祭主玉串奉奠 ○一同共に拝礼

（または、祭員共に拝礼）

次 遺族以下玉串奉奠

○遺族親族会葬者  
順次玉串を奉る

次 新霊神拝詞奉唱 ○一同新霊神拝詞奉唱

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 退 下

（備考）

・土葬の場合は「埋葬の儀」として行う。

・拍手は、この儀式まで忍手とする。

・火葬場では、柩を所定の位置にすえ、祭壇に遺影掲げ、霊  
壺を安置する。また、告別式会場から持参したものをお供え  
する。

・会葬者（遺族以下）玉串奉奠を行ってもよい。（祭主玉串奉  
奠の後）

・「火葬の儀唱詞」

あはれ「何某」の大人（敬称）はや。

なごりは永久に尽きねども。

今し神みはかりにゆだねれば。

み心やすらに神の御許に立ち帰りませ。

・火葬の儀唱詞奉唱を、火葬の儀祭詞奏上に替えて行っても  
よい。

・神饌物、玉串等は、火葬の儀用のを整えるのが正式である  
が、告別式のお供えを三方に一、二台分取りわけて持つて行  
き、火葬場の三方を借りて相盛りにする場合もある。

・式後、玉串、お供え物は、葬場の係員の指示に従い、亡骸  
とともに埋葬する。

・祭員は、全員行かずに、残った人が葬後の儀の準備をする  
こともある。

・『祭式教本』では祭服を脱ぎ、白衣・袴で行ってもよいこと  
になっているが、特別な事情（例えば、山中深くの埋葬場へ  
徒歩で行く場合）がない限り、祭服を着けて式を奉仕する。

・点火後帰り、葬後の儀の準備をして待つ。

・火葬の儀のことを、火葬場祭ともいう。

5 葬後の儀（葬後霊祭）

先着 座

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 新霊神拝詞奉唱 ○一同新霊神拝詞奉唱

次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 祭主玉串奉奠（○祭員共に拝礼）

次 遺族親族玉串奉奠 ○遺族親族順次玉串を奉る

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 退 下

（備考）

・霊璽と遺骨を安置する所を新霊床しんれいしょうとし、合わせて遺影を掲げてよい。新霊床は、先にしつらえておくがよいが、終祭後設置してもよい。

・新霊床の祭具類は、教会から貸し出すのではなく、遺族で用意してもらうとよい。（葬儀社、神器仏具店、ホームセンター等で購入することができる）

・新霊神拝詞の後に、祭主祭詞奏上、祭主玉串奉奠、遺族親族玉串奉奠を加えてもよい。（代表だけでもよい）

・遺骨が帰宅したら、新霊床の適当な場所に安置してから葬後の儀を始めるが、時間の都合で、遺骨の帰宅前に葬後の儀を奉仕する場合もある。

・親族が集まっているので、葬後の儀に併せて十日祭を奉仕してもらいたいと願われる場合もある。

・十日祭を合わせ行う場合は、十日祭の式次第に従う。

・退下後、旬日祭のことなど説明し、以上で葬儀が終わったことを述べる。

・葬後の儀のことを、葬後霊祭ともいう。

（参考）

・遺族の日々の御祈念について

日々の御祈念に加え、神前での最後に天地賛仰詞、霊前で御祈念ののち、新霊床で新霊神拝詞を奉唱する。

せめて、新霊床では新霊神拝詞を奉唱し、新霊神に心を尽くすよう心掛ける。

・新霊床へのお供えについて

毎日、家族が頂いているものと同じものをお供えし、お粗末にならないように、早めにお下げして、家族で頂くとよい。

・新霊床の灯明の火の始末には十分に配慮する。

・以上の内容を葬後の儀終了後、家族に対し指導するとよい。

## 九 新霊神祭

新霊神祭は、新霊神への追悼と、霊の道立てを中心する祭りである。

### 1 旬日祭

(神前)

先着 座

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 天地賛仰詞奉唱 ○一同天地賛仰詞奉唱

●玉串案、膝衝を設ける

次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 祭主玉串奉奠 ○一同共に拝礼

●膝衝を撤する

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 転 座

(新霊床)

先着 座

次 拝 礼 ○一同拝礼

●玉串案、膝衝を設ける

次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼

○直る

次 祭主玉串奉奠 (○祭員共に拝礼)

(下段に続く)

次 遺族親族玉串奉奠 ○遺族親族順次玉串を奉る

●替者、玉串案を霊前に進める

次 新霊神拝詞奉唱 ○一同新霊神拝詞奉唱

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 退 下

(備考)

・旬日祭は、葬後の儀の後、五十日祭までの間、十日ごとに仕えるお祭りである。

・神前で、天地賛仰詞の後、祭主祭詞奏上、玉串奉奠を加えることもある。

・旬日祭の二十日祭、四十日祭をそれぞれ、十日祭、三十日祭に合わせて行ってもよい。

・埋葬又はすでに埋骨してある場合は、併せて墓前祭を奉仕する。

・旬日祭の数え方は、帰幽当日を含めて数える。これは、その日から霊神となられたと考えるとところからである。しかし、翌日から数えるところもあるので、その地方の慣習を考慮すること。

2 五十日祭並びに合祀祭

合祀祭は、五十日間祀った新霊神を、先祖の霊神に合わせ  
て祀る儀式である。なお、霊神簿に霊神名を記入する。

奏上祭（神前）

先着 座

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 天地賛仰詞奉唱 ○一同天地賛仰詞奉唱

次 祭主祭詞奏上 ●玉串案、膝衝を設ける  
○一同敬礼

次 祭主玉串奉奠 ○一同共に拝礼  
○直る

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 転 座 ○一同拝礼

次 転 座 ○一同拝礼

次 転 座 ○一同拝礼

次 転 座 ○一同拝礼

（下段に続く）

五十日祭（新霊床前）

先着 座

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 祭主祭詞奏上 ●玉串案、膝衝を設ける  
○一同敬礼

次 祭主玉串奉奠（○祭員共に拝礼）  
○直る

次 遺族親族玉串奉奠 ○遺族親族玉串を奉る

次 遺族親族玉串奉奠 ●玉串案を進める

次 新霊神拝詞奉唱 ○一同新霊神拝詞奉唱

次 拝 礼 ○一同拝礼

次 霊壘捧持、転座 ○一同敬礼

次 霊壘捧持、転座 ○一同敬礼

次 霊壘捧持、転座 ○一同敬礼

●祭主、霊壘を捧持し、典礼の  
先導により霊前に向かう。

祭員これに従う。

（次ページ上段に続く）

合祀祭(霊前)

先 霊 璽 奉 安  
次 着 座

● 祭主、霊璽を霊床に安置する  
● 霊璽奉安の間、祭員所定の位置に着座、敬礼

○ 直る

● 祭主、正面に着座、拝礼後、

復座

次 拝 礼 ○ 一同拝礼

次 霊前拝詞奉唱 ○ 一同霊前拝詞奉唱

● 玉串案、膝衝を設ける

次 祭主祭詞奏上 ○ 一同敬礼

○ 直る

次 祭主玉串奉奠(○祭員共に拝礼)

● 膝衝を撤し、玉串案を設ける

次 遺族親族玉串奉奠 ○ 遺族親族玉串を奉る

● 替者、玉串案を霊前に進める

次 祖先賛詞奉唱 ○ 一同祖先賛詞奉唱

○ 一同拝礼

次 退 下

(備考)

・ 五十日祭、合祀祭を併せ行う場合は、新霊床での次第を次の様に変更してもよい。

(新霊床前)

先 着 座

次 拝 礼

次 新霊神拝詞奉唱

次 霊璽捧持、転座

・ 新霊床で、霊璽捧持の前に撤饌を行うこともある。

・ 捧持ができるよう、中央部の三方のみ撤してもよい。

・ 捧持、奉安の作法を示す。

祭主新霊床前に着座、一拝、覆面し、終祭における「霊璽奉遷」に準じ霊璽を捧持し、霊前に転座する。(祭員はこれに従い、定位に着座する)

次に、祭主は霊璽を奉安し、霊前に着座、覆面を取り、一

拝、四拍手、一拝して、祭主の着座位置に戻る。

・ 遺族玉串は代表だけにして、以下共に拝礼でもよい。

・ 遺族玉串は代表だけにして、以下共に拝礼でもよい。

・ 遺族玉串は代表だけにして、以下共に拝礼でもよい。

3 墓前祭

(例1)

先着 席  
 次 拝 礼 ○一同拝礼  
 次 霊前拝詞奉唱 ○一同霊前拝詞奉唱  
 次 祭主祭詞奏上 ○一同敬礼  
 ○直る  
 次 祭主玉串奉奠 (○祭員共に拝礼)  
 次 参拝者玉串奉奠 ○参拝者順次玉串を奉る  
 次 拝 礼 ○一同拝礼  
 次 退 下

(例2)

先着 席  
 次 献 饌 (備付でもよい)  
 次 拝 礼  
 次 霊前拝詞奉唱  
 次 祭主祭詞奏上  
 次 祭主玉串奉奠  
 次 遺族親族玉串奉奠  
 次 参拝者玉串奉奠  
 次 拝 礼  
 次 退 下

(備考)

・墓地で納骨をしたのち、献饌しても良い。  
 ・参拝者の玉串は、代表者のみでも良いし、全員でも良い。  
 ・建碑式次第は、墓前祭の次第に準じる。碑の覆いは式の前  
 に取りのぞいておく。  
 ・最近では、納骨殿とか祖安殿など、建物形式のものが作られ  
 ているが、その落成式の次第も墓前祭の次第に準じる。  
 ・時代や種類により、骨壺のサイズが異なる。あらかじめ納  
 骨場所と骨壺のサイズを確認しておくよう遺族に依頼してお  
 くこと。

十 改式祭

先	着	座	(神前)
次	拝	礼	
次	神徳賛詞奉唱		
次	祭主祭詞奏上		
次	祭主玉串奉奠		
次	霊璽奉遷	礼	
次	拝	座	
先	霊璽奉安		(霊前)
次	着	座	
次	拝	礼	
次	霊前拝詞奉唱		
次	祭主祭詞奏上		
次	祭主玉串奉奠		
次	参拝者玉串奉奠		
次	祖先賛詞奉唱		
次	拝	礼	
次	退	下	

(備考)

・ 霊璽は、最初神前手前に安置し、神に対して改式の報告をし、霊神として祀ることを述べる(祭詞)。霊璽奉遷において、霊神唱詞を唱えた後、霊璽を一度神前深く進める。  
 拝礼の後、霊璽捧持、転座し、霊前に霊璽を奉安する。  
 ・ 祭典にあたり、改式の意味について述べておくこと。  
 ・ 親族等関係者の了解を得て、仏式名(戒名)等を霊神名にかえる。

・ 生前の氏名に霊の敬称をつける時は、次の中から適宜選択し、霊璽や祭詞の中では、例えば、「○○○○大人之霊神」と称え、墓標等には、「○○○○大人之奥城」と記す。

「男の場合」	「女の場合」	
大人(うし)	姫(ひめ)	
老翁(おきな)	老嫗(おうな)	老人
翁(おきな)	嫗(おうな)	老人
彦(ひこ)	大刀自(おおとじ)	壮年
大郎子(おおいらつこ)	刀自(とじ)	15歳
郎子(いらつこ)	大郎女(おおいらつめ)	14歳以下
童男(わらわお)	郎女(いらつめ)	幼児
若子(わくご)	童女(わらわめ)	新生児
嬰(みどりご)	若子(わくご)	
	嬰(みどりご)	



## 十一 宣教

○ 本部広前月例祭前夜の教話

(次第)

先 御祈念

次 神伝捧読及び講師紹介

次 教話

次 御祈念

(読師の作法)

先 ①にて結界に向いて座り一拝、膝行して

② (御祈念座の手前) の位置に着座

次 拝礼、神前拝詞・取次唱詞・天地書附奉体・

神徳賛詞・金光大神賛仰詞 (奉唱)、拝礼、起座

次 ③ (霊前の御祈念座の手前) にて着座、

拝礼、霊前拝詞 (奉唱)、拝礼、起座

次 ④へ登壇、一揖

●補助賛者、神伝を三方にのせ、講台の上に置く

次 一拝、置笏・置扇 (講台の上に)

次 神伝を取り一揖

(左手で神伝の左下端を、右手で右下端を持つ)

次 神伝を開く (左手はそのままの位置を持ち、右手

で表紙を開いて、目通りに捧持する)

次 捧読 (「立教神伝」又は「御神伝」と唱え、

年月日は黙読し、本文を捧読する)

次 神伝を閉じ、一揖

次 神伝を三方の上に置く

次 一拝、置笏・置扇、四拍手、一拝

●補助賛者、神伝を撤する

次 一揖、開教の由 (開教の意味合い、講師紹介、

聴講の心得等) を述べ、一揖、降壇

次 ②の位置に戻り、着座、一拝の後、

①の位置まで膝退する

次 結界に向いて座り、一拝、回転起座し、

控え室へ戻る

(講師の作法)

先 ①にて結界に向いて座り一拝、膝行して

② (御祈念座の手前) の位置で着座

次 拝礼、そのまま霊前へ向き、拝礼、起座

次 ④へ登壇、一揖、教話

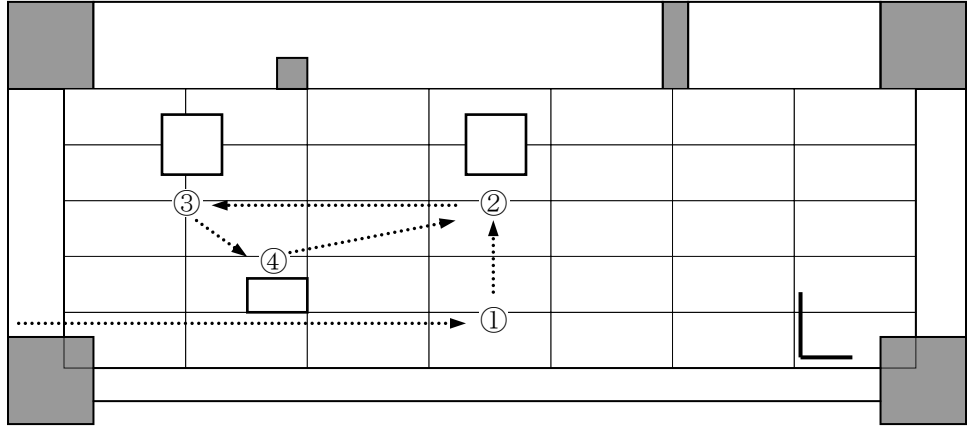
次 教話後、②の位置にて、着座、

拝礼、天地書附奉体、拝礼

次 ①の位置まで膝退する。

次 結界に向いて座り、一拝、回転起座し、

控え室へ戻る



〈本部広前会堂の宣教のしつらえ〉

(備考)

・神伝は、九日には「立教神伝」、二十一日には「御神伝」を捧読する

・教会での宣教はこれに準じて行う。

・神伝には本形と、箱に入った巻物とがある。巻物の場合の作法を次に示す。

先 置笏・置扇し、箱に紐がかかっている場合は解く。

次 箱を三方の左端に移し、蓋を取り、

右に伏せたまま置く。

次 神伝を取り、押し頂く。体の少し右に持っていき、

左手で持ち、右手で紐を一回り毎解く。そして紐

は手前から巻物の右端の上に掛けて、後ろに回す。

体の左から開きながら正面目通りへ掲げる。

次 一揖（参拝者はこれに合わせ敬礼）、捧読。

次 読み終わると体の左に持っていき、捲き戻す。

次 体のやや左で左手に持ち、右手で一回りづつ紐を

捲く。（その時左手の人差し指で紐を押える）

次 神伝を押し頂き、箱に納め、蓋をし、紐が有る場

合は結ぶ。三方の中央に箱を移す。

次 把笏・把扇、一拝、置笏・置扇、四拍手、一拝。

(参考)

・賛題を唱えての教話の作法

先ず登壇して一揖。次に一拝、賛題奉唱（二回）、一拝、四

拍手、一拝（参拝者もこれに合わせる）して教話

教話後、一拝、賛題奉唱（一回）、一拝、四拍手、一拝（参

拝者もこれに合わせる）

最後に一揖して降壇

## 第六部 調饌について

### 一 お供えの意義

本教におけるお供えは、信心生活の具現であるといえる。信奉者の生活全体は取次によって高められ、神の願うあいよかけよで立ち行く生き方になる。信奉者はそのお札の真心を形に表すものである。

すなわち、教祖は、お供えについて「長者の万灯、貧者の一灯ということがあろう。その貧者の一灯も奉られぬ者もあるう。神は灯明でも線香でも、何でもかまわぬ。一本の線香を奉られぬ者は、一本を半分に折りて奉りても、灯明の代わりに受け取ってやる。．．．」(『金光教教典』理解Ⅲ 内伝2―2)と教えられ、また、金や物のない者はわらしべでも受け取って下さるとも教えられている。これは、氏子に真から供える心があれば、その人その人の生活に応じて、無理をしたり虚飾をしたりすることなく、その真をそのまま表すことが、この道の伝えであり、神の喜びでもある。従って、見栄えが良く、豪華な物で、いかに立派な品物をお供えしても、もとは「食物はみな、人の命のために天地乃神の造り与えたまうもの」(同 理解Ⅲ 神訓1―13)であるから、神は驚かれはしない。質素であろうと、みすぼらしくあろうと、供える品物に添った真心が神に通じることが肝要である。

今日まで、お供えとして実際に供えられているのは、金銭、物品、労働力、又は自己の作品などであって、なんでなければならぬとか、何であってはならないという基準はない。その形状、性質、容量などにも制限はない。信奉者の真心から供えるものであれば、皆お供えとして受け取って下さるのである。

なお、霊に対するお供えも、神に対するお供えに準じて考えればよい。その供え方も神に準じて行うことが適当である。

しかし、祭典時のお供えには、基準を定め、それに従うことによつて、真心を表している

### 二 調饌の心構え

- ・ 調饌奉仕をする者は、神様に真心をお受け頂けるよう、心を込めて御用にあたらなければならない。
- ・ 身体を清潔に、心を整え、調饌にふさわしい服装をし、覆面をつける。(例えば、白衣、袴をつけて白襦を

- ・かけたり、和服、洋服の上に白いエプロンをつけたりする)
- ・お供え物は、丁寧にあつかう。
- ・調饌の間、特に言動に慎み、喫煙などはしない。

### 三 調饌所と調饌用具の整備

- ・調饌所は神聖でなければならぬ。調饌設備のない場合は、適当な場所を定め、清潔にして御用に当る。
- ・調饌用具を手落ちなく整え、清潔にしておく。(例えば、まないた、裁包丁又はカッターナイフ、裁物板又はカッティングマット、定規、包丁、千枚通し、ハサミ、三方、土器かわらけ、白紙(半紙、奉書等)、麻緒、敷葉(桧葉等)、布、ふきん、こより、串、帛等を用意する)

### 四 神饌の予定と品物の準備

- ・神饌の品物、台数、献饌の順序など予定を立てる。
- ・神饌の予定を立てる時、祭詞の献供句の品とくい違わないよう注意する。
- ・品物を整えるとき、腐りやすいもの、臭いのするもの、形だけのもの等は避け、新鮮で質の良いものを選ぶ。

### 五 盛り方について

- ・野菜、果物を始め、すべての物は出来るだけ自然のままの姿を失わないように盛り付ける。(爪楊枝、セロテープ、輪ゴム等は使用しないようにする。また野菜、果物の上下に気を付ける。)
  - ・長いものや大きいものは、適当に切つて用いても良い。
  - ・三方には必ず敷紙を敷き、野菜、果物、魚貝類等は土器を使用する。
  - ・三方の大きさにふさわしい盛り付けかたにし、まわりは土器より出来るだけ出ないようにする。
  - ・高さは、瓶子の高さに揃えるか、土器に直径十深さ程度にする。
- また表裏を作らず、四方面面になるように形を整えると共に、伝供中に落ちないように安定させる。

## 六 品物と順序

・調饌中、床に落ちたものは使用しない。やむを得ない場合は洗うか、ふきんで拭くなどする。また伝供の途中、落ちたものはお供えしない。

・調饌が終わると、調饌司（調饌の責任者）は神饌を点検する。

### 1 米

次の順でお供えする。全体のしつらえの都合で順序をかえることもある。

荒稻あらしね、和稻にしねの順に供えるが、本教では多く洗米を御饌袋みけぶくろに入れて供える。

荒稻は、粳を取らないもの、または、穂のままのものをいい、和稻は、粳を取ったもの（玄米・白米・洗米）をいう。

おおむね、米に関しては餅、酒を含め、加工の度合の少ない順になる。

### 2 鏡餅

御鏡おかがみともいう。敷板の上に敷紙を敷き、二重ねまたは三重ねにする。色は白ばかりの所もあるし、紅・黄・青等を用いる所もある。小餅の時は、沢山盛って形を整える。

### 3 神酒

酒には白酒しろき（清酒）、黒酒くろき（くさぎの焼灰又は黒胡麻の粉を入れた酒）、ひとよ酒（甘酒）などがあるが、本教では清酒を瓶子に入れる。瓶子は三方の中央に置く。

備付けの場合、瓶子の口を切っておく。（三方手前の外側へ置く）

（本部広前では口を切らないようにしている）

### 4 魚類

まずは海の魚を、鯛類、背黒類（ぶり、まぐろ、さわら、さば等）、甲類（かに、えび、貝等）の順に供え、次に川魚（鯉、鮎等）を供える。丸身のままお供えするのが普通であり、鱗を取らず、腹を開けず、水で奇麗に洗う。特に、エラの内部はよく洗うようにし、吸湿のよい紙を挟んでおくとよい。

5 鳥類

海魚は腹を、川魚は背を神前に向け、頭は正中に向ける。正中に供える場合は、頭を神前から見て左に向け  
る。(覚えやすいため「海腹川背」という)

二匹を一台に供える時も同じようにする。このとき、腹を合わせて頭を神前に向けてもよい。

野鳥(きじ、鶏等)、水鳥(鴨等)の順に供える。よく汚れを取り、羽毛を整え、首は翼の中に入れる。向  
きは、魚に準じる。

6 乾物

ビン物・缶物、袋物・箱物の順に供えている。袋物、ビンカンの順になることもある。  
まず芯を作り、山形(実際には釣鐘形になる)に盛り付ける。芯の高さは三方の高さを目安にし、他のお供  
えとのバランスを考える。

7 野菜

二台に分ける場合は、根の物・色の黒(茶)い物と、葉・実の物・色の白(青、赤)い物に分けて盛る。芯  
を作り、おおむね乾物のように盛る。(高さは土器の直径+深さを目安にする)

分類例

根物、黒物 Ⅱ ごぼう、れんこん、いも類、なすび、南京等

葉物、白青物 Ⅱ 白菜、キャベツ、セロリ、トマト、ネギ、キュウリ、ピーマン、大根、玉ねぎ等

8 果物

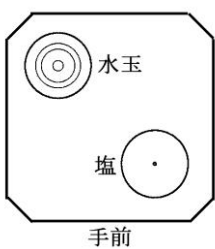
二台に分ける場合は、種類分けにして盛り付ける。

9 菓子

三方より出ないよう、高さも気をつけて盛る。

10 塩水

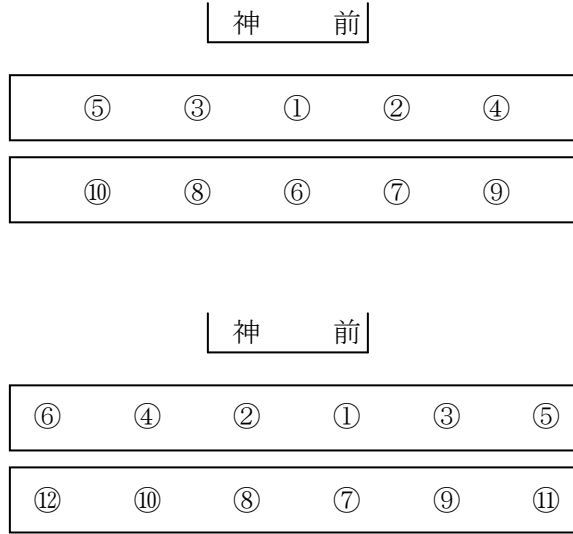
塩は円錐形に盛って三方の右前に置き、水玉は左後に置く。備付けの場合、水玉の蓋を  
開けておく。(水玉手前、塩の左に置く)(本部広前では蓋は開けないようにしている)



# 七 献饌の順序

・奥の八足から、正中、左側（祭主側）、右側（副祭主側）の順に供える。

・三方の台数が奇数の時と、偶数の時の例を示すと次のようになる。



献饌順のおぼえかた

米 ち酒か物菜菓子  
も 神さ乾野果菓  
こめもみさかやかかえん } 塩水

（「米糲酒屋抱えん」と覚える）

・右に記した以外の物があつたり、品物が多くて三方に盛りきれない場合は、神饌案以外の案や台に乗せて、献饌の最後にお供えするか、祭典の始まる前にお供えしておく。以前、本部広前では、神前の左右の大盛台にお供えしていた。

参考として、例を示す

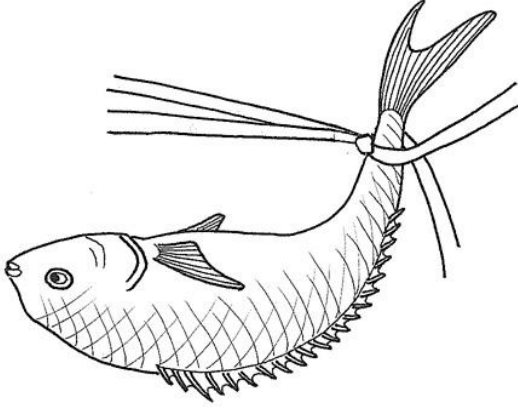
（月例祭 — 神前—十二台 霊前—十台）

川魚	背黒	神酒	鏡餅	洗米	神酒	鯛	甲類	大祭	神	前	魚	菓子
塩水	果物	野菜（黒物）	乾物（袋物）	乾物（瓶缶）	野菜（白青物）	果物	菓子	十六台と大盛台二台	神酒	神酒	果物	菓子
					大盛台（乾物）			生花一对 奉幣	瓶缶	鏡餅	魚	
									野菜（黒物）	乾物	菓子	
									果物	神酒	鏡餅	野菜
									塩水	果物	野菜	果物
										霊	魚	菓子
										前	神酒	果物
											鏡餅	野菜
											神酒	果物
											乾物	果物
											塩水	

## 補足 魚のくくり方

(鯛の場合)

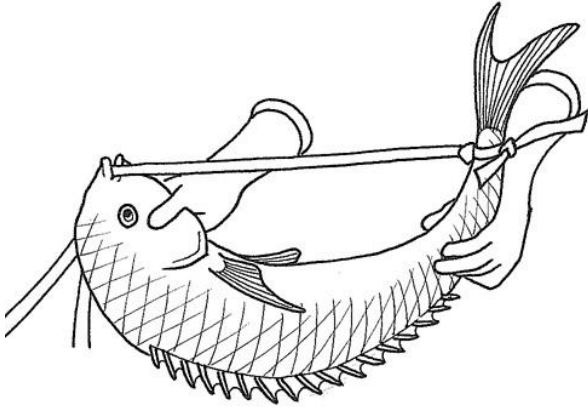
1



・麻緒を4本程重ね、穂先15センチの当りで一重の結びを作る。

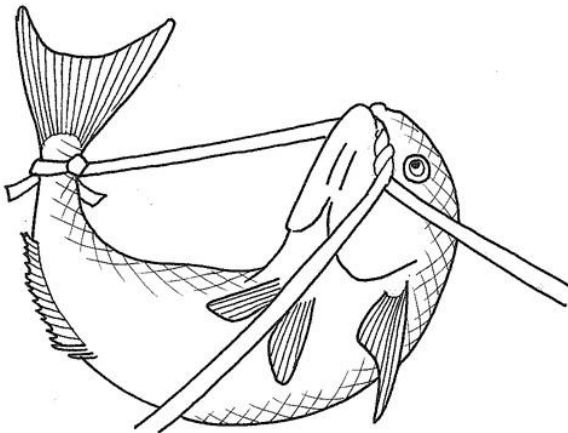
・「海腹川背」を考え、魚の尾ヒレの元を麻緒の穂先（結び目より先）で縛る。

2



・土器の大きさに合わせ、魚を曲げる。

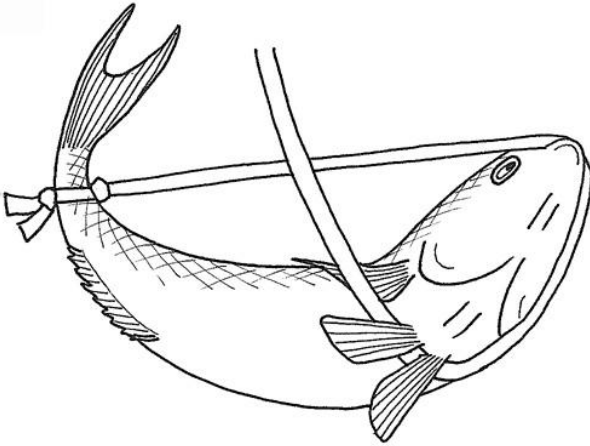
3



・魚の口を開け、麻緒を挟み、麻緒を2、3回ねじった後、2本ずつに分ける。

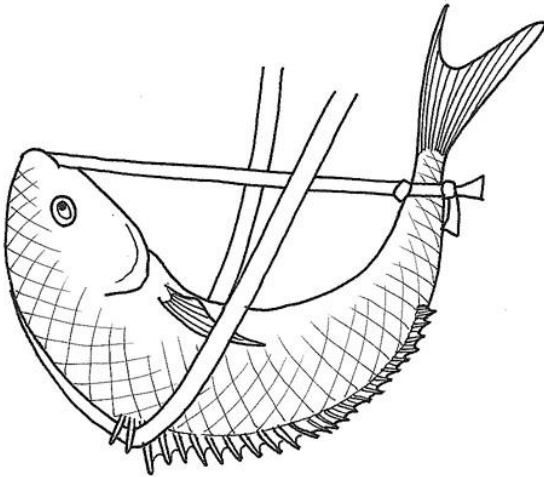


4



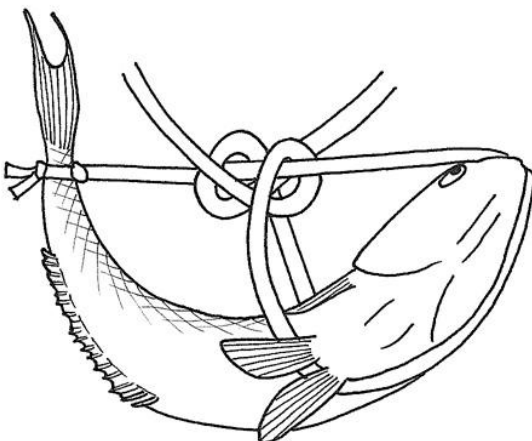
・魚の腹側に分かれた麻緒は腹ヒレに掛けて上部へ送る。

5



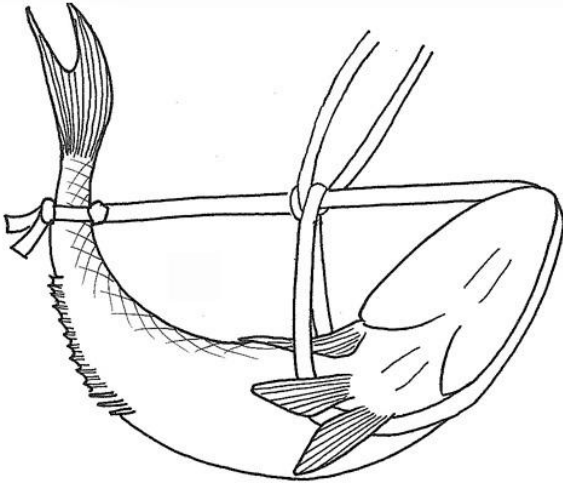
・背側の麻緒は背ヒレの2本目と3本目の骨の間に掛け、背ヒレを起こし、やはり上部に送る。

6



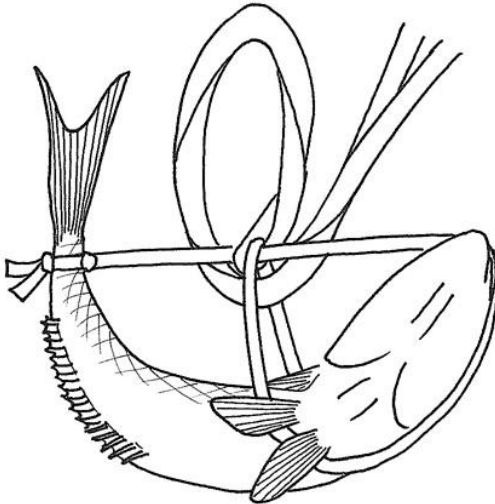
・背と腹からの麻緒は、尾から口に掛けた麻緒の上から下へ1回掛ける。

7



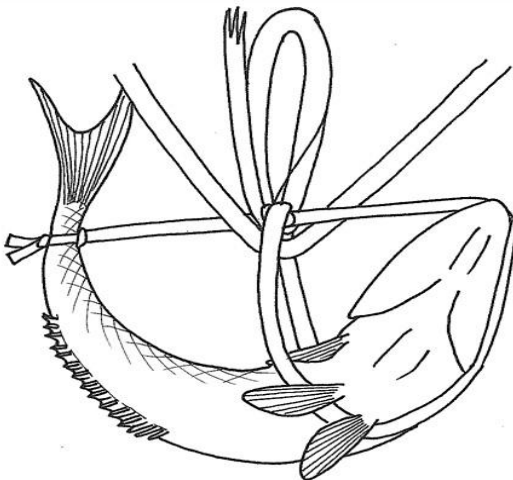
・二方からの麻緒を一つにして上部でまとめる。

8



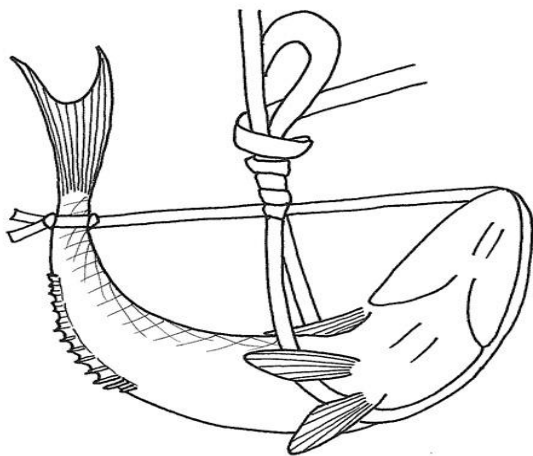
・瓶子の高さの辺りで1本にまとめた麻緒を折り、尾から口に掛けた麻緒との間を折り返す。

9



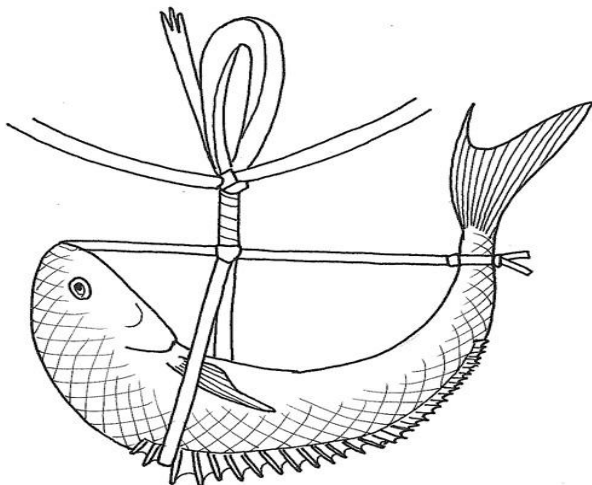
・新しい麻緒の中程を、「8」で作った束の下から掛ける。

10



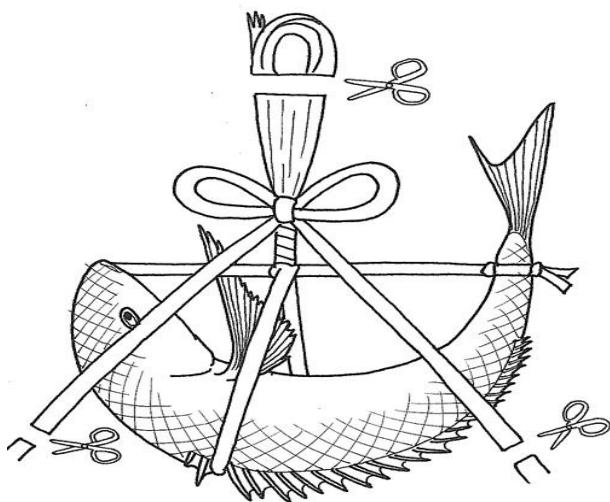
- ・「8」の束の下3分の1程、「9」の麻緒を包帯のように巻き付ける。  
(巻き始め)

11

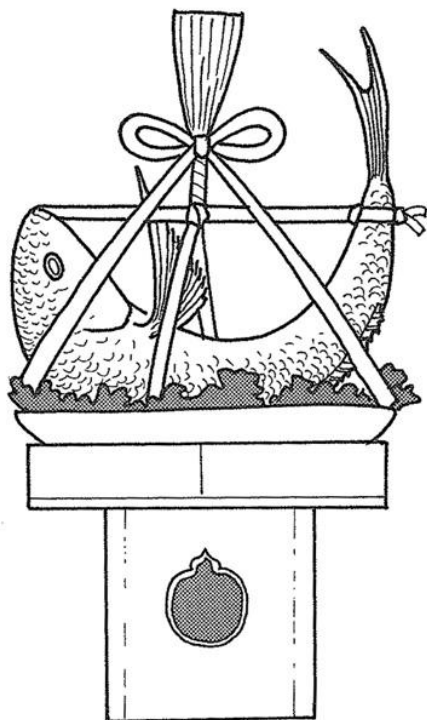


- ・巻き終わりを、戻らないように1度結ぶ。

12



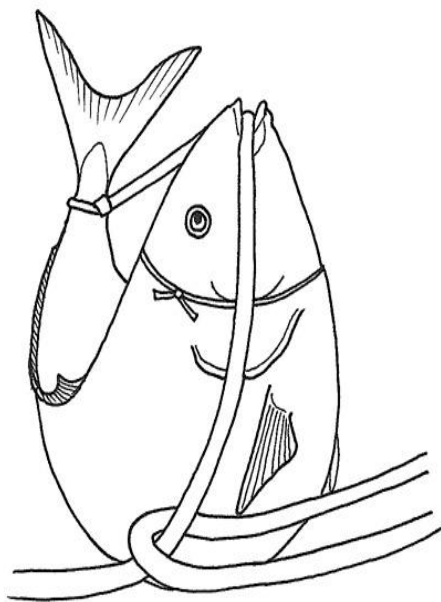
- ・残った麻緒を蝶結びにし、「8」の麻緒を穂先に合わせて長さ切り揃える。
- ・「7」の束の上の輪を切り、束を揃える。
- ・「2」の麻緒の端を短く切り整える。
- ・魚の胸ヒレを麻緒に掛けて立てる。



- ・土器に青菜か桜葉を敷き、適当な野菜（大根とかじゃがいも）を切り、魚の下に敷き安定させる。
- ・向きを間違えないように三方にのせる。

（ブリ、ハマチの場合）

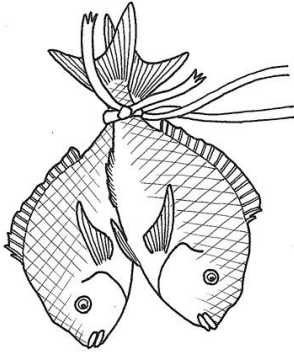
1



- ・エラの中を綺麗に洗い、水や血を取ったあとに、奉書紙等の吸湿性の良い紙をつめ、細い麻緒でエラブタが開かないように頭部を縛る。
- ・2本の麻緒を用意し、鯛と同じように尾の部分に縛る。口を通した麻緒を下へ回す。
- ・胸ヒレの辺りで、新しい麻緒一本を、先の麻緒に掛け、先の麻緒を背ヒレの方へ、新たに掛けた麻緒を腹ヒレの方へ回し、それぞれのヒレに掛け、上へ回す。
- ・以下鯛の場合と同じ

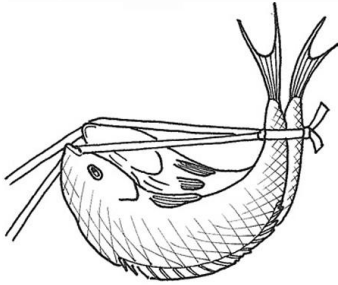
(二匹の魚を抱き合わせる場合)

1



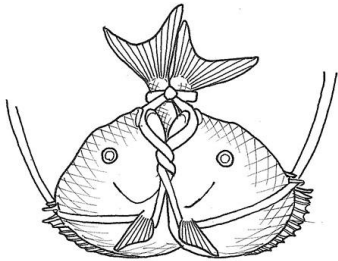
- ・二匹の魚の腹を合わせ、尾を重ねる。
- ・鯛と同じように重ねた尾を一度に縛る。

2



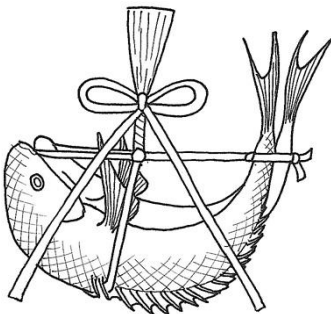
- ・麻緒を2本に分け、それぞれをそれぞれの魚の口に挟む。

3

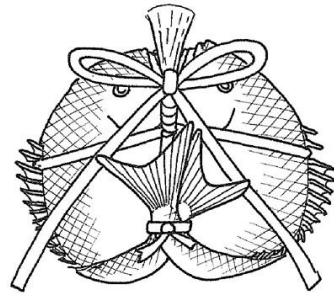


- ・麻緒を1本にまとめ、2、3度ねじる。
- ・再び2本に分け、それぞれの魚の背ヒレに掛けて上にまわす。
- ・以下同じようにする。

4



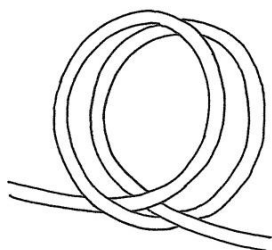
- ・正中に頭を向ける場合（横向き）。
- 蝶結びは魚の横に作る。



- ・奥に頭を向ける場合（縦向き）。
- 蝶結びは魚の尾の方に作る。

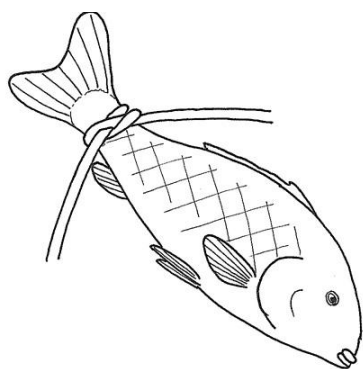
(生きた鯉の場合)

1



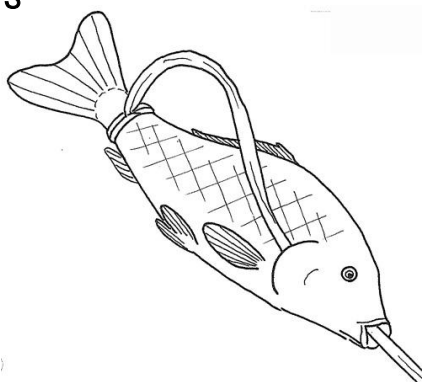
- ・麻緒を2本程度用意し、重ね、巻き結びを作る。

2



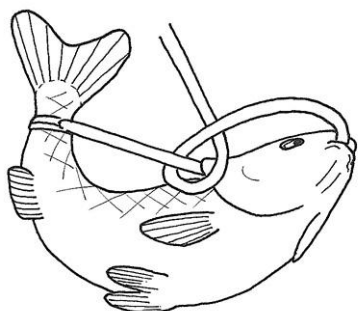
- ・鯉の尾を、その輪に通して縛る。

3



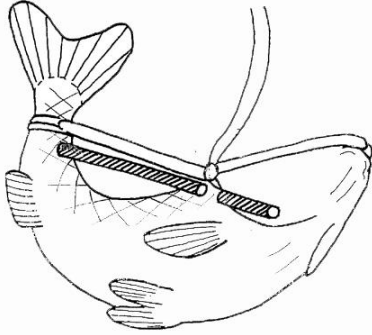
- ・麻緒を1本にまとめ、鯉のエラから入れる。
- ・麻緒を口から出す。

4



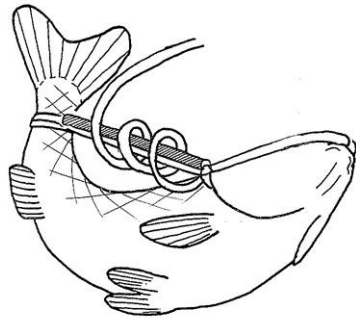
- ・その麻緒をエラの所へ戻す。
- ・元の麻緒に掛ける。

5



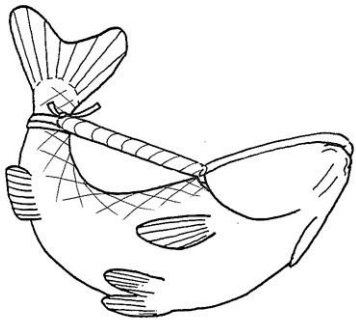
・ 適当な枝を用意し、尾からエラの長さ（魚を曲げた状態で）に合わせて切る。

6



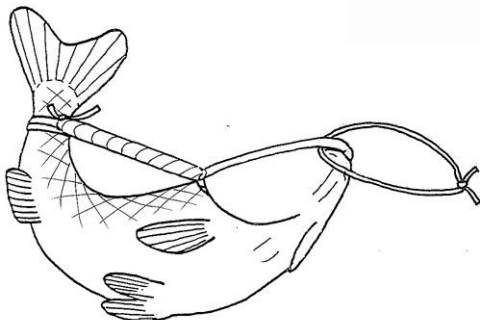
・ 「4」の麻緒で「5」の枝と「3」の麻緒を合わせる。

7



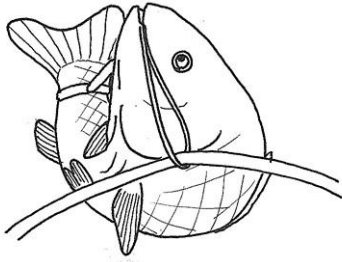
・ 尾の方まで巻いて、枝を隠す。  
・ 麻緒が解けないように、端の始末をする。

8



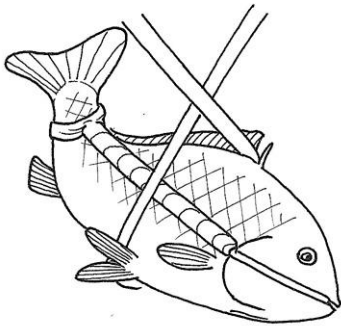
・ 細い麻緒を用意し、口から出た麻緒に掛ける。  
・ 後ろに回した時、エラの辺りで輪を作る。  
(端の始末をする)

9



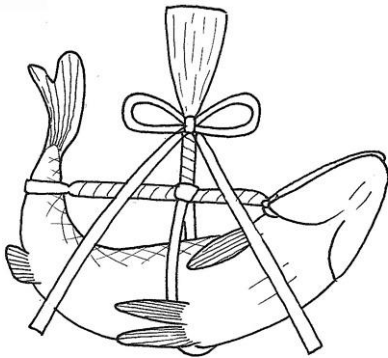
・「8」の輪に2本の新しい麻緒を掛ける。

10



・鯛と同じように、麻緒の両端を背ヒレ、腹ビレに掛け、上へ回す。

11



・枝に麻緒を両端を上から掛け、以下鯛と同じように束を作る。

・蝶結びを腹側に作る。

(備考)

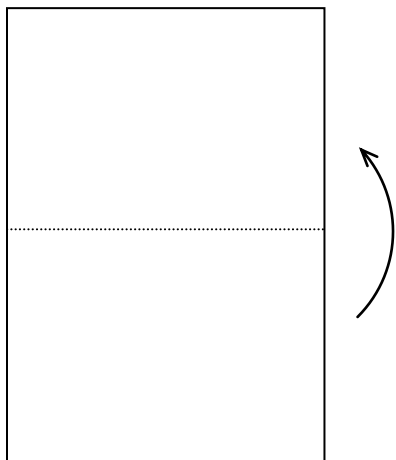
・生きた鯉は、鯛と同じようにくくっても、更に体を曲げ、勢いを付けて飛びはねる。従って、体を曲げさせないように、枝で支える。



# 第七部 裁ち物

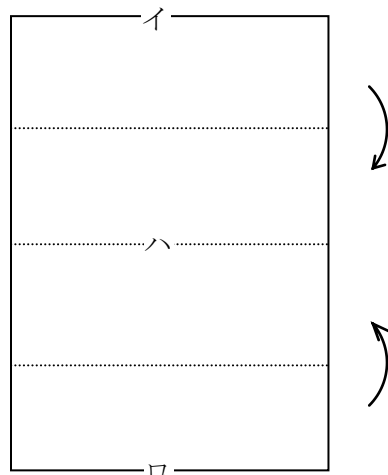
## 一 覆面

1



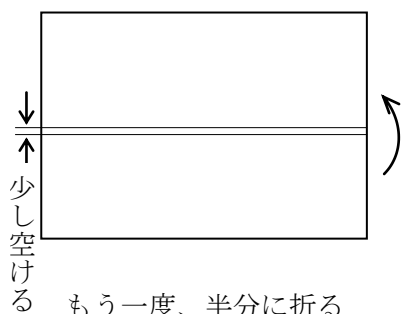
半紙の裏が内になるように半分に折る

2



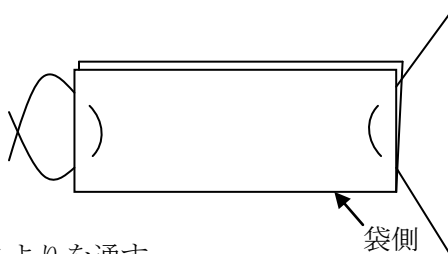
一度開き、イ、ロを折れ線ハに合わせるように内側に折りこむ  
注) ハに合わせる時、1mm程空けるとよい

3



もう一度、半分に折る

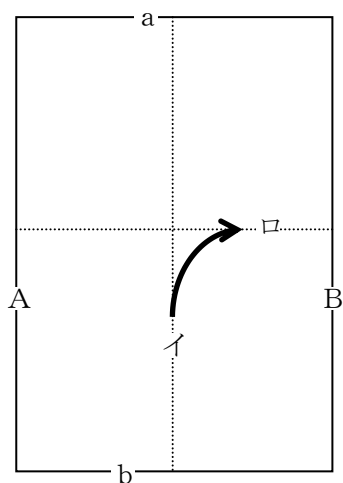
4



こよりを通す  
注) こよりの穴を空ける時、端に近づくと紙は裂けるので注意する  
穴の間隔を広くすると耳に掛けるこよりは短くなる  
こよりの片方は結び、他方は使用する者が自分に合わせて結ぶ

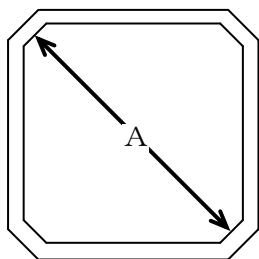
## 二 敷紙

1



イとロを重ねるように折る。その時、Aとa、Bとbは平行になる

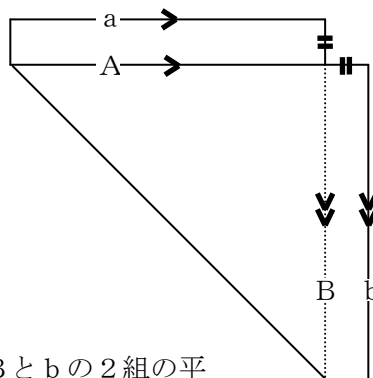
○各種の三方に合った敷紙の大きさ



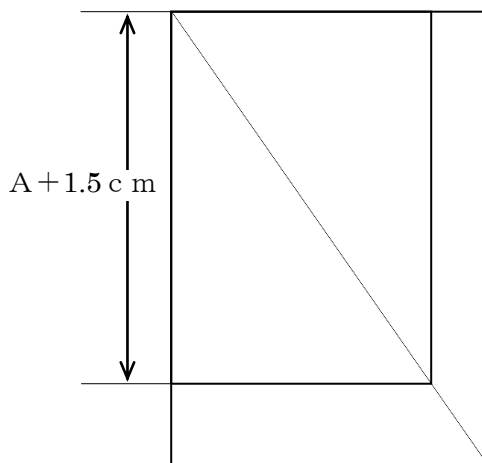
三方の内りの対角線を計る (Aの長さ)

三方の大きさ	敷紙のサイズの目安	
4寸	18×13 cm	半紙1/4
5寸	21×16 cm	
6寸	24×18 cm	半紙半分
7寸	27×20 cm	
8寸	30×22 cm	
9寸	33×24 cm	半紙全紙
尺	36×26 cm	美濃紙

2



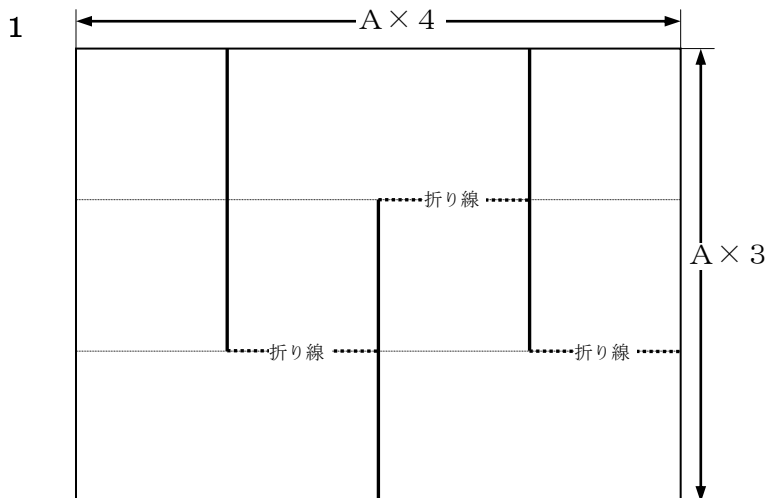
Aとa、Bとbの2組の平行線の間隔は等しくなる



上図のように長方形を切り取ると三方に合った敷紙ができる。

但し、尺三方以上は美濃半紙を用いる

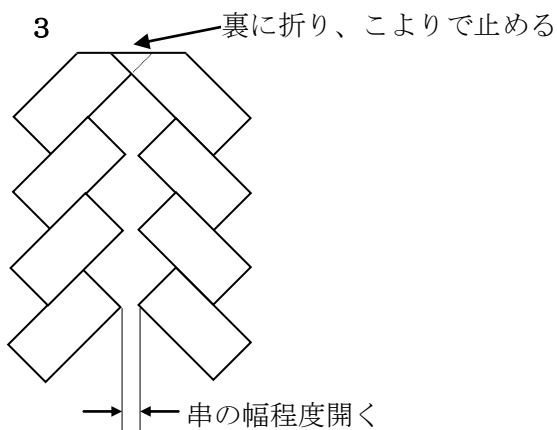
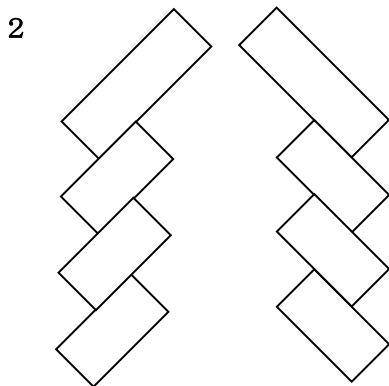
### 三 奉幣 (紙垂)



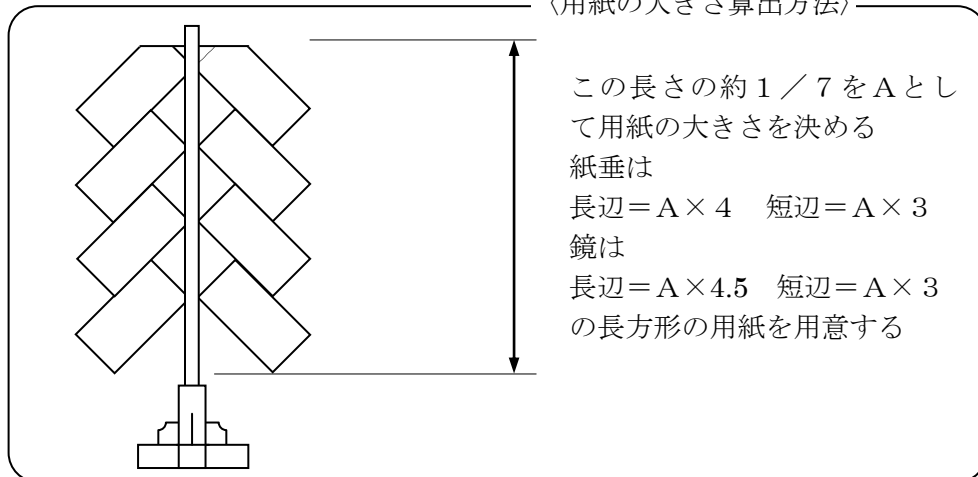
用紙2枚を裏あわせ、または左図の下が袋になるように大きな紙を2つ折りにする。

用紙の長辺を4等分、短辺の3等分して、左図の実線で切る。

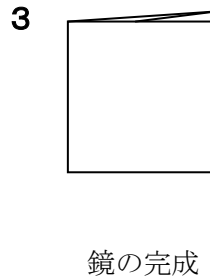
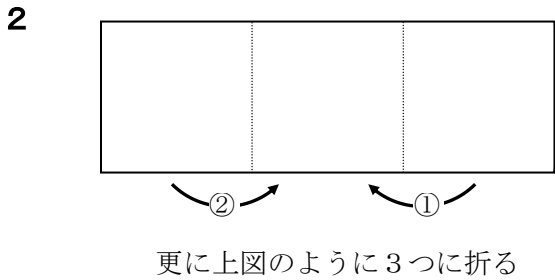
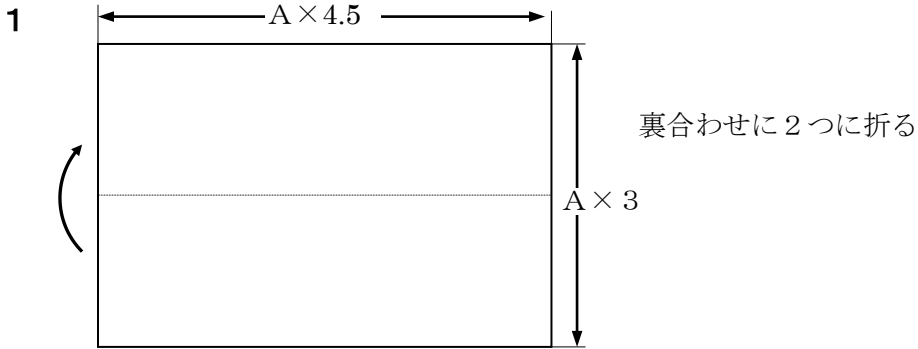
これを2組作る。



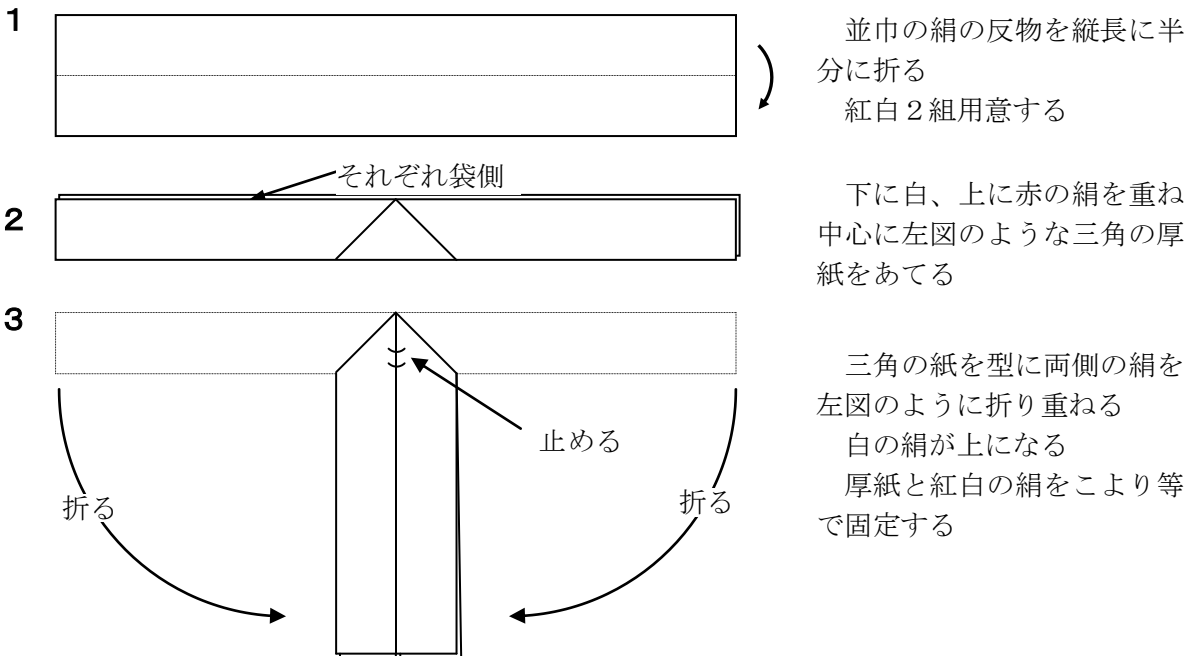
〈用紙の大きさ算出方法〉



(鏡)

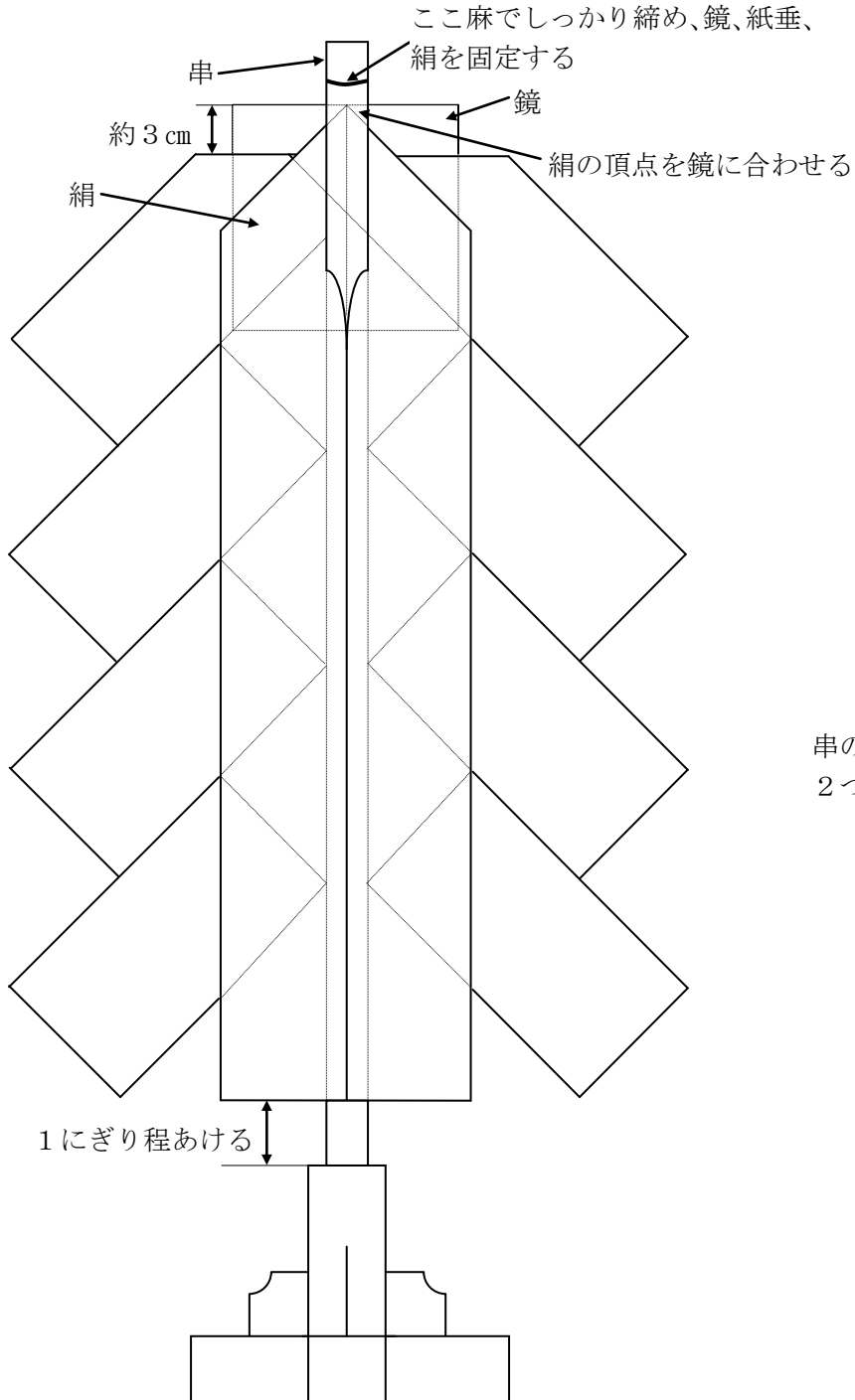


(紅白の絹)

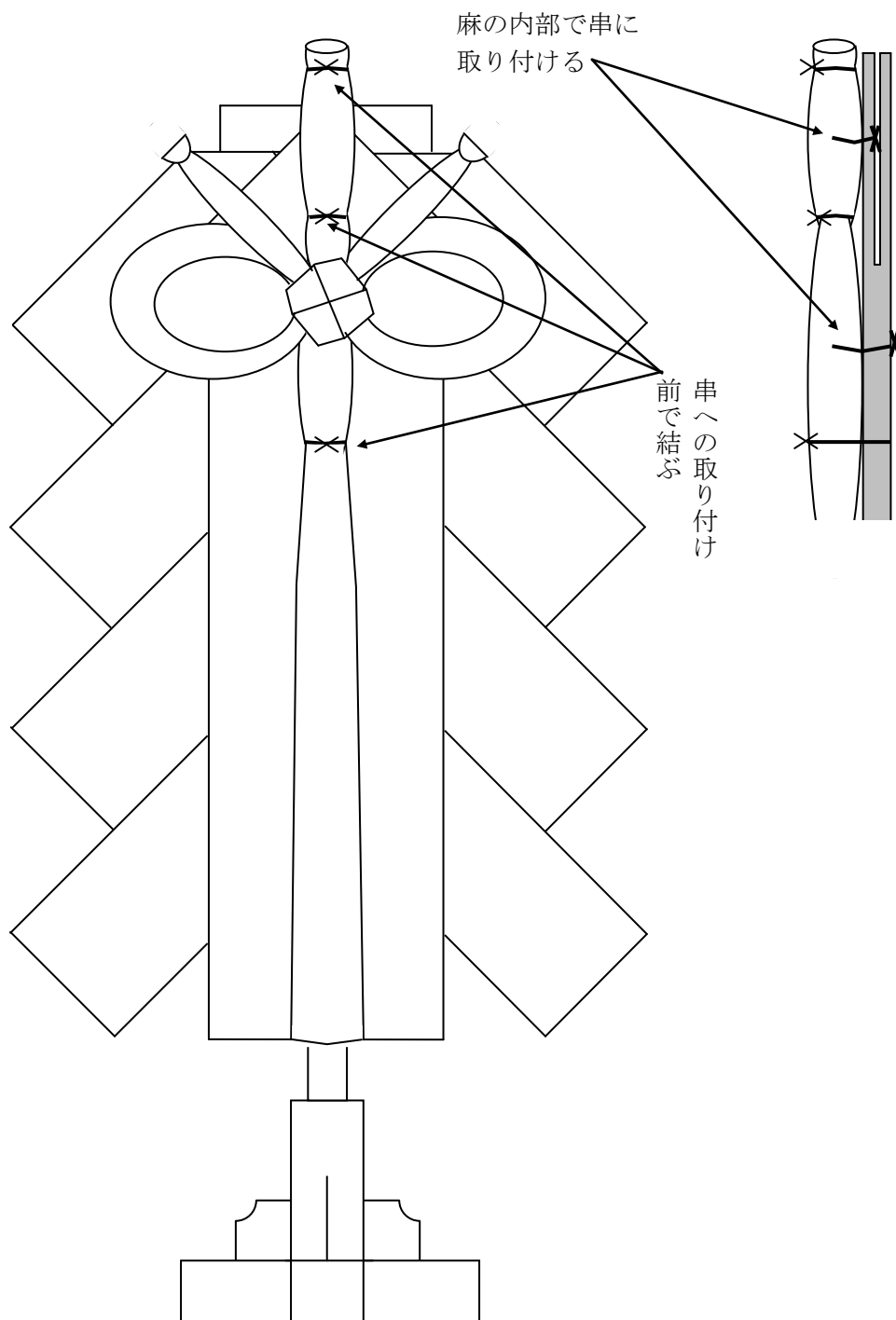


## (組み立て)

- 1 下から鏡、紙垂、絹の順で歪まないように重ね、先を割った串に挿す



2 つのかざりの取り付け (つかざりの結び方は後述)



## 四 玉串

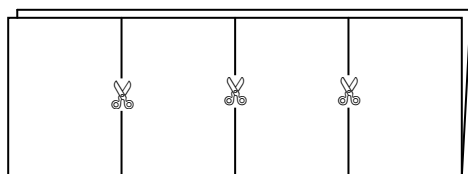
### (A) 片紙垂の玉串 (一般的な紙垂)

1

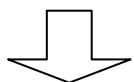


半紙の裏が内になるように半分に折る

2

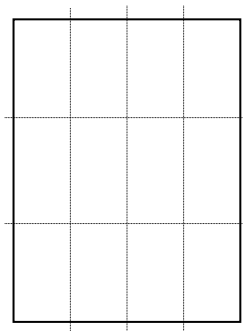


左図のように4等分に切る  
1枚の半紙から4枚の紙垂ができる



1枚を拡大

3



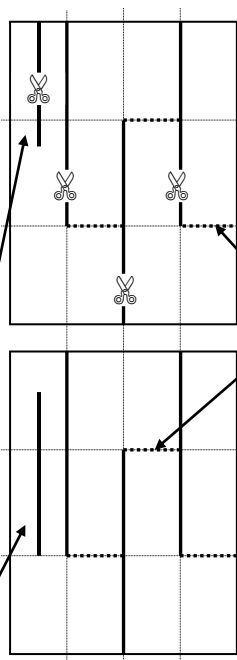
複数枚作る内、1枚を長辺を3等分に、短辺を4等分に折る

この紙を型紙にして右図のように切り込みを入れる

右上は榊に結び止めをする場合

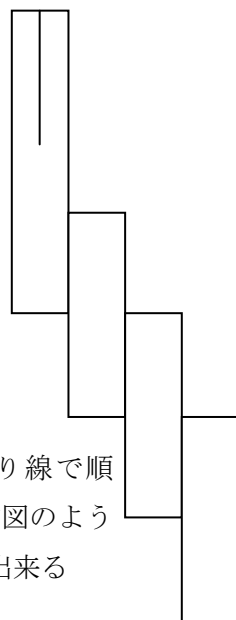
右下は榊の葉に掛ける場合の切り込み

4



折り線

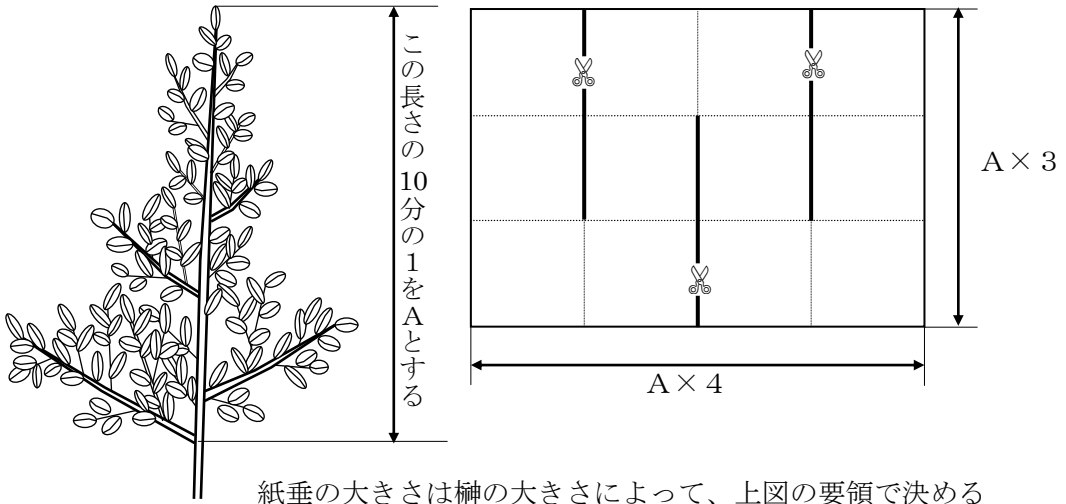
5



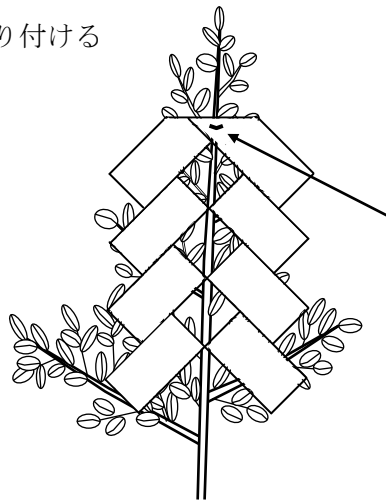
左図の折り線で順の折ると、右図のようにな紙垂が出来る

## (B) 両紙垂の玉串（祭主用）

### 1 紙垂の大きさを決める



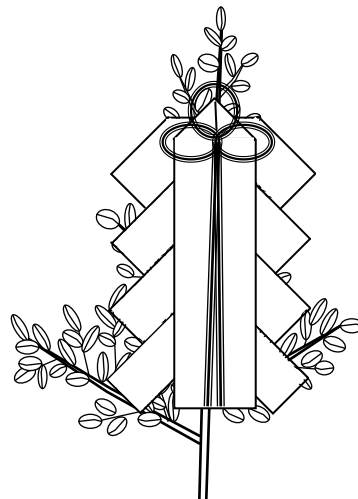
### 2 紙垂を榊への取り付け



奉幣の紙垂の要領で2組用意し、榊の中央になるよう、こよりで止める  
このままで用いる場合もあるが、さらに紅白の絹と麻を加えることもある

### 3 絹、麻の榊への取り付け

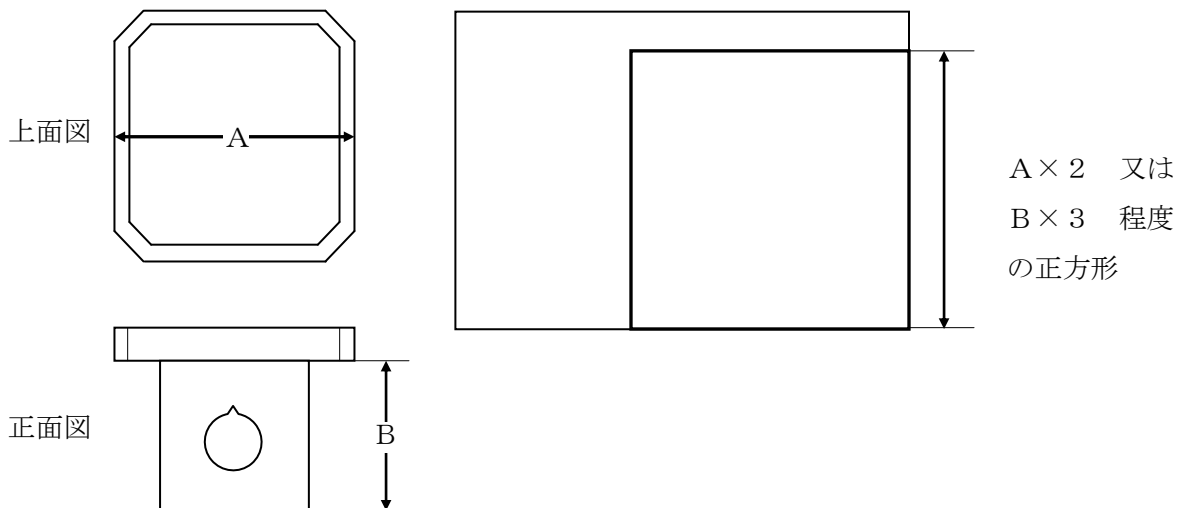
奉幣の絹の要領で紅白の絹を用意し、麻は三つ輪かざりに結ぶ  
紙垂、絹、麻の順に重ね、固定したものを榊にこよりで止める  
(三つ輪かざりは後述する)



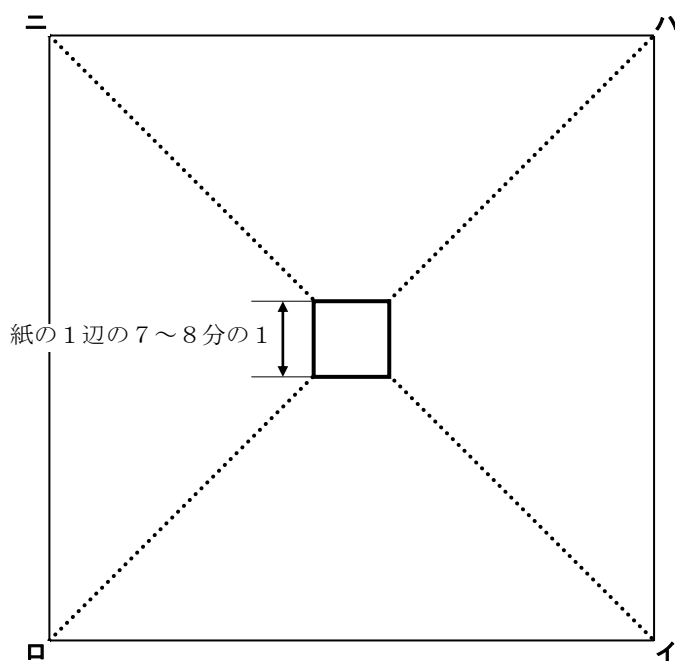


## 五 御饌袋

### 1 用紙の大きさを決める



### 2 型どり



正方形の紙の中央に1/7から1/8程度の大きさの小さな正方形を作る

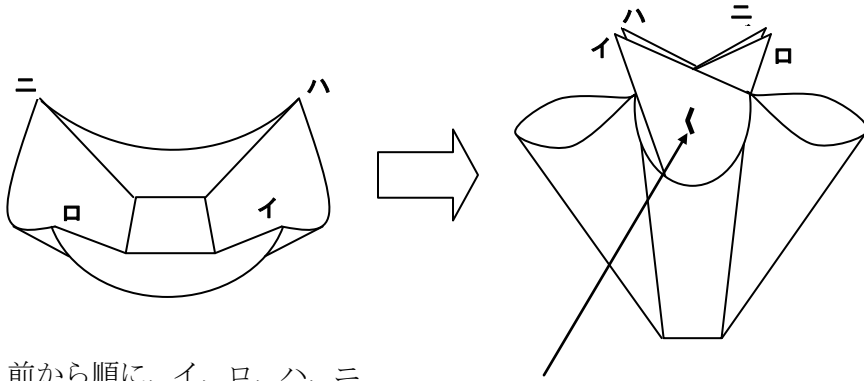
紙の中心を求め、そこからそれぞれ角までの長さの7~8分の1の点を結ぶと小さい正方形が出来る

—— 線か谷折り

..... 線は山折りにする

中央の正方形の中まで折れ目をつけると、完成した時安定が悪いので注意する

2 組み立て（下図のように袋状に折り曲げる

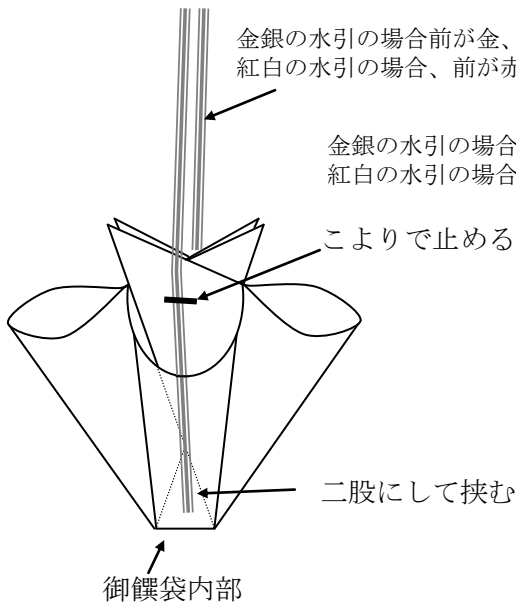


前から順に、イ、ロ、ハ、ニの部分を交互に重ねる

ひらかないように、縦に2つ穴をあけ、こよりで止める

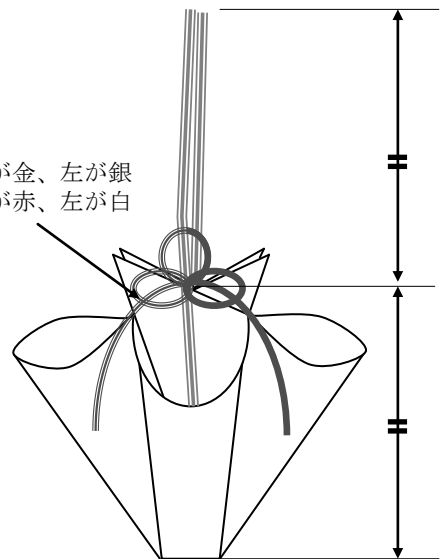
重ね目をクリップで仮に止めておくと作業しやすい

3 水引のつのかざりをつける



40号水引7本付を10本程使用する  
教会によって本数を加減するとよい

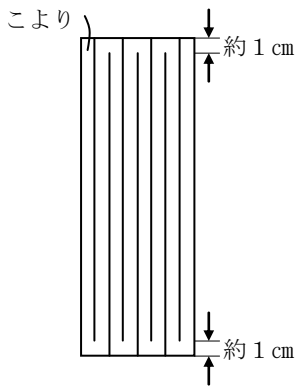
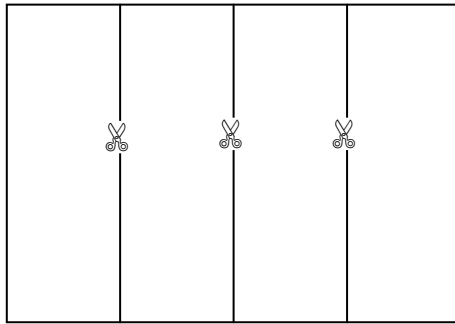
4 三つ輪かざりをつける



三つ輪かざりを取り付ける時、傾かないように注意すること

## 六 八垂(やたれ) 二垂(ふたたれ)

### 1 八垂



2～4枚の半紙を重ね、左図のように4つに切る

切った半紙を重ね、端をこよりで止める  
上下を約1cm残して、左図の実線で7箇所切る

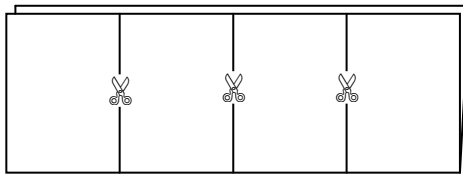
このとき、最初は一方向なかり切り、裁ち台(カッティングマット)ごと回転させて、もう一方を切るとよい

また、要所々々をゼムクリップ等で止めておくのもよい

こよりの所を持ち上げて八垂の完成

葬儀等の時、1本1本ばらしながら、1対の大榭に均等に掛ける  
大祭等では、神前の1対の大榭に5色の布を掛ける場合がある  
その場合は、正中側から、紫(黒)、白、紅、黄、青(緑)の順

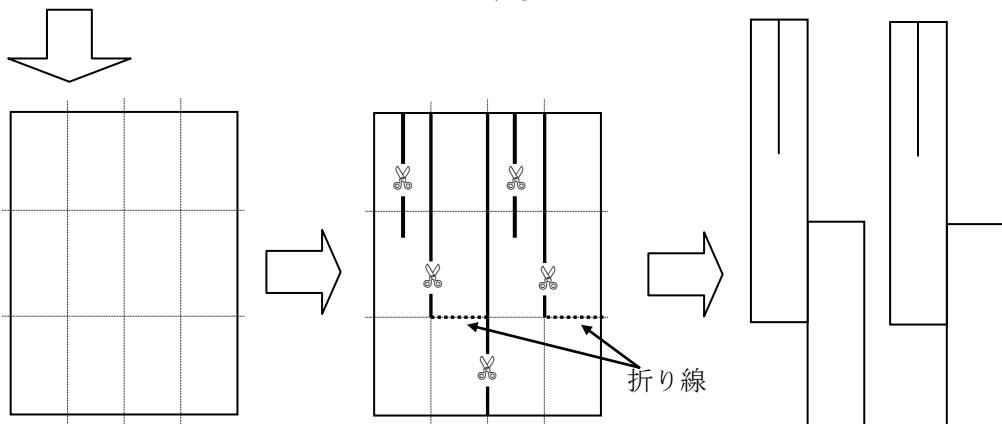
### 2 二垂



片紙垂の要領で、図に従って作る

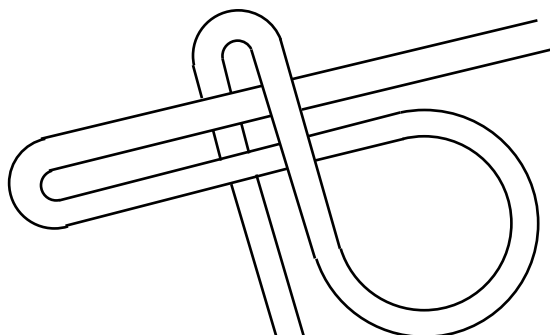
片紙垂1枚の用紙から、1対の二垂が出来る  
葬儀の際、柩や新霊床の1対の榭にこれを付

ける



## 七 つかざり

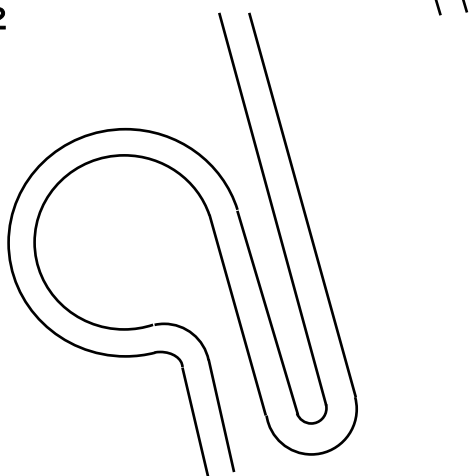
1



麻を標準で2kg用意し、  
500g づつ4つの束に分ける  
教会によって加減する

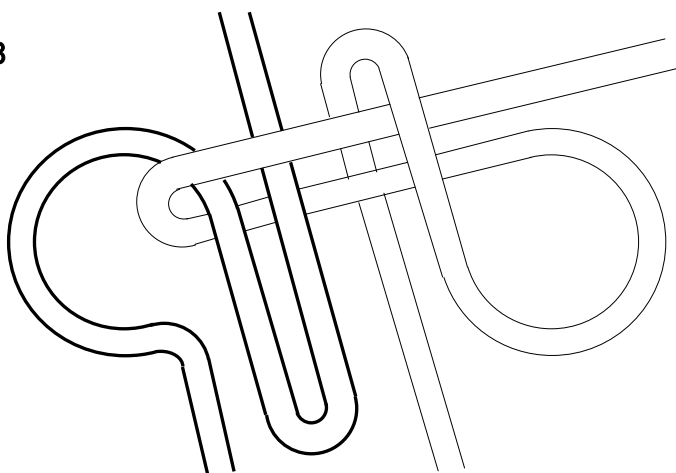
1束で左図のように、右の  
輪を作る

2



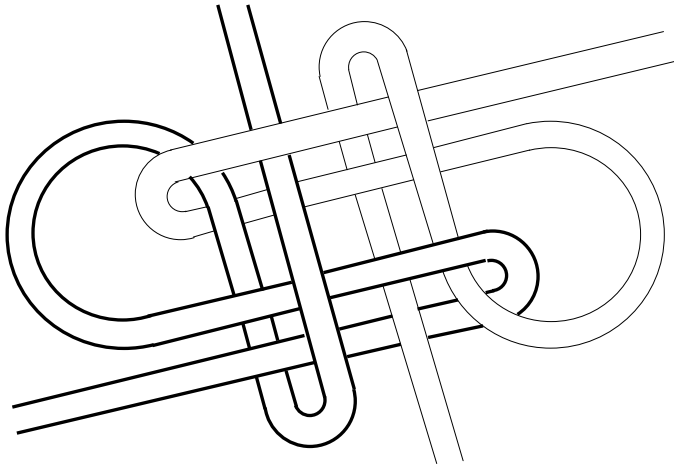
別の1束で、左図のように、  
左の輪を作る

3



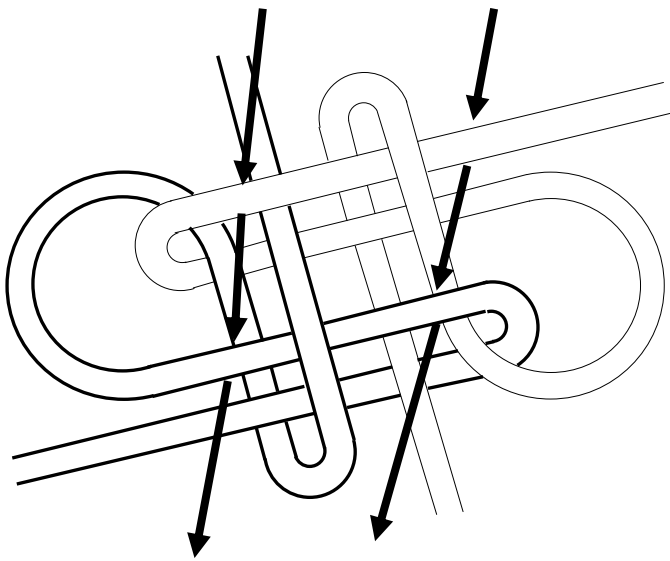
左図のように、左右の輪を  
組み合わせる

4



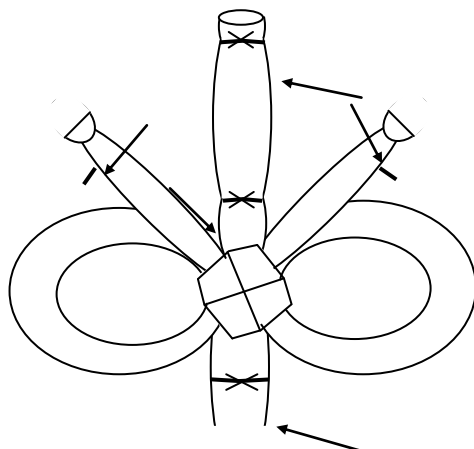
ひきつづき、左右の輪を組み  
み合わせ、少しゆるめに結ぶ

5



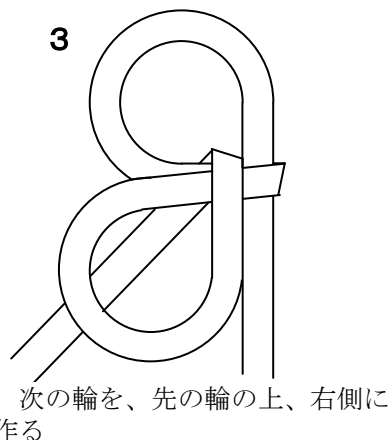
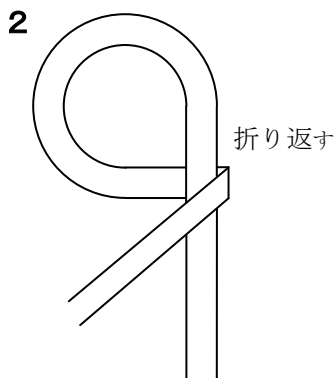
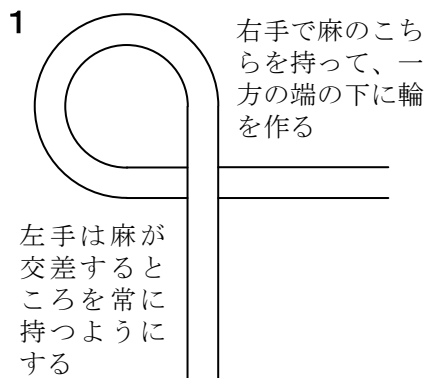
左図の矢印のように、残っ  
た2束をそれぞれ、先に作っ  
た輪に通す  
輪を締めて、形よく結ぶ

完成

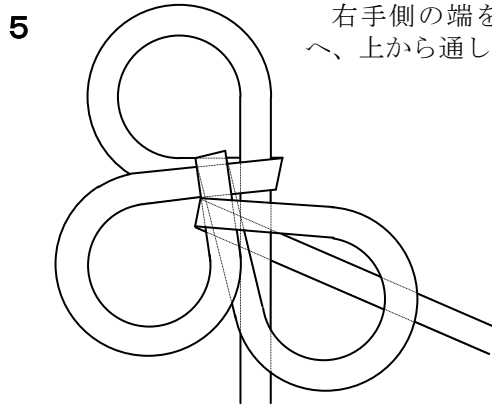
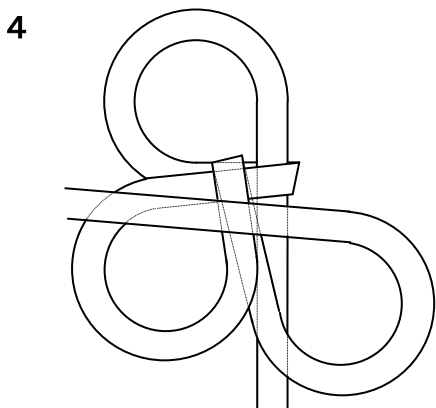


解けないように要所々々を  
1本の麻で縛る

## 八 三つ輪かざり

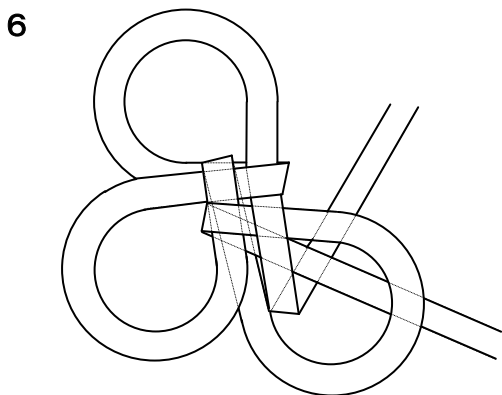


その際、右手で持った端を上重ねるように輪を作る  
 右手側の端を最初の作った輪へ、上から通して折り返す

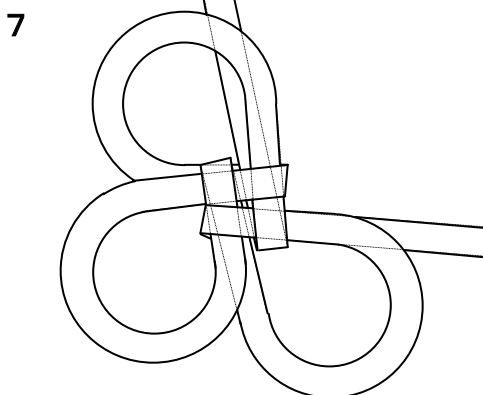


3つ目の輪を、2つ目輪の上、右側に作る  
 2つ目の輪と同じ要領で、右手で持った端を上重ねるように輪を作る

右手側の端を2つ目の輪へ、上から通して折り返す



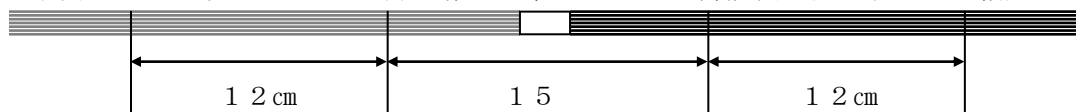
もう一方の端を、3つ目の輪へ、上から通して折り返す



最後に、三つ輪かざりを裏返し、中心の結びが巴組になるよう、最後に輪を通した端を組み込む

## 八' 三つ輪かざり（水引の中央から結ぶ場合）

1 出来上がりの見当をつける(下の数字は、尺三方用の御饌袋に使用する三つ輪)



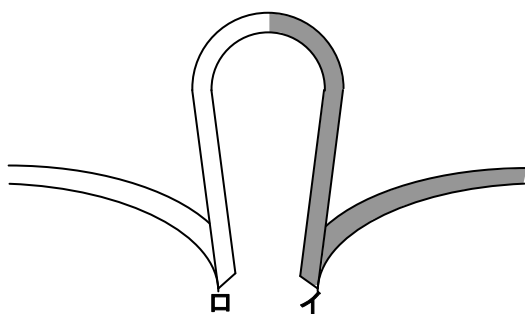
金銀の水引の場合、金が右、銀が左になるように輪を作る

水引を2本使用する場合は、づれないよう結び目を仮止めしておく

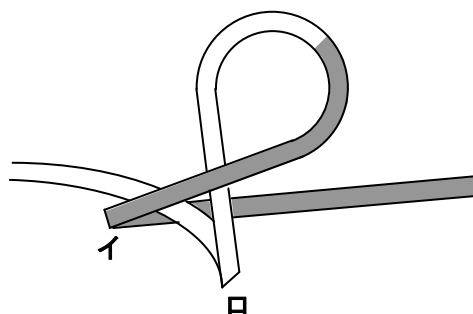
上の寸法で折りを付けておく(下は横からの図)



2

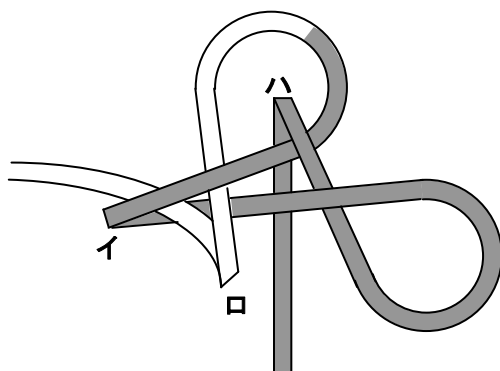


3



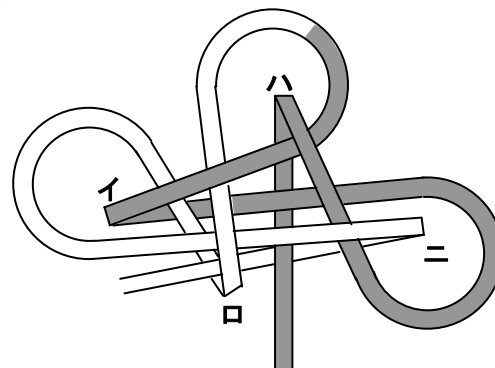
ロの折り目を、イの折り目の中にはさみ込む  
中央の輪を作る

4



ハの折り目を、中央の輪に通し、右の輪を作る

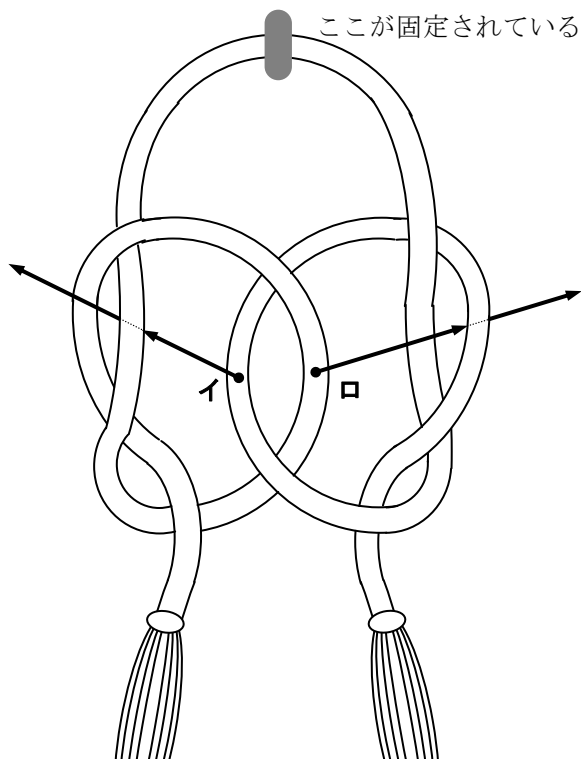
5



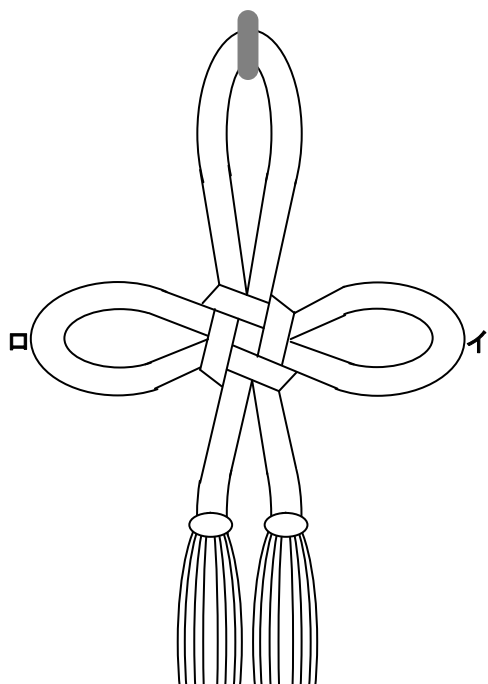
ニの折り目を、右の輪に通し、上図の  
ように、中央の水引を組み合わせる  
それぞれの輪と端を引き、中央の組込  
みを締め、形を整える

## 九 掛け緒 (御簾の房、桧扇の房、祭詞袋の飾り等の結び方)

1



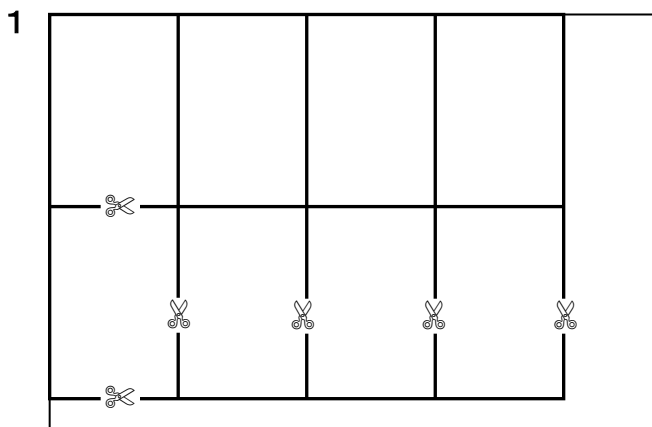
2



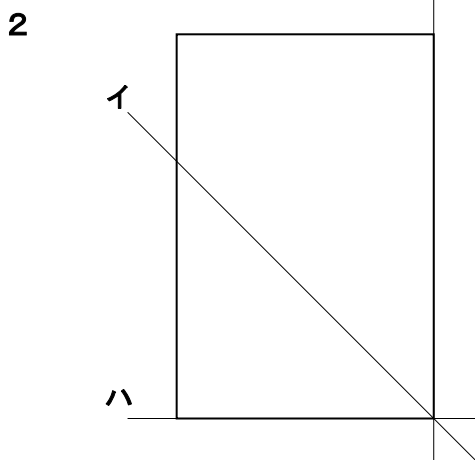
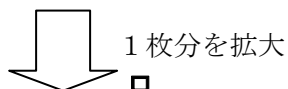


## 十 御神米

おけんざき  
(御剣先) 美濃半紙 400×275



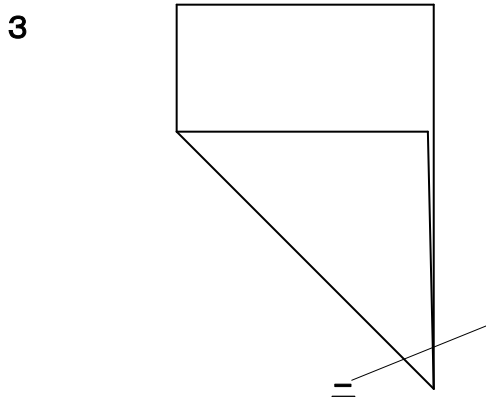
御剣先に相応しい紙を用意する  
本部広前の御剣先用の紙は純粋な和紙で、そのサイズは 85 mm×127 mm  
美濃半紙 (400 mm×275 mm) からは、左図のように 8 枚の用紙が取れる



イの線を折り線として、ハの線をロの線に合わせるように折る

そのときハの線はロの線に丁度合わせず、1 mm程度ひくようにする

(さらに半分に折った時、ハの線がのぞかないため)

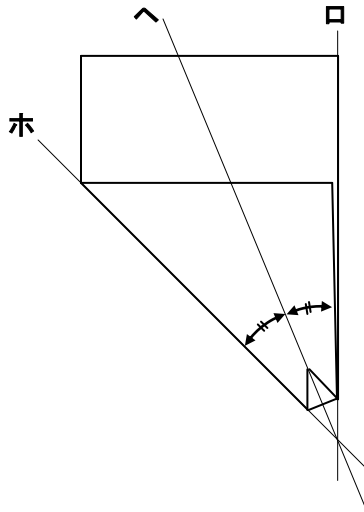


先端をニの線で折る

その時できる三角形は「二等辺三角形」にする

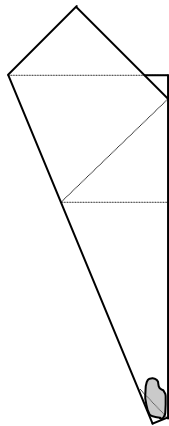
またその底辺の長さは、米粒の幅の2倍程度にする

4



への線を折り線として、ホの線を口の線に合わせるように折る

5



形の整ったお洗米を12粒程度入れる

(本部広前は原則13粒。

12粒は三代金光様のご理解の「1ダース」に由来)

専用のスプーンか匙を用意するとよい

また、最初の1粒は図のように、縦に入る

## (お米の調整)

お米は<sup>せんまい</sup>お洗米を用いる

お洗米の調整は、冬の寒期間に行うのが望ましい

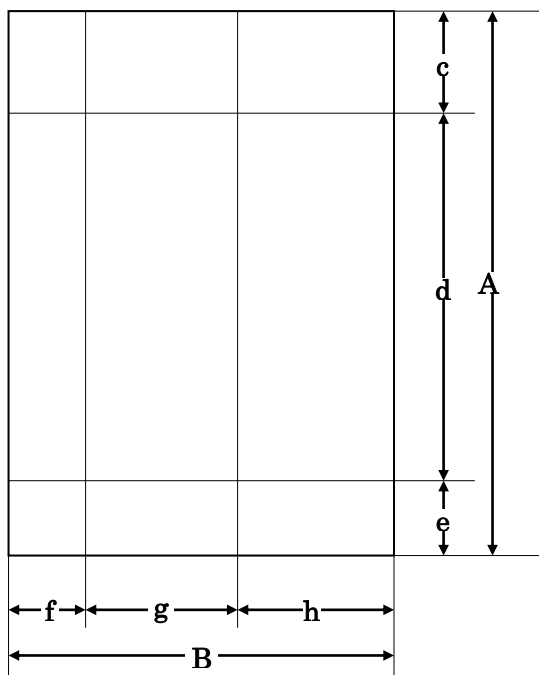
白米を洗い、良く水を切る

陰干しし、乾いたら霧吹き等で御神酒をふくか、改めて御神酒に潜らす

また、陰干しにする

寒期間中に、上の要領で調整したお洗米は割れにくい

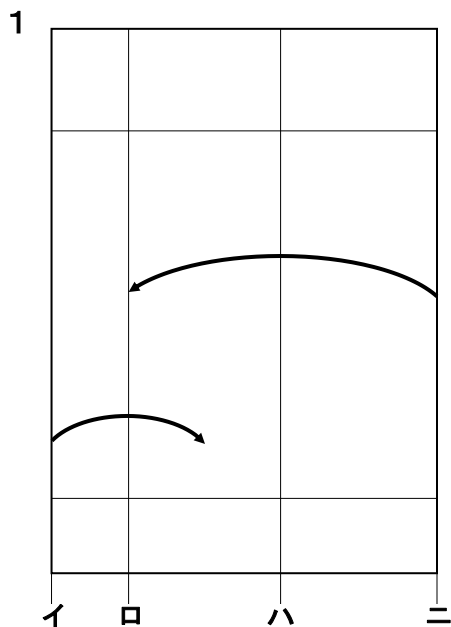
うわづつ  
上包み



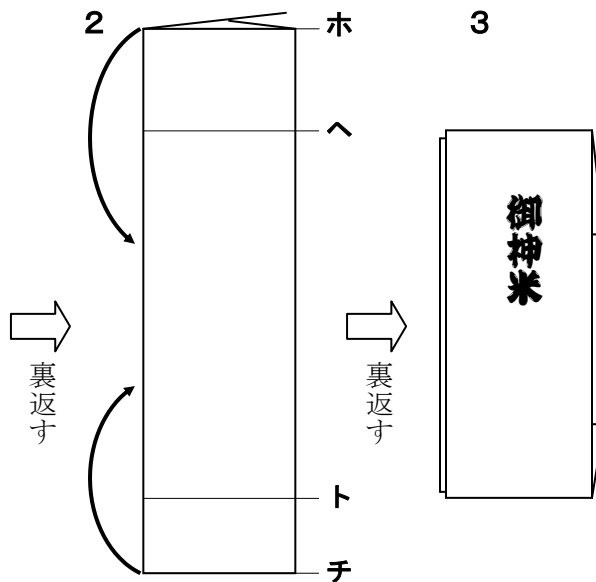
参考として本部広前の上包みの  
のサイズを示す

<b>A</b>	240 mm	<b>e</b>	33 mm
<b>B</b>	170 mm	<b>f</b>	34 mm
<b>c</b>	45 mm	<b>g</b>	67 mm
<b>d</b>	162 mm	<b>h</b>	68 mm

ほぼ半紙の半分の大きさ



裏を上にして、口の線を折れ線  
にして、イの線を内に折る  
ニの線を口の線に合わせるよう  
に内に折る

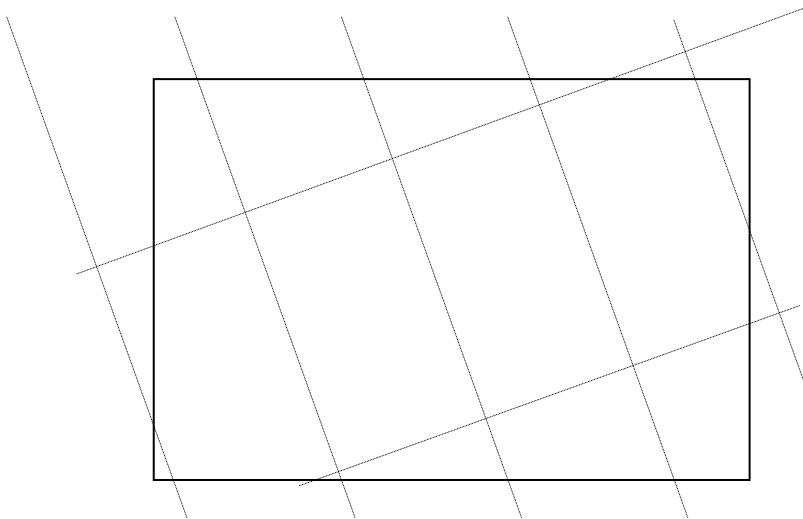


裏返して、への線を折れ線にして、ホの線を内に  
折る

トの線を折れ線にして、チの線に合わせるよう  
に内に折る

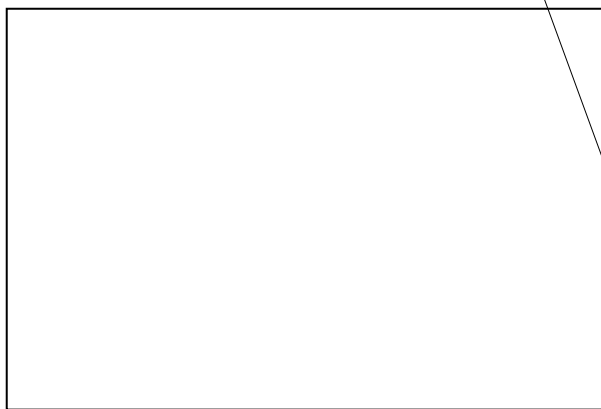
ふたたび裏返して完成

# 十一 御献備のお包み



奉書の半分を用意する  
完成後の折れ線は左図の点線のようなになる  
以下に、この折れ線をつける為の手順を示す

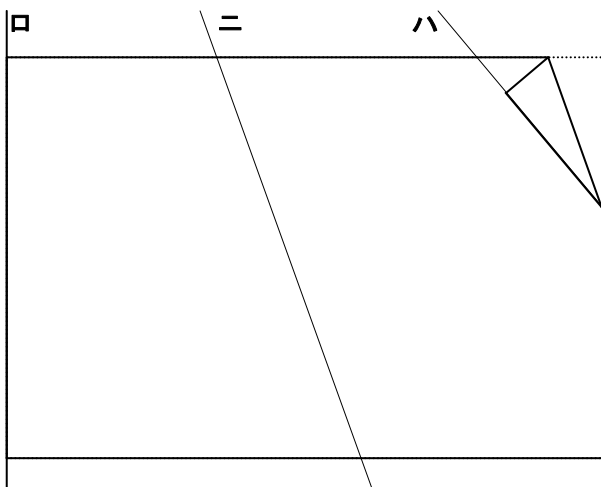
1



完成後をイメージして、裏へ折り返しの三角（のりづけする部分）を最初にする  
イの線を折り線として内に折る

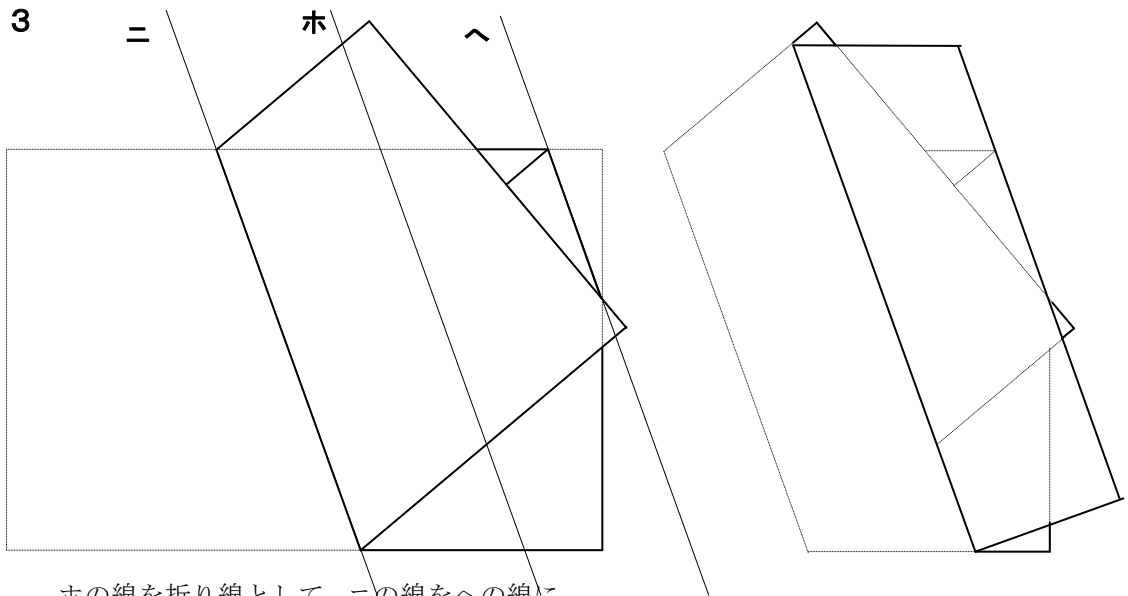
イ

2



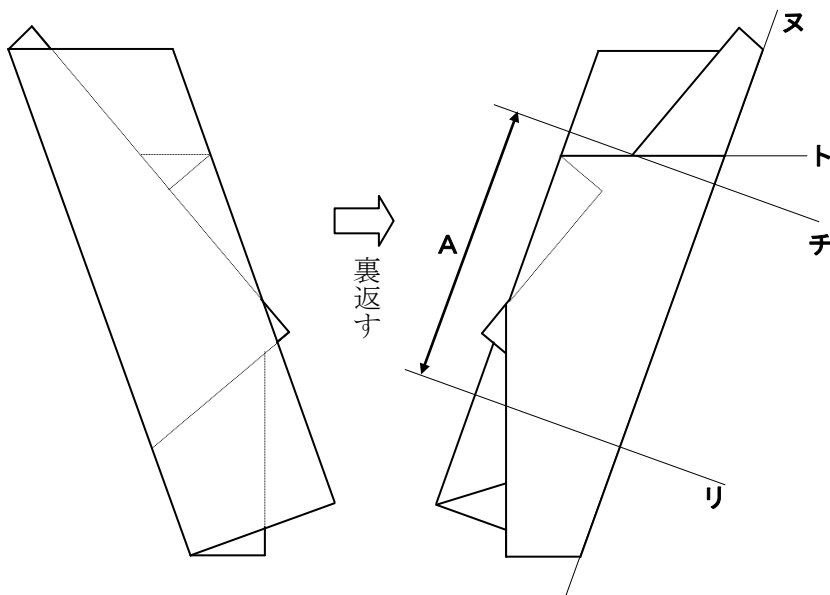
ニの線を折り線として、ロの線をハの線に合わせるように、内に折る

3



ホの線を折り線として、ニの線をへの線に  
合わせるように、内に折る

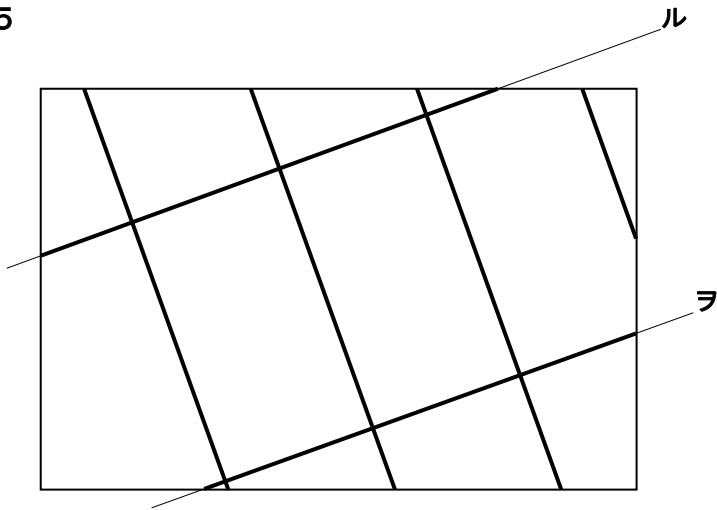
4



用紙のトの線の中央で交わるように、チの線を折り  
線として、上端を内に折る（又の線を揃える）

お札の長さを考慮してAの長さを決め、リの線を折  
り線として、下端を内に折る（又の線を揃える）

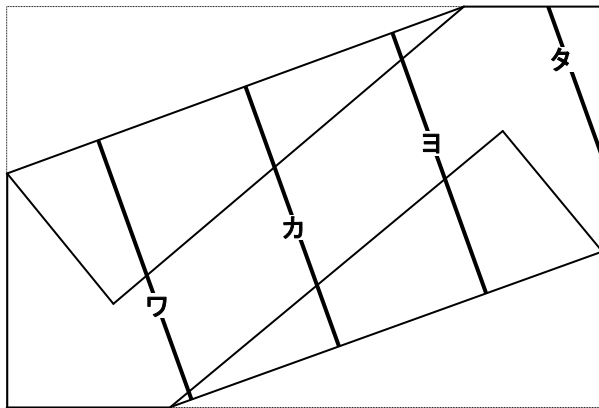
5



一度用紙を広げると、左図の太線のように折り目が出来ている

ルの線と、ヲの線を折り線として、裏を内にして、それぞれ折る

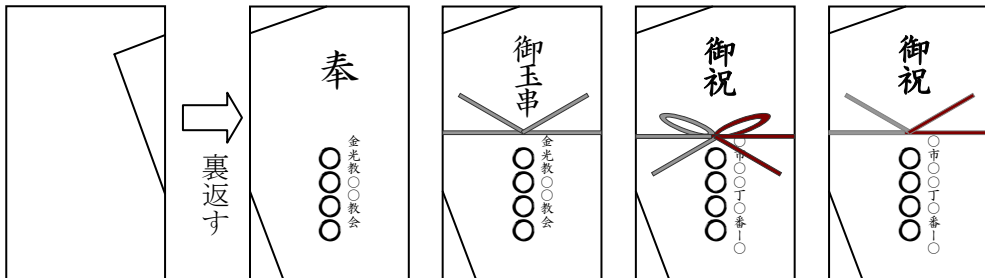
6



ワの線を折り線にして、左の端を内におる

同じように、カの線、ヨの線、タの線の順に折り線として、左端を順に内の折る

完成



応用として、いろいろなお包み（金封）として使える

場面に応じて、表書きをし、麻や水引をかける（一般のマナーにそって結び方に注意する）

水引について：2色の水引には強弱があり、強い色の方が右にくる

例) 銀<金 白<紅 白<黒 白<黄 **金<紅\***

## 付録

### 一 祭服の着付け

#### 1 心得

着付けは一番下から正しく着ることが大切である。すなわち、じゅばん、白衣と正しい順で着付け祭典の間、動作をしても着くずれることのないようにする。

髪をとき、ひげを剃り、手を洗うなど、身体を整える。

白衣、足袋たび、じゅばん等、汚れているようではいけない。洗濯した新しいものを着用する。

上衣、祭帽の形は崩れていたり、ほころびているようではいけない。形を整えておく。

参拝者から見える所で更衣をするのは、無作法である。

祭服を着てから、飲食、喫煙は慎む。便所へ行くのも慎むべきである。(先に済ませておく)

更衣係は口紅等で、祭服を汚さないように注意する。

#### 2 更衣の順

まず、足袋を着ける。(更衣係は、予め足袋を半分裏返しておく)

次に、じゅばん、白衣を着け、白帯をする。

次に、(単を着け)袴、上衣を着ける。

次に、(祭帽をかぶり)笏・桧扇、拝詞集を持つ。

その着付け方を次に示す。ただし、白衣以前は省略する。

#### 3 単ヌエの着付け方(男子のみ)

まず、白衣の背筋に単の背筋を合わせる。

次に、白衣の襟と単の襟とをそろえる。(白衣の襟より単の襟を少し低くする)

次に、下前と上前を正しくかさね、前と後ろに肩幅でひだをとり、紐で止める。(ひだをとる理由は、単には体形に応じたサイズがないため、それぞれの体に合わせるようにするためである)

袴を着用するまでは、袖に手を通さない方が着付けやすい。

#### 4 袴の着付け方

##### (1) 男子

まず、前紐をとり、白帯の高さに合わせる（この時、裾が足のくるぶしのあたりになるようにする）。紐は、出来る限りしわにならないように後ろで交差し、その紐を縦に細く半分に折って前へ回す。

前で紐を交差させ、後ろで結ぶ。（前で交差させる時、紐がしわにならないようにするには、交差した下の紐を、上の紐と重なったところで折り返すようにして後ろに回すとよい。【下図】）また、この時の紐は白帯の幅を目安に回して縛る。尻に紐を掛けたりしない。尻に紐を掛けると、尻から紐が外れ、祭典中に袴が緩み、無作法になる。祭服を着てからは、袴の紐は締め直せない。

次に、後ろの紐を白帯の高さに合わせる（この時、裾の後ろが上がりないようにする。裾は前後水平にする。）

へらが有る場合は帯に差し込む。

紐がしわにならないように、その紐を縦に細く半分に折って前へ回す。

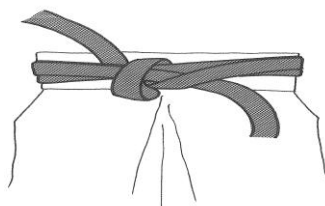
前で紐を交差させ、上の紐を、先に縛った前紐の下を通して、後ろ紐を縛る。紐の端を袴の中に差し込み、始末する。

更衣係が祭員の着付けをする場合は、最後の紐を結ぶ時、後ろ紐を、前紐に二度回し、一度目に回して出来た輪と、一方の端を引き、締める。それから、残りの紐を引くようにすると、緩みにくい【下図】。（ここで単の袖を通す）

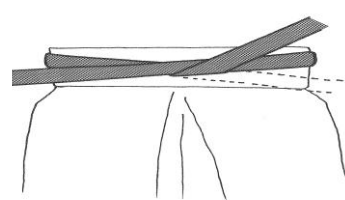
##### (2) 女子

おおむね男子と同じ。（紐を当てる高さは裾を基準に決める）

白衣、袴で御用する場合は、後ろ紐を前で結ぶこともあるが、祭服を着る場合は、祭服のあて帯を結ぶ所と同じにならないよう、後ろで結んだり、前右横にずらして結ぶとよい。



〈後紐を結ぶ時〉



〈前紐の交差〉



## 5 上衣の着付け方

### (1) 男子

まず、単の背筋と上衣の背筋とを合わせ、はおる。

次に、襟を合わせ止める。(上衣によって、止めへとんぼかマジックテープ)が一つの物と二つの物がある)次に、下前に付いている紐と、左脇の内側に付いている紐を結ぶ。この時、紐を余すことなく、付け根で結ぶようにしないと、着付けた後、上前と下前の裾が揃わない。

次に、上前に付いている紐と、右脇の外側に付いている紐を結ぶ。先の紐と同じく、付け根で結ぶ。

次に、下前と上前のくりあげ(着付けた時、前に垂れた部分)を重ねる。そのとき、布地の縫目の線が垂直になるように合わせる。従って、以前の半尻はんじりのように、二枚の端を丁度に合わせるのではなく、上のくりあげから下のくりあげは、のぞくことになる。また、上下のくりあげの折りしわを合わせるとよい。

次に、くりあげを上へ持ち上げ、その間に、あて帯で結ぶ。

あて帯の表裏と上下を間違えないようにすること。表裏の見分け方は、縫しろがある方が裏、つまり体に接する方である。また、縫目の見えない方が表と考えてもよい。上下については、二枚の布地を合わせ、上下に縫目のある場合は上下の区別はないが、一枚の布地を袋にしている場合が、袋側が下、つまり、縫目のある方が上になる。

最後に、単の袖山そでやま、袖底そでぞしと上衣の袖山、袖底を合わせそろえる。(マジックテープがある場合は止める)

上衣の襟より上に、単の襟がのぞいているようにする。

上衣のゆとりの部分は、左右の脇に集め、ひだをとらない。

### (2) 女子

まず、白衣の背筋と上衣の背筋を合わせ、はおる。

次に、白衣の襟と上衣の襟をそろえる。(白衣の襟より上衣の襟をひくようにする)

次に、上前、下前を正しくそろえ、あて帯を前で結ぶ。(本結びして、端を帯に挟むようにして始末をする)後ろ、前ともひだをとらず、布を張ってしわをのばすようにする。

## 二 上衣のたたみ方

着用した上衣にしみ（汗）が残らないように、あと始末をしておく。

足袋、じゅばん、白衣等は洗濯し、次回に備える。

原則は、折りじわを増やさないようにたたむこと。

手のひらであまり撫でないように心掛ける。（できるだけ手の甲を用いる）

### 1 袴のたたみ方

まず、袴の前と後ろの紐の部分を両手でそれぞれ持ち上げ、股の部分の四角い部分が、半分の半分で、三角になるよう整える。（揺すつていると自然に整う）（女子の袴にはない）

次に、袴の後ろを上（表）にし、紐を自分の左側、裾を右側にして置く。（紐の短い方が後ろ）

次に、ひだを正しく整える。

次に、裏返して前を上に向ける。その方法は、左手の甲を袴に付け、袴の帯びと平行になるように、自分の前に差し出す。そして、右手で、袴の前後の紐を同時に持ち、左手の上すれすれを通過するように、右へ横に引っ張る。左手で裾を払うと裏返る。

次に、表のひだを正しく整える。

次に、折り目に合わせ、裾の方を上を折る。（三分の一の所）

次に、紐側の上の一枚（前の部分）を折り目に合わせて上に折る。（三分の一の所）

次に、それぞれの紐を付け根と、先の折り目の位置とで対角に三つ折りにし、左右の紐は交差する。

次に、残りの後ろの部分の部分を折り目に合わせて上に折り、さらに、紐の幅だけ折り返す。その二本の紐を腰の芯の幅で折り返す（芯に添って）

最後に、それを元に戻す。

たたんだ袴を持つ時は、紐の芯の部分を両手で挟み持つようにする。他の部分などを持つと、折りが崩れる。

### 2 単のたたみ方

単は袖からたたむと覚えておく。じゅばんや洋服のように身ごろからたたむと折りじわを増やすことになる。

### 3 上衣のたたみ方

#### (1) 男子

先ず、前を上(表)にして置く。  
次に、片方の袖を、縫目が折れ目になるように、二つに折り、袖の前と後ろの部分を整える。  
次に、もう一方の袖を同じように整える。  
次に、後ろ身頃に、下前を合わせ、同じ様に上前を合わせる。  
次に、両方の袖を脇の所で折り、下前、上前に合わせる。(この時肩の折れ線はそろろう)。  
次に、裾の方を上にして、半分におる。  
最後に、紐のしわを伸ばして、適当な幅で折り返して始末をする。  
紐が、単と離れている時は、別々にならないように、単の中に挟んでおくとよい。

先ず、前を上(表)にし、衿元を自分の左側に置き、襟を合わせ止める。背のひだを整える。  
次に、下前を整える。裾を合わせ、脇のひだの部分を合わせ、肩を折り目に合わせて正しく折る。最後にくりあげを折り目に合わせて裾の方に折る。  
次に、同じ様に、上前を整える。左右の紐が外に出ないように内に挟む。(着る時のように、下前と上前のくりあげを同時にたたむ必要はない)

次に、両方の袖を脇で折り、下前、上前にそろえる。  
次に、折り目に従って三つに折る。

最後に、あて帯を芯に添って折り返し、たたんだ上衣の中に挟む。

#### (2) 女子

おおむね、男子と同じ。くりあげの始末がないだけである。  
最後に、あて帯を芯に添って折り返し、たたんだ上衣の中に挟む。

**唱詞**——終祭、火葬の儀の際、次の唱詞を用いることもできる。

(1) 霊神唱詞（終祭及び改式祭等の霊壘奉遷時に唱える）

あはれ○○の霊神（たち）。

今よりは生神金光大神御取次のまにまに。

天地金乃神のみ徳こうむり。

いよよ霊の道立てみ受け給え。

(2) 火葬の儀唱詞

あはれ○○の大人（敬称）はや。

なごりは永久に尽きねども。

今し神みはかりにゆだぬれば。

み心やすらに神の御許に立ち帰りませ。



16.墓前祭執行の 有 無	墓地の所在地						
17.葬儀社の名称と連絡先							
(ふりがな)							
18.葬儀委員長							
1) 氏名	関係						
19.弔辞 ( ) 名 2) 氏名	関係						
20.弔電 ( ) 本 披露の 有 無							
21.日程	終祭	年	月	日	午前／午後	時	
	告別式	年	月	日	午前／午後	時	
	出棺	年	月	日	午前／午後	時	
	旬日祭	10日祭	年	月	日	午前／午後	時
		20日祭	年	月	日	午前／午後	時
		30日祭	年	月	日	午前／午後	時
		40日祭	年	月	日	午前／午後	時
	合祀祭(50日祭)	年	月	日	午前／午後	時	
	1年祭	年	月	日	午前／午後	時	
	( )	年	月	日	午前／午後	時	
22.故人の略歴 (学歴、職歴、信仰経歴、褒賞等、祭詞の盛り込むこと)							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							

申請儀式調査票 葬儀式・霊祭 年 月 日調査			
1.儀式の種類			
(ふりがな)		(ふりがな)	
2.戸籍名		3.霊神名	
4.生年月日	年 月 日	5.帰幽年月日	年 月 日
(ふりがな)	都道	郡	
6.出生地	府県	市区	町村
(ふりがな)	都道	郡	
7.帰幽地	府県	市区	町村
(ふりがな)			
8.死因(病名)			
(ふりがな)		10.結婚の年月日	
9.配偶者(又はその霊神名)		年 月 日	
(ふりがな)			
11.両親の氏名、続柄		父 母 の( )男女	
(ふりがな)			
12.配偶者の両親の氏名、続柄		父 母 の( )男女	
(ふりがな)			
13.喪主、喪婦の氏名			
(ふりがな)(喪主と異なる場合)			
14.申請者の氏名と霊神との続柄			
連絡先			
15.家族の状況(家族構成、氏名、年齢、近況等特記しておくこと)			
.....			
.....			
.....			
.....			
.....			
.....			
.....			

(結婚) 2 / 2

(ふりがな)	
8.媒酌人氏名 媒夫	媒婦
9.媒酌人の住所	新夫婦との関係
10.結婚式場	
11.指輪 交換 贈呈 無	
12.式中の親族紹介 有 無	
13.参列者の氏名、続柄	
新郎側 氏名 ( 続柄 )	新婦側 氏名 ( 続柄 )
[01] .....	[01] .....
[02] .....	[02] .....
[03] .....	[03] .....
[04] .....	[04] .....
[05] .....	[05] .....
[06] .....	[06] .....
[07] .....	[07] .....
[08] .....	[08] .....
[09] .....	[09] .....
[10] .....	[10] .....
[11] .....	[11] .....
[12] .....	[12] .....
[13] .....	[13] .....
[14] .....	[14] .....
[15] .....	[15] .....
[16] .....	[16] .....
[17] .....	[17] .....
[18] .....	[18] .....
[19] .....	[19] .....
[20] .....	[20] .....
[21] .....	[21] .....
[22] .....	[22] .....



(結婚) 1 / 2

申請儀式調査票		結婚式		年	月	日	調査
新郎 (ふりがな)							
1.氏名		2. 生年月日		年	月	日	
(ふりがな)	都道	郡					
3.出生地	府県	市区	町村				
(ふりがな)	都道	郡					
4.現住所	府県	市区	町村				
(ふりがな)							
5.勤務先 (役職)							
(ふりがな)							
6.両親の氏名、続柄		父	母	の ( ) 男			
7.新郎の現状 (学歴、信仰経歴)							
.....							
.....							
.....							
新婦 (ふりがな)							
1.氏名		2. 生年月日		年	月	日	
(ふりがな)	都道	郡					
3.出生地	府県	市区	町村				
(ふりがな)	都道	郡					
4.現住所	府県	市区	町村				
(ふりがな)							
5.勤務先 (役職)							
(ふりがな)							
6.両親の氏名、続柄		父	母	の ( ) 女			
7.新婦の現状 (学歴、信仰経歴)							
.....							
.....							
.....							

(建築)

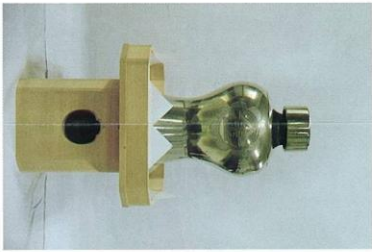
申請儀式調査票		建築関係		年	月	日	調査
1.儀式の種類 (地鎮祭、起工式、上棟祭、竣工式等)							
(ふりがな)							
2.施主、連絡先							
(ふりがな)							
3.施工者、連絡先							
4.建築物 使用目的： 建築構造： 建坪：							
(ふりがな) 都道 郡							
5.建築地 府県 市区 町村							
6.工事日程 地鎮祭 年 月 日							
棟上予定 年 月 日							
竣工予定 年 月 日							
入居・開業予定 年 月 日							
7.施主及び家族の現状 (家族構成、氏名、年齢、近況等特記しておくこと)							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
8.準備物の分担							
神饌 : 教会 / 施主 / 施工者							
玉串用榊 ( ) 本 : 教会 / 施主 / 施工者							
盛り土 (砂) : 教会 / 施主 / 施工者							
祭壇 : 教会 / 施主 / 施工者							
鍬又はスコップ : 教会 / 施主 / 施工者							
笹と荒縄 : 教会 / 施主 / 施工者							
9.祝賀会の 有 無							



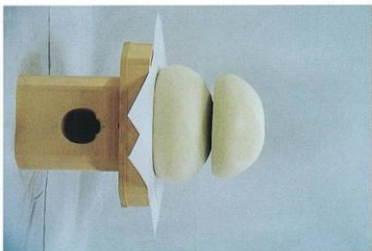
神饌の完成見本



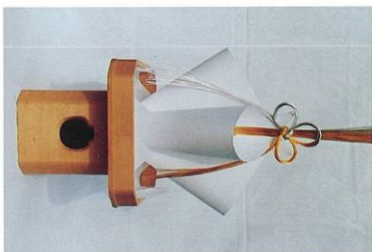
(6) 乾物



(4) 神酒



(2) 鏡餅



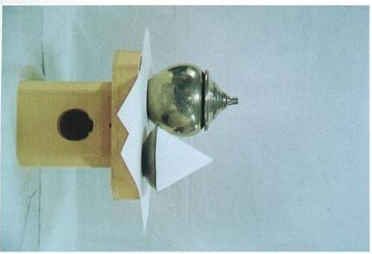
(1) 御饗袋



(3) 神酒



(5) 魚(鯛)



(12) 塩水



(10) 果物 2



(8) 野菜(黒物)



(7) 野菜(白青物)



(9) 果物 1



(11) 菓子

**祭式教本 副読本**

平成二十年十二月二十五 備前市三石401 川上幸生 発行

著作 文・図 三石教会 川上幸生

挿 絵 本部在籍 岡田信義